

美しき国の物語



藤波 紫

実世界とは別の、神々と自然と人間がともに手を携え共存している異世界があった。

そこは光と愛と平和に満ち溢れている、理想郷と呼ぶにふさわしい場所。人々に貧富の差などなく、皆、幸福に暮らしているという。

「伝説の都」「人がなくした古の記憶」「永久の国」果たしてどれが真実なのか。

その昔、一人の若者が偶然その国に迷い込み、その国の美姫と恋に落ちた。

彼女はその国の秘儀を伝える名家の後継者だった。とはいえ、すでにその秘儀は、彼女の一族にさえも忘れ去られており、家にあるとても美しい小さな金庫に入っているままであった。

しかし、確かに代々伝わっている門外不出の「何か」であり、決して途絶えさせてはならないと、何代も前の先祖から伝えられてきた事柄である。一族の当主は、その二つを大切に守り続けていた。

そのために彼女の血族は、よそ者である若者と彼女の交際に対抗した。だが、お互いに運命を感じていた若者と美姫は周囲の反対を押し切って駆け落ちをした。

彼女の一族はその若者をよそ者として処刑をし、後継者でありながら一族の掟を破った姫は、人目のつかない場所に一生隔離するために二人を追跡しようとした。何故ならば、その国は絶対に他国との姻戚関係を持つ事が許されない国だったから。

「時代は変わったのです。若い二人の幸せを願いましょう。そして我々は、再び目覚める時が来るまで深い眠りにつきましょ。いえ、つくべきなのです。 悲しい事ですが、現在の人々は我々を必要とはしません。それも時代の流れでしょう。これは私達四人の決断です。」

王のこの言葉で、その国は神秘のベールを被ったまま人間の記憶から消えていった。

「伝説の都」「人がなくした古の記憶」「永久の国」...「美しき都」

そして、一族から逃げ切った若者と美姫は幸せな家庭を持ち、女の子が生まれた。

時は過ぎ、再びこの伝説の国が目覚めようとしていた。

はるか古の頃、その国は確かにあったという。

神々がいて、自然と人間が調和し、光があふれ、幸せな笑顔に満ち溢れている美しき国。

四人の美しい王に守られ、貧富の差がなく、笑顔が絶えず、争いのない平和な国。

花が咲き乱れ、暖かい日差しに包まれ、人間が穏やかに暮らしているこの世の理想郷。

自然と会話をし、光の妖精と戯れ、静かな木陰のゆりかごに抱かれて眠る。

それは子供の頃に信じていたファンタジーさと人は言う。

都会の冷たいコンクリートと人々に囲まれ、強い者だけが生き残り、弱い者はつぶされる。だからこそ人々は強く生きようと暗躍する。自分の平穩のために。そして生き残っていく事が現実、それこそが現代のファンタジーだと人は言う。確かにあった「それ」は文明の発達と共に人間の記憶から薄れて泡沫のように消え去る...

豊かな大地はアスファルトという土になり、色鮮やかな花々は夜のネオンという華と化し、光の妖精は本だけの存在、静かな木陰は自然の中にもはや一部残るだけである。

人間はいつからそんな生活を望むようになったのだろうか。

そして「かの美しき国」は沈黙したのである。

お前はどこにあるのか

かつて神々が大地にたたずみ微笑んでいた美しき国

人間と自然が調和していた伝説の都

幸福の国

大いなる太陽に見守られ

優しい月の光に抱かれて眠る

人々は太陽とともに目覚め神々に祈りをささげる

暖かい昼の日差しを頬に感じ生命の輝きに感謝する

夜のやわらかな白い月光が人々に安息と優しいまどろみをもたらす

恋人達は花の中で愛を語り、優しいキスをそっと交わす

かぐわしい花の香りとともにその幸せを噛み締めながら

神々は願う

この時よ 永遠なれと...

(ル・フェロー家の古文書より 作者不詳)

「ご機嫌様。」

あちらこちらで挨拶が交わされ、美しい荘厳な鐘の音が鳴り響き、今日1日の授業が終了したことを告げる。ある者は放課後のクラブ活動へ、またある者は寮に向かう。

毎日そんな穏やかな光景が展開されているここは、東京郊外に位置する全寮制の、とある女学院。幼稚舎から大学部までの一貫性教育を行っている由緒正しいお嬢様学校である。

東京とは思えないほど豊かな自然に恵まれているその学院は、高台に位置しており、同じ土地内に森や美しい湖、花畑、小高い丘（もちろん人工で作られたものである。）があり、はたから見れば、ちょっとしたリゾート地のようなのである。かといって、とんでもない田舎という理由ではなく、学院の表門を出ればすぐに大きな道路があり（表門はその道路に面して建てられている）流行の服が陳列されたファッションビルや、シャネル、カルティエといった有名ブランド店、感じの良いおしゃれなカフェ、様々な商社が入っているオフィスビル、インターネットカフェやカラオケBOXといった娯楽施設も建ち並んでいる。そのため、学校が休みの土曜日や日曜日、祝日には生徒達が街に繰り出して青春を謳歌しているようである。

「明日は土曜日ね。寮長に外泊届を提出して、ショッピングでもしませんこと？その後は、リュ・ド・ミーレでお茶でも飲みましょう。」

「あら素敵。そういえば、カルティエが新作の時計を発表したのよ。私、購入したくてお父様におねだりしているの。」

「ご自分のカードは持っていないの？」

「もちろん持っているわ。でも、時計とかアクセサリはやはりプレゼントでないと。」

「それもそうね。あら桜木さん、ご機嫌様。今 皆さんとショッピングしましょうとお話していたのよ。あなたもいかが？」

「せっかくですけれど私は用事がありますので。」

「あら断るなんて失礼な人ね。せっかく雅様がお誘いしているのに。」

「そうよ。あなたの用事なんてどうせ大した事ではないでしょう。その用事自体、本当にあるのかしら。」

「およしなさい。庶民には庶民なりの用事とやらがあるのでしょう。所詮、私たちにはわかりかねること。さぁ皆様参りましょう。」

有園 雅とその取り巻きは、桜木 美麗を一瞥するとその場から離れていった。美麗はその様子を見届けてからため息をつく

やれやれ。

有園 雅は日本で5本の指に入るほどの大財閥、有園家の1人娘である。ゆくゆくは婿を取り、その莫大な財産を受け継ぐことになる。一方、桜木 美麗の父親は一介の言語学者にすぎない。もちろん名声はあるが、その名声もほんの数年前に得たばかりである。それまではごく平凡なサラリーマンだった。それなりに財はあるが、所詮、研究者である。ゆえに手元に入ってくるお金はたかが知れている。そのため、彼女がこの学院の生徒という事はあまりにも似つかわしくないだろう。

だが先に述べたように、財はなくても名声がある。そして、その名声のきっかけとなった言語に世界中が注目するようになり、各国の名士や資産家より講演の依頼や、代々残っている家の古文書の解読依頼が殺到した。えてして、そういった上流社会の人々はそのレセプションとして必ず盛大なパーティーを開催している。

つまり彼らが開催するパーティーは夫人同伴が常識なので夫婦で世界各国を飛び回っているのである。

もちろん目が離せない幼い時期は彼女も両親と行動を共にしていた。だが、娘の将来の事を思い、義務教育が終了した高校1年のこの時期に、全寮制の聖マリアンナ女学院に転校させたのだった。

この学院は幼稚舎から大学部までの一貫性教育である。それ故、独特の世界観があり、幼稚舎からその身を置いている生徒たちは、外部から入ってきた者に対して戸惑いや違和感を抱いているように見えた。ましてやこの学院で学んでいるのは、セレブな世界に身を置いている、一握りの少女達ばかりである。ポディーガードや執事がいないということ自体が不思議な位だ。

一貫性教育とはいえ生徒数は、他の公立や私立の学校に比べると極めて少ない。

もともと桜木 美麗は人付き合いが得意ではないので、自らクラブ活動等に参加して、積極的に友人を作ると言うことが苦手だった。それでも友達はできたが、彼女の友達もまた上流階級に属している少女達ばかりである。だが有園 雅のように彼女に対して偏見を持っていない。

むしろ初めに友達になりましようと言われた時、ためらいを隠せず、躊躇したのは彼女自身だった。

「美麗！ やっと追いついた。本当に足が速いわね。追いつくのがやっとだわ。」

「ごめん。どうしたの？ 部活に遅れちゃうよ。」

「うん。その部活なのだけど、よかったら美麗も入らない？ 新入部員募集中だよ。」

「優香ちゃんって何部だっけ？」

「乗馬部。結構人気があってなかなか入部はできないのだけど今回1人だけ欠員が出たの。それで美麗はどうかなあと思って。美麗って馬とか動物とか好きだから。」

「馬は好きだけど初心者だし。確か、乗馬の経験がある事が条件だったよね？」

「前に乗った事があるっていったじゃない？ それなら大丈夫よ。別に障害物競走とかに出場するわけではないから。確か何もクラブ活動はしていなかったよね？」

「ありがとう。とても嬉しいわ。でも馬に乗ったのは、私が3歳か4歳位の時だったから必ず大人の人と一緒にだったもの。乗馬の経験があるなんてものじゃないわ。かえって皆さんに迷惑をかけてしまう。ごめんね。」

「そうかあ。残念だな。それならせめて見学に来ない？」

「そうだね。じゃあ講堂によってから見学に行くわ。確か講堂の近くに馬場があったよね。」

「講堂まで一緒に行こう。部室も講堂の近くにあるから。」

2人は仲良く歩いて行き、後でねと言葉を交わして別れた。

美麗はこの講堂が大好きなのだ。中世のヨーロッパを思わせるような造りで、見たものを跪かせずにはいられないような威厳があり、それと同時にとても美しい。何よりもお気に入りなのが、講堂のスタンドグラスである。それを見るだけで心が癒されるのだ。

美麗は弱音を吐くことなどめったにない少女である。それでも、両親と離れている淋しさを感じてどうしようもない時があった。そんな時は必ずここにくるのだ。講堂の中央に設置されている、美しい大理石のマリア像の優しい微笑みは母を思い出させるから。

この学院は講堂に限らず、校舎も中世ヨーロッパの宮殿のような造りになっており、そこの一角だけ時間が止まってしまっているように見えた。かといってその中かというと、教室には各生徒1人に対して1台のパソコンが設置されており、あらゆるものがコンピューターで管理されているという近代的な顔を持っている。もちろん授業もコンピューターを利用したものである。中世と現代が上手く融合している不思議な学院だ。

美麗は講堂の本堂ではなく、横にある小塔の上に登るつもりだった。そこから眺める学院は、昔母が子守唄代わりに話してくれた大好きな童話の世界そのもののような景色なのだ。

美しい花が咲いている小さな丘、澗みなど一切ない美しく澄んだ小川や池の水。そこだけきらめいて、ま

るで光を集めたかのように見える。そして、今にも一角獣が現れそうな神秘的な森。全て人工的に造られているということは承知の上なのだが、それすらも忘れてしまうほどである。

彼女は心躍らせながら階段に向かった。螺旋状の階段を上りきると、美しい凝った造りの彫刻が施されている小さな扉が見えてくる。

「え...何？」

美麗は、いつものようにその扉を開いて外に出ようとした瞬間に、柔らかいペールのようなものを感じた。だがあまりにも一瞬だったため、その感触はすぐに消えた。暖かい日差しを顔に受けて一歩踏み出した時、突然目の前に光の道があらわれた。気のせいかと大きく瞬きをして、もう一度前を見た。

するとそれは光の道ではなく、よく整備されたまっすぐな道で、その先には美しい城があった。周りを見るときちんと植林された木々があり、その城の領土内であることがわかった。

「いったいここは...。」

疑問を持ったのも束の間、とにかく城に向かって歩いて行くことにした。

そこは春のように暖かくその穏やかな日差しは光っていた。まさしく<光っている>のである。目を凝らしてみると、その光の中で小さな妖精達が楽しそうに戯れている。ふと視線を感じて木を見ると、美しく澄んだ瞳の白い一角獣が彼女を見つめていた。驚いて一歩後退りをする、空気のようなものにぶつかった。

「ごめんなさ...！」

“ヘイキ。ワタシハしるふいーどダカラ。”

シルフィード？ って空気の精霊よね？

その心を読んだかのように、それはふっと姿が消えた。美麗は地に足がついていないように感じて下を見ると、白い鬘と銀の角が視界に飛び込んできた。いつのまにか彼女は一角獣の背に乗っていたのである。

確かに美麗はファンタジーが好きだが、あまりにも非現実過ぎてパニックを起こした。とうとう頭がおかしくなってしまったのかとあせりまくる。確か自分は講堂の横にある小塔に登っただけのはずなのに何故？

“ベツニ怖ガル事ハナイ。オ城ニ連レテイッテアゲマショウ。トイッテモ庭園ニイクダケデスガ。”

「ちょっと待って！ここはいったい何処なの？私は本当に頭がおかしくなってしまったのかしら？こんな世界があるわけないわ」

“何処？オカシナコトヲ言イマスネ。ココハとうじゅーる国”

「トゥジュール？聞いた事ないわ。」

“馬鹿ナ事ヲ言ワナイデ下サイ。本当ニ知ラナケレバ、ココニ来レルハズガアリマセン。サアツキマシタヨ。私ハコレデ”

「ちょっと待って！」

そういうと一角獣はあっという間に去って行ってしまったので、美麗はただ1人取り残されてしまった。不安でいっぱいになり泣き出してしまいそうにもなったが、とにかく最初の道に戻らないといけないと判断し、歩いてみる事にした。

庭園といってもそこはとても広く、どちらにいけば出口なのかがまるっきりわからない。花が大好きな美麗にとっては、これが正常な状態であれば、様々な花が咲いており、美しく整備されているこの庭園はとても楽しく幸せな気持ちになれるだろうが、今はそんな余裕がない。出口はどこなのだろうか？おまけにいくつも庭園があるのだ。

「いったい庭園は何個あるのかしら？」

歩き回ったあげく、ある庭園の門前に着いた。そこは今まで通ってきた庭園の中でも、一番規模は小さいのだが、最も美しかった。

小さな池があり白い水鳥が優雅に泳いでいて、数種類のバラのアーチがあり、青々とした若葉の芝生が敷き詰められている。どうやら城の前にたどり着いたようである。とても凝った彫刻が施されている門の前には白い道があり、それは城までまっすぐに伸びている。美麗がその美しさに心奪われていると、音もなく門が開いた。まるで美麗を歓迎しているかのように。

恐る恐る足を踏み出すと、開いた時と同じように音もなく門が静かに閉まった。あわてて後ろを向いて門の柵に手をかけようとしたのだが、そこに門はなくなっていた。消えてしまったのである。

美麗は恐怖のあまりその場に座り込んでしまった。

「何で？ いったいここは何なの？ 現実なの？ 私はどうすればいいの...。」

怖くてたまらない。自然と涙が溢れてきた。

「泣かないで。あなたを怖がらせるつもりはないのだから。」

その声に驚き顔を上げると、そこには見た事もないほど美しい人が立っていた。その人は涙にぬれた美麗の頬を優しく拭うところだった。

「私の城へようこそ。泣き虫のお嬢さん？」

「どうかしましたか？」

「いいえ、何でもありません。」

「おかしな子だ。もういっぱいバラのお茶はいかがですか？」

「いえ、もう結構です。」

「そう？では、私1人で。」

美麗はこの世のものとは思えないほど美しい容貌をもったその人の優雅な仕草を見つめた。時々、小さな光の妖精が目の前にいる美しい人の周りで戯れている。小さなかわいらしい妖精を優しく見つめる黒い瞳。見た目よりも筋肉がついているようにみえる腕にしがみつき、何かをねだると、そっと手を広げ小さなお菓子を差し出す。それを喜んでほおぼる小さな光の妖精たち。あまりにもかわいらしい仕草に美麗もふっと笑みが漏れる。笑みを浮かべている美麗を見つめて、その人が微笑む。美麗は恥ずかしくなり思わず下を向いた。顔が熱く赤くなっているという事が自分でもわかった。ヒミキと名のつたその美しい人は城主であった。

門で会った後にこの城へ招待され、戸惑いと不安にかられながら、城への道を歩いている間中、シルフィード達は空高く優雅に舞っていた。城に着くと美しい女性たちが城主の世話をしようと待っていた。ある者はその上着を取り、また別の者が手洗いの桶を持ってきた。そして最後に最高の責任者と思われる女性が城主の剣を受け取った。そして美麗に着替えをさせるように指示した。美麗は抵抗したが、美麗が着ている服は無粋だとほぼ強制的に着替えさせられた。確かに城の中で学校の制服は似合わないだろう。だけど強引過ぎると少し腹が立った。自分は好んでこのトゥジュール国という世界に来た理由ではないのだ。しかし美麗も年頃の少女である。やわらかく光沢のある美しい絹のドレスを身に着けた瞬間にそのちょっとした怒りは収まってしまった。しかも超美形の城主に、とてもよく似合うといわれたらそんな気持ちなど何処かにとんでいってしまうだろう。

ヒミキ自身もくつろいだ服に着替えていたが、それは服というよりガウンのように見えた。銀色の布で作られているそれは、軍服のように、袖口と立襟部分に金色の糸で細かい刺繍が施されていた。襟の中心には、額飾りとピアスと同様の見事な黒真珠がはめ込まれている。とてもシンプルなデザインだが、ヒミキのその並はずれている美貌と高貴さをいっそう際立たせていた。

「あの、質問してもよろしいですか？」

「どうぞ。」

「ここは何処ですか？トゥジュール国という国は聞いた事がありません。それにシルフィードや光の精、一角獣までいるなんて...。全て架空のものだしファンタジーの世界だけに存在するものでしょう。」

この言葉に今度はヒミキが驚いた顔をして困惑した表情を見せた。

「この国を、トゥジュール国を知らない？」

「はい。あの、確かに私はファンタジーが大好きです。でもファンタジーはファンタジーで幻想の世界でしょう？現実にあるなんて信じられない。それとも私の頭がおかしくなってしまったのでしょうか。」

「頭がおかしい？そんな冗談をいうなんて。」

そう言うとヒミキは美麗を見つめた。しかしその顔に冗談を言っている様子は見えない。

「おかしいですね。ここに来られる人はここに住人意外いないはず。美麗、ひとつ教えて下さい。あなたは何処から来たのですか？場合によってはあなたの世界とやりに帰せないかもしれない。」

「そんな！困ります！」

「私も困ります。教えてください。何処から来たのですか？」

「ご存じないと思いますけれど 聖マリアンナ女学院という学校の講堂の横にある小塔から来てしまったんです。」

「聖マリアンナ…。いや参ったな。」

「ご存知なのですか？」

「まあね。」

そういうと苦笑のような苦笑を浮かべた。美麗の頭の中はよけいに混乱した。どういうことなのか。どうやらこの様子だと学院の事を知っているようだ。

「私は帰る事ができるのですか？」

「もちろんです。私がちゃんと送りますよ。しかし、あそこに行く生徒がいるとは思わなかったな。私のミスだ。」

いけないとでもいうように、美麗を見つめるとその顔には不安な表情が浮かんでいた。

「送って下さるって本当ですか？」

どうやら最後の言葉は聞こえていなかったようである。ヒミキはほっと胸をなでおろす。

「ええ。嘘はつきませんから安心して下さい。ところで、ここは気に入りましたか？」

美麗はその言葉に表情を明るくさせて嬉しそうに頷いた。

「とても素敵な国です。シルフィードや光の精や一角獣がこの目で見られるなんて思いませんでした。こんな素晴らしい夢なら何度でも見たいです。友人からみれば現実逃避といわれるでしょうけれど。」

「夢ではありませんよ。そんなに気に入ってくれて私も嬉しいです。まだあなたのような人がいてくれたのですね。それだけで救われました。」

「救われるって？何か悩みでもあるのですか？こんなに美しい場所にいるのに…。」

「そう辛い事がね、あるのですよ。」

「辛い事…。」

ふっと笑うとヒミキは美麗の手をとり、椅子から立ち上がらせた。

「心ゆくまで楽しんで下さい。馬に乗れますか？」

「私が3歳か4歳位の時に大人の人と一緒にしか乗っていないので、1人で乗る事は無理だと思います。」

「それならば一緒に乗りましょう。この国を案内しますよ。」

「とても光栄ですが時間が。」

「この国に何年いようとあなたの世界の時間はここに迷い込んだ時から1秒たりとも変わっていないのですが、でもそうですね。あなたは不安だと思いますので送りましょう。」

そういうと美麗を自分の方に引き寄せた。女性的な美しい容貌とは裏腹に、その胸は鍛えているようにたくましかった。ちょうど胸に包まれるような状態となり、美麗は嫌でも顔が赤くなる。胸も爆発しそうにドキドキである。

ヒミキは呪文のような言葉を唱えている。時々聞こえてくる言葉というよりも音のようなそれは、西洋的な世界とは裏腹に東洋的な呪文であった。かといって全てが東洋的ではなく、実に不可思議なものであった。何を言っているのか美麗には皆目わからないが、玄武という言葉は聞こえた。美麗は、どこかで聞いた事があるような言葉だと思い、それを思い出そうとした瞬間にまぶしい光に包まれて意識が遠のいてしまった。そして、その直前にヒミキの声が聞こえたような気がした。

“美麗、あなたは忘れると思いますが、私とすぐに会う事になるでしょう。あなたの世界で”

美麗はいつものようにその扉を開いて外に出た。やわらかく暖かい日差しを全身に感じながら大きな伸びをした。

「気持ちいい！やっぱりこの時間のお日様は最高！あら？でもさっき、一度外に出たような気が...？気のせいね。」

そうつぶやくと、眼下に広がる学院の景色を堪能する。15分ほど見つめてから小塔を下りると隣の講堂へ向かった。いつもなら寮の門限ぎりぎりまでそこにいるのだが、今日は優香との約束を思って引き上げる事にしたのである。

講堂に入るとまず聖母マリア像の前に膝き祈りを捧げる。その後、柔らかく美しい光を放っているステンドグラスを見つめ、満足げな大きい溜息をつくと優しい微笑みを浮かべた。そして講堂を出るとゆっくりと馬場に向かう。

馬場につくとその光景におもわず驚愕した。何故か1ヶ所だけ、全校生徒の半分の人数がいるのではないかと思う程の長蛇の列になっていたからである。

「美麗。」

優香は美麗に気がつくとも側まで近寄って来た。良家の娘らしい上品な乗馬服に身を包んだ彼女は、いつものかわいらしさを感じさせないほど凛として大人っぽく見えた。

「優香ちゃん。あの恐ろしいほどの列は何事？」

「皆、この入部希望者よ。ちょっと迫力よね。」

「また何で？」

「実は新入部員の募集は公にされていなかったの。欠員が出るとは思っていなかったから。それで部員全員が、部長から誰かいないかと相談を受けていて、美麗の事を思い出した私が1番早く部長に推薦したのよ。部長も期待していたみたいだけれど美麗が断ったので仕方なく告知したの。そうしたらあのさまよ。こうなるとは予想していたけれど、さすがに私もこれ程とは思わなかったわ。やっぱり氷美城先輩の人気って尋常じゃないわね。という私もお慕いしている1人なのだけど。あれ？何でそんな不思議そうな顔をしているの？」

「ごめん。理解不可能な言葉だったから。その氷美城先輩って誰？それにお慕いって...。」

「ええー？何言っているの！北山 氷美城先輩よ！高等部2年で現生徒会長兼寮長。通称メタリナの君！白銀のバラの君。」

「といわれても...。」

「あっそうか。美麗は外部から転校してきたんだっけ。それならば知らなくて当たり前ね。」

「知識不足でごめん。生徒会長が北山先輩という方で、その方が寮長も兼ねているという事は知っているけれど、それ以外はちょっと。学院に慣れたら自ずと細かい事とかかわかると思っていたから。自分も学院の生徒の一員なのに私って怠慢だね。反省しなくちゃ。」

「美麗だけでなく私たちもよ。だっていくら仲良くなっても、心のどこかで転校生だからという気持ちがあるのかもしれないから、もっと心を配らなくては。お互い様よ。じゃあ、後で部屋に帰った時に詳しく教えるね。」

「ありがとう。」

二人が再び長蛇の列に目を向けた瞬間、まるでモーゼの十戒のように、その列が左右に割れて二列になった。有園 雅がその中央を、女王のように悠々と優雅に歩いている。彼女もまた見るからに仕立ての良い乗馬服に身を包んでおり、その姿は同じ高校生には見えないほど妖艶だった。彼女は勝ち誇ったように微笑みを浮かべて、勅命を下すように話し始めた。

「静かになさい。こちらの部員は私に決定しています。」

この言葉に不満の声が漏れたが、彼女の一睨みで静かになった。その様子を満足そうに見回した後、北山 氷美城に甘えるような声で話しかける。

「氷美城、いいでしょ？私は初心者ではないし、あなたと肩を並べる位の乗馬の腕を持っていると自負しているわ。あなたは子供の頃から私と一緒にいるのだからわかっているわよね。」

その言葉に苦笑をしながら北山 氷美城が返事をする。こちらからは顔がよく見えない。

「OK。お姫様のおっしゃる通りにいたしましょう。」

「私が乗る馬を一緒に選んでくれる？」

「はいはい。どんな馬がいい？」

「どんな馬でも乗りこなす自信があるわ。」

「わかった。じゃ厩舎に行こうか。」

雅は当たり前のように氷美城の腕につかまり、それを氷美城がエスコートをして歩いていった。

美麗はこれで皆帰るかと思っていたが、一向にその様子を見せない。確かに長い列はなくなったが、馬場の周りに思い思いの場所へ移動していったのである。美麗は訝しげにそれを見ていた。優香は、練習があるから好きなだけ見学をしていってねと声をかけると、自分の馬に乗りその場から去って行く。しばらくしてから一斉に黄色い声が上がった。

そちらに注目をする、北山 氷美城と有園 雅が並んで馬を走らせているようだ。逆光で、氷美城の顔を明確に確認することはできなかったが、かなり整った顔をしているという事はかすかに見てとれた。北山 氷美城が女性ではなく男性ならば、間違いなく美男美女のカップルだろう。見学をしている生徒たちは皆その2人を携帯の写メで撮りまくっているのである。

「氷美城様と雅様は最高のカップルだわ！2人を写真で取れるなんて、私死んでもいい！」

この言葉に美麗は目が点になるほど啞然とした。

その様子を氷美城がちらりと見たのも気が付かずに。

聖マリアンナ女学院の学生寮は学院の裏門を出たところに建てられていて、それは丘の裾にあり池に面していた。丘といってもほんの30メートル程の高さなので、丘というよりもちょっと高くなっている高台といったほうがあっている。学生寮の周囲は、北方に丘があり、東方には川が、西方には森、そして南方には池が配置されている。

西方の森には遊歩道があり、また乗馬部の自然の馬場にも繋がっている。もちろん入り口は別々の場所にあるので、徒歩コース・乗馬コースとわかれている。この二つのコースは植樹によって隔てられているので、違和感なく乗馬をする人と歩く人、それぞれが森林浴を楽しむことができる。

東方の川の側には見事な温室と花畑があり、その川から直接水を引き入れているので、決して花が枯れてしまうという事はない。まさしく百花繚乱といった趣である。花々の中心は東方の花畑と温室だが、地面には青々とした芝生が敷き詰められている。

南方にある池には、かなり精密に作られている水鳥のオブジェがあり、それがこの風景をいっそう叙情的なものに感じさせている。

北方の丘にある白い瀟洒な造りの西洋館はまるでその風景を見守る神殿のようだ。美しいだけでなく、どことなく近寄りたいたい雰囲気も感じさせるのだ。

都会という名のコンクリートジャングルの中で暮らしている人間にとって、実に違和感のある風景だ。

「今日の夕食はちょっと重たかったかな。苦しい。」

「だって美麗ってば、食事の後にデザートのカークまで食べているんだもの。自業自得。」

「そういわれてしまうと何も言えない。でも何だかすごく疲れていて甘いものが食べたかったの。」

「それって私には単なる言い訳に聞こえるけど？」

「正解！」

美麗と優香は顔を見合わせて爆笑した。2人は友人であると共にルームメイトでもあるのだ。

この学生寮の部屋は、よくあるワンルームで、ベッドと学習机と着替えを入れる小さな衣装棚があるだけというような部屋ではない。原則的に2人部屋ということは他校の学生寮と同じだが、勉強をする為の部屋が各自1部屋ずつ、ベッドルームと洋服専用の大きなクローゼット、小さなカウンター式キッチン、トイレ、バスルーム、そして二人が寛ぐためのリビングがあり、寮の部屋というよりもシティホテルのツインルームのようなのだ。その照明や家具などのデザインはアール・ヌーヴォー様式で、わざわざ海外から取り寄せたもの、しかもオリジナルのデザインだ。ベッドの広さもシングルではなく、セミダブルという、至れり尽くせりな部屋なのである。

「この食事って本当に美味しいわよね。実は私もデザートを食べようか迷っていたの。でも、私が大好きな塩生キャラメルソースをコーティングしたチョコレートケーキが売り切れていたから断念したの。ダイエットもしたいし。」

「ダイエット？私が食べたシトラスのシフォンケーキよりカロリーありそうじゃない。」

「あら。よく言うじゃない。デザートは別腹って！」

「それって意味違わない？」

「あら、そうだったかしら。私はそういう意味だと思っていたわ。」

「じゃ、そうなのかもね。」

「そんなわけないじゃない！」

2人は再び楽しそうな笑い声をあげた。

「ところで馬場で言っていた事だけ。」

「北山先輩のことね？教えてくれるの？」

「うん。話す前に紅茶をいれてくるね。」

「私がいれるわ。座って待っていて。優香ちゃんはロイヤルミルクティーが好きなんだよね？アイスとホット、どちらがいい？」

「ありがとう。アイスがいいな。」

「任せて。」

美麗はしばらくしてから2人のお茶を用意して戻ってきた。ダイニングテーブルに2人の紅茶をセットしてから優香の前に腰を下ろした。優香は早速その紅茶に口をつけた。

「美味しい！いつも思うのだけど、美麗のいれてくれる紅茶って何でこんなに美味しいのかしら。何かコツがあるの？」

「コツなんて別にないよ。唯、母が紅茶をいれてくれているのをよく見ていたのでその真似をしているだけ。美味しいと伝えてくれてとても嬉しいわ。」

「とても素敵なお母様なのね。なんとなく想像できるわ。今度お会いしてみたいわ。」

「機会があればぜひ。」

「そうね。私の母にも会ってもらいたいな。子供である私が言うのもおかしいけれど、私の母もとても素晴らしい女性なの。誇りに思っているのよ。」

「自分の親を誇りに思うって素晴らしい事ね。私もぜひお会いしてみたいわ。」

「ええ。ぜひとも紹介したいわ。本当に素敵な女性なの。」

そういうと顔を見合わせてお互いに微笑みあった。

「さて、本題に入るわね。まずこの学院は美麗も知っているとおり幼稚舎から大学部までの一貫性教育を行っている女学校で、学院長を始め教師も皆女性だけ。男性は新学期の始業式の時にいらっやって、ありがたいお祈りを捧げてくださる年配の牧師様だけ。ここまではわかっているよね？」

「ええ。そして生徒達の管理というか、統率は全て現生徒会の役員の方達が行っていて、学院規則とか何か問題がおこった場合は生徒会の役員会が開かれて、その結果を全校生徒に告知するという事、生徒会の役員は生徒の投票で選ばれる事、現在の生徒会長は高等部2年の北山 氷美城先輩で北山先輩が学生寮の寮長も兼ねているという事までは知っているわ。」

「その投票が他校とはちょっと違うの。もちろん選挙方式という事は変わらないわ。でも私達の場合、その人の人柄もそうだけど、その人の家柄、学業成績、そして容姿が条件につくの。つまり名家や何代も前から続いている旧家、しかも純粋な血筋の出身であるという事ね。そして容姿端麗であると同時にあらゆるものに秀でていなければならない、これが生徒会役員の条件なのよ。そういう人って自然と人気もあるのよ。意味がわかるかな？」

「つまり、生徒会長になる人は1番人気があるって事？しかもアイドル並みに。」

「正解。親衛隊もいるくらいにね。もしかしたら絶句した？」

「ごめん。否定できない。私は女子校って初めてなので。でも誰かに憧れるという気持ちはわかるけど。」

「誤る事ないよ。これって女子校独特のものだと思うから。一応、恋愛に対してとても興味のある年頃だから、どうしても自分達でアイドルを作って疑似恋愛的な感情を持ってしまう。つまりその人が理想の王子様になってしまうのね。」

「成る程。確かにここは男性が全くいないし、ましてや幼稚舎の頃からこの状況に身をおいているのだからそれも自然な感情かもしれない。」

「そうね。でも皆一時的なものだとわかっていると思うよ。話を戻すね。氷美城先輩は、5年連続で生徒会

長を務めていらっしゃるのよ。つまり5年連続第1位の人気という事。これって過去の例にない事で、皆注目しているわ。氷美城先輩に限らず、同じく高等部2年で副会長の東川 青先輩、書記の南池 紅先輩、そして同じく書記の西道 白璃先輩、2人とも高等部2年だけど、この3人も5年連続で役員を務めていらっしゃるの。私達は“四天王”と呼んでお慕いしているわ。皆さんは幼馴染という事もあって、非常に仲が良いのよ。4人が揃っているとちょっとした迫力があって自然に道が出来てしまうくらいなの。何というか、そのオーラというのかな。それが信じられないほど威厳と気品に満ち溢れていて、自然と頭を下げて挨拶をしてしまう。そう、聖母マリアに祈りを捧げるように。」

「そんなに凄い方達なんだ。あら、でも有園さんは北山先輩とかなり親しげにしていたけれど？それこそ一緒にいるのが当たり前というような感じだったわね。」

「彼女は別格。彼女も四天王の方達と幼馴染なのよ。妹のような存在とでもいうのかしら。」

「優香ちゃんにとっては羨ましい関係？北山先輩と有園さんは。」

「美麗には嘘がつけないなあ。私に限らず氷美城先輩に憧れている子達は皆そうよ。彼女はとても美しいし、その事を自覚しているからその場その場でどういった仕草がその美しさをよりいっそう際立たせる事ができるかどうかわかっているもの。その美を完璧にするためには努力を惜しまず、追求をしている人だと思う。これで性格さえ良ければ文句なしなのだけだね。」

「きつそうだもんね。」

「きつい以前に自分が女王様でないと気がすまないのよ。自分が中心にならないとすぐに機嫌が悪くなって癩癩を起こすの。私達はもう慣れたけれど、割れ物に触るように気を遣わなければならないわ。そんな彼女が素直にいうことを聞く人といえば氷美城先輩位しかいないわよ。だから氷美城先輩はほとんど彼女の独占状態。そんな事もあるから氷美城先輩はメタリナの君とも言われているのだけど。」

「そのメタリナの君って何？」

「四天王という呼び名の他に、別名“バラの君”と呼ばれているの。で、氷美城先輩はその神秘的な美しさから、日本ではめったに見る事ができない白銀色のバラ“メタリナ”の名前を、東川先輩は紫色のバラ“エミネンス”、南池先輩は赤いバラ“ノアール”、西道先輩は黄緑色のバラ“ジェイド”の仇名がつけられているの。先輩達のことを、皆それぞれに親しみをこめて“メタリナの君”、“エミネンスの君”、“ノアールの君”、“ジェイドの君”とお呼びしているわ。」

「四天王にバラの君ね。わかったわ。ありがとう。正直に言うと、やはり私にはあまり理解が出来ない事だけれど否定はしない。優香ちゃんも北山先輩の親衛隊に入っているの？」

「いいえ。氷美城先輩の事は、親衛隊の方達に負けないくらいお慕いしているけれど、私は入る資格がないの。」

「資格ってそんなものが必要なの？考えられない。」

美麗は優香の言葉に眉をひそめた。たかが尊敬している先輩を慕っているだけではないか。

「ええ。親衛隊になれる人達は、先輩と同等の家柄で容姿もある程度、美しくなければならないのよ。その基準を決めるのは親衛隊のリーダー格の人ね。」

美麗はあまりにも呆れて、思わず口をあけてしまった。

「ばかばかしい！先輩を慕っているだけなのに？その心さえあれば十分じゃない。大体、同じ人間同士なのに誰かが格付けする権利なんてないでしょう？優香ちゃんはとても可愛いし綺麗よ。家柄だって問題ないじゃない。」

「ありがとう。照れくさいけれどそういつてくれて嬉しいわ。でもね、私は別に親衛隊なんて入りたいと思っていないの。もちろん親衛隊になればいつでもお側にいけるし、他の人達よりも優位な立場になれると思うわ。でもそんな事になったら視野が狭くなるだけじゃない。それは絶対に嫌なの。氷美城先輩はと

ても素敵よ。人間としても素晴らしい方だと思うわ。だけど、いずれは私もここを巣立っていくのだから、親衛隊の方達のように狭い世界におさまってたくないの。あ、これは内緒にしてね。親衛隊の方達に聞かれたらそれこそ大変な事になってしまう。これもんよ。」

そういうと首を切る真似をする。そんなにも凄まじいのかと美麗も首をすくめる。

「では、一般人である私はせいぜい失礼のないように注意しましょう。色々ありがとうございます。」

「少しはお役に立てましたか？」

「はい。十分に身にしみました。」

2人は再び笑い声を上げた。

「優香ちゃん。そういえば今日は家に帰ると言っていなかった？大丈夫なの？」

「うん。今ちょうど運転手から連絡が入った。もう行くわ。」

「忙しいのにごめんね。良い週末を」

美麗もというと、慌しく優香は部屋を出て行った。

ここは何処だろう？ 確かに見た事がある風景なのに…。

その時、大勢の人々の声が響いてきた。凄まじいほどの喚き声や泣き声である。そしてたった1人で、飢えている人に食物を与え、大勢の傷ついた人々を励まし、手当てしている女性がいた。その美しい頬には涙の後がくっきりと残り、祈るように空を見上げている…。

美麗はベッドから飛び起きると、自分の頬が涙で濡れているのがわかった。私は何故こんなに悲しいのだろうか。

枕元の時計を見ると、まだ明け方の五時だった。もう一眠りしようとしたが、胸が締め付けられるように切なくてそして悲しくて、とても眠ることは出来そうになかった。仕方なく起きると顔を洗い服に着替えて散歩に出かけた。時は初夏なので、すでに外は明るかった。今日もいいお天気に恵まれるだろう。そうしたら、今日は温室にでも行って、森で森林浴をして、その後はあの池のほとりのベンチで本を読もう。青々とした芝生に寝転んで昼寝もいいなあ。そんなことを思いながら、何故か足は森の方向へ向かっていた。

早朝の森は少し肌寒く感じたが、木々の間から漏れている薄い太陽の光が、森の美しさを倍以上に神秘的なものにしている。

「おや、週末だというのに人がいるとは珍しい。」

突然、頭上から声が聞えたので、美麗は心臓が飛び出しそうになるくらい驚いた。その様子をはっきりとわかったのか、その人は優しい声であやまった。

「ごめんなさい。驚かすつもりじゃなかったの。週末には寮から帰宅する子が多いから私も少し驚いたの。」
美麗はまぶしそうに顔を上げると、そこにはギリシャ彫刻のように無駄ひとつない、見た事もないほど美しい容貌をした人が馬に乗っていた。とても日本人には見えない。

「すみません。あなたはどなたですか？」

その人は、この言葉に少し驚いた顔をして馬からおりと、優雅に一步踏み出し、美麗の目の前に立った。その身のこなしの軽さに思わず美麗は見とれてしまった。身長が高く、耳には黒真珠のピアスをつけている。

北山先輩だわ。どうしよう。

美麗は直感的にその人が北山 氷美城とわかった。神秘的で何処か威厳のある人、確か通称“メタリナの君” 白銀色のバラの君…。

「失礼。私は北山 氷美城。高等部2年です。初めまして、桜木 美麗さん。美麗でいいかしら？」

今度は美麗が驚いた。何故、自分の名前を？ その思いが自然と声に出てしまっていた。

「何故、私の名前をご存知なのですか？」

すると、ふっと笑いながら答えてくれた。

「ああ。ここは人数が少ないから、私の立場上、生徒全員の名前を覚えるようにしているの。それと失礼だけれど、ここに転校生が来るなんてことは全くなかったから好奇心から。美麗という名前もとても綺麗だし、その名の通りにあなたは目立つもの。」

その言葉に警戒の表情をあらわし、再び訝しげに氷美城を見つめる。壁を作ってしまったのがわかったのか、氷美城はしまったという顔をすると、優しく美麗の手を持ち、その顔を見つめてにっこりと微笑む。

「私、何か悪い事をいったかしら？ 美麗は自分が美しいと自覚していないの？ だとしたら問題よ。」

美麗は手を引き抜くと顔を下に向ける。

「冗談はよして下さい。よく気味が悪いといわれますが、綺麗だと言われたことは一度もありません。」

「ふうん。」

「何！？離して！」

氷美城はその長い指先で美しい顔を持ち上げるとじっと見つめた。

「気味が悪いってこの瞳？とても美しい薄い紫の瞳なのに何故？とても澄んでいて、見ているほうが恥ずかしくなってくる。まるで人の悪いところを全て見ている、なおかつそれを許そうとしているかのような慈悲深い目だと思うけど。聖母のようにね。あなたはもっと自分に自信を持つべきよ。」

「あの、離して下さい。人にじっと見られた事などないので...。」

氷美城は初めて気がついたかのようにそっとその手を美しい顔から離れた。

「失礼。ところで、皆帰宅しているというのにあなたは家に戻らないの？」

「はい。家に戻っても誰もいませんから。」

「そうか。確かご両親は言語学者だったわね。あら？またびっくり眼。今度はどうしたの？」

「両親の職業までご存知なのですか？」

「まあ、一応。寮長の仕事の一つとして外出許可も出しているから、生徒達を束ねる上で把握しておかないとならないので必要なよ。まるで監視員みたいよね。」

氷美城は少し自嘲気味に話しをする。この人は自分の立場を重く感じているのかもしれないと美麗はかすかに思った。と同時に、この人しかこの学院の生徒達をまとめられる人もいないだろうと。やはり北山氷美城という人は尊敬に値する人物なのだろう。

美麗は昔から第六感というか、直感というものがあり、何故か全く外れた事はなかった。しかも何に対してもである。その人の性格や人柄、天気、花がいつごろ咲くか、今目の前にいる動物の感情など様々である。それもあって、皆に気味悪がられているのであるが。

「あなたの今日の予定は？」氷美城が美麗に突然話しかけた。

「私の予定ですか？」

「もちろん。私も家に帰る予定がないので、どう過ごそうかと思っていたから。どうせなら、1人より2人のほうが楽しいでしょう？町に出てショッピングでもする？」

人気NO.1の人と？冗談でしょ。町なんかに出たら誰に見られるか。その事を考えると、背筋が凍った。

「町にでる予定は全くありませんのでおひとりでどうぞ。」

「そんなに即座に断らなくても。」

「いいえ。あの、私なんかと一緒にだときっと楽しくないと思います。むしろご迷惑をかけてしまいますから。何を笑っているのですか？」

「ごめん。さっきから表情が見事にコロコロと変わるの。」

氷美城は笑いが止まらないというようにずっと笑っている。あまりにもずっと笑っているの、さすがの美麗も少しムツとなった。

「私はこれで きゃー！」

いきなり宙に浮いたと思ったら氷美城と共に馬上の人となっていた。

「実は私も町に行く気はないの。私の乗馬に付き合っ。その後、あなたに付き合うから。」

なんという強引な人なのだろう。最初は少し抵抗して、何度も氷美城にちゃんとつかまっていけないと落ちると注意されていたが、今は乗馬を楽しんでいる。森を抜けて丘を登る頃には、ギャロップからウォークへと変わっていた。丘の上につくとしばらくその下の風景に見とれた。朝の明るい光を浴びて、全てが美しく光っていた。馬の上でふっと美麗はデジャヴのような不思議な感覚に襲われた。

前にも同じような事があったような...。私は誰かと馬の上から下を見ていた。まさに今と同じように。何気なく上を向くと、氷美城が少し訝しげな表情で自分を見つめていた。美麗から目をそらすと、とても

身軽に馬をおりると彼女を抱き下ろした。先程の訝しげな表情は消えて、穏やかな笑みを浮かべている。

「早朝にここから見る風景はとても美しいでしょう？私のお気に入りなんだ。さぁ、中へどうぞ。」

そういって、手を引いて丘の上にある白い瀟洒な西洋館にエスコートした。躊躇している美麗を無視して、中に入るとドアを閉めた。その中はとても美しいアンティークの小さなシャンデリアが煌めき、凝った彫刻が施してあるテーブルと椅子があった。テーブルの上にはガレの花瓶が置かれており、とても見事な薔薇が飾られている。

美麗はこの西洋館を塔から眺めるたびに二階建てだと思っていたが、実際は高い天井で一階建てだった。しかもかなりの広さがある。通されたのは居間のようなのだが、その周りにはいくつかのドアがあり、何個も部屋があるようだ。

「ここは？」

「生徒会室よ。別名バラの館とかいわれていて、生徒会役員しか利用していない。別に生徒達を締め出しているわけではないのに誰も来ない。ここには色々な資料もあるので、どんどん利用してほしいのだけどね。何よりも、とても美しいでしょう？皆のコミュニケーションの場になればいいと思っているけど無理みたい。さぁ、朝食でも食べましょう。洋食でいいかな？今、朝食を作ってくるから席に座って待っていて。」

この言葉にぎょっとして、美麗が慌てて氷美城を止める。

「北山先輩は座っていて下さい。朝食は私が作りますから。」

「別にいいよ。私はこう見えて食事を作るのが得意なの。乗馬に付き合ってくれたのだし、そのお礼も兼ねたいの。」

「私こそ乗馬を楽しませてもらったのですから、お礼がしたいです。私に朝食を作らせてください。お願いですから座っていて下さい。」

「朝から何を新婚さんのような会話をしているのですか。食事なら私が作りましたよ。お客さんがいるとは思わなかったので2人分しか作っていませんが、多めに作りましたので十分足りるでしょう。」

「何だ。青もいたの。」

青って人気NO.2の東川 青先輩の事？

恐る恐る声のする方を見るとそこには、これまたこの世の者とは思えないほど美しい顔立ちの人が立っていた。耳にはサファイアのピアスをはめている。その手には美味しそうな朝食を持っていた。しばらくそれを見つめていた美麗だが、はっとしたように我に返るとあわてて青の側に行った。

「すみません。ポーっとしていました。私が食事を持っていきます。」

「ありがとう。桜木 美麗さん。あ 失礼。私も立場上あなたの事を知っているだけです。私は東川 青です。よろしく。」

これまた極上の笑みを美麗に向けた為、美麗は赤くなりつつ料理を受け取り、テーブルに持っていく。その間に氷美城と青が取り皿を持ってきて、手馴れたように並べる。

「取り皿の数、多くありませんか？」

「多くないよ。」

「多分、これから人数が増えますから。2人ほど。」

そういったと同時に、入り口のドアが開いた。

「いい匂いだな。」

「ちょうどいいタイミングだったようですね。」

美麗は驚いた表情をしていたが、氷美城と青はしたり顔で笑っている。青は、ほらねというように立ち上がりウィンクをしてキッチンに向かい、残りの料理を持ってきた。

それぞれ椅子についたのを見て、氷美城が美麗の椅子を引いて座らせた。促されるままに席につくと、氷

美城が2人の紹介をしてくれた。美麗が思ったとおり南池 紅と西道 白璃だった。2人とも、もちろんとても美しい顔立ちをしている。四天王のそろい踏みである。紅はルビーのピアス、白璃はダイヤモンドのピアスをはめている。

ふと優香がいていた言葉を思い出した。そのオーラは信じられないほどの威厳と気品に満ち溢れていて自然と頭を下げて挨拶をしてしまう...

成程、納得だわ。ここの空間だけ違った空気を感じる。決して不快なものではないけれど、一介の人間が足を踏み入れてはいけないような、そんな空間とでもいうのかしら。何でだろう？

4人は、美麗が深く考え込んでいるその様子をじっと見つめていた。しかし4人に見つめられている事を、当の本人は全く気づいていなかった。

「セイの言うとおりですよ。わたし達はあなたを良く理解しています。」

生徒会室では、氷美城たち4人がゆっくりとお茶を楽しんでいた。皆、一言も話さなかったが、初めに静寂を破ったのは青だった。

「氷美城。あなたが雅以外の女の子を近づけるなんて珍しいですね。何故です？」

「彼女がとても美人だから。」

「確かに美人ですが」

「それに目がとても澄んでいる。そればかりではなく心も美しい子だ。」

「ヒミキ。そんな理由ではないでしょう？何があったのですか。」

青が<氷美城>ではなく ヒミキ というイントネーションになった途端に、その場の空気が和やかなものから、緊迫感を感じさせるような冷たいものになった。4人を見ると、その顔つきは国王のように厳しい表情になっている。そう、彼等の 真の姿、古の国、トゥジュール国を守護している、四神にして若き美青年王の顔である。

「そうです。あなたが人間を近づけるのはとても珍しい。」

3人に見つめられ、ふっとため息をつくとゆっくりと話し始めた。

「お前達に嘘はつけないな。来たのだよ、あの娘は。結界が張ってあるはずの、あの時空の道から我らの国、トゥジュールへ。」

「結界を破ってという事ですか？それは危険だ。すぐに手を打たなければ。」

「その必要はない。あの娘がこの世界に戻った後、あの道を調べたのだが結界は破られていなかった。トゥジュール国の記憶も消してある。」

「どういう事ですか？あの結界は我々4人の神通力で張ってあるもの。大神官でもない限り人間が破る事など不可能くらい強固なはず。」

「わたしにもわからない。今日一日中、美麗と一緒に過ごしていたが、彼女から負の波動は感じられなかったし神官の力も感じられなかった。ごく普通の人間のそれと同じだった。だが...。」

「だが？何か引っかけの事でもあるのですか？」

「いや。何でもない。気にしないでくれ。」

ヒミキのその態度に、セイは一瞬訝しげな表情を向けたが、すぐに冷静な顔へ戻った。

「確かに不思議です。どうやら桜木 美麗から目を離すわけにはいかなくなりましたね。彼女を我々の目の届く範囲においておかなければなりません。」

「美麗はクラブ活動をしていないようだ。乗馬部に無理やり欠員を出してみたが、案の定、雅が入部してきたので乗馬部にはおけなくなった。」

「では、わたしのフェンシング部はどうですか？マネージャーとしてですが。」

「マネージャーでも、コウのところの欠員は難しいだろう？ハクリの美術部も。」

「では、わたしの園芸部にしましょう。確かにわたしのところも欠員はありませんが、いつも人手が足りなくて苦労していますから。人が増えるのは大歓迎ですよ。」

「では頼む。それと生徒会の補佐をしてもらうように手配をしてほしい。後は寮の部屋変えだ。幸い、わたしは生徒会長兼寮長の肩書きもあるから、無理なくわたしと同室にする事が可能だろう。」

「有園 雅はどうしますか？彼女は絶対に生徒会の補佐など認めませんよ。ましてや美麗があなたと同室になったらそれこそ手がつけられないと思いますが？」

「大丈夫だ。雅もそれほど子供じゃない。彼女ならわかるはず。」

「あなたがそうおっしゃるのならば。では早速行動に移しましょう。」

先程の緊迫した空気から一変して、その場が和やかな空気に戻った。トゥジュール国の王の顔から聖マリアンナ女学院の生徒にもどったのである。ヒミキ、セイ、ハクリ、コウから氷美城、青、白璃、紅へ。「そうそう、美麗を守ることも忘れないようにしなくてはなりませんよ。ここのお姫様達はかなり過剰な感情の持ち主ばかりですから。」

青が氷美城にいたずらっぽく話しかけた。苦笑しながら氷美城が言葉を返す。

「確かに。そちらも大丈夫。美麗には怪我ひとつさせないから。」

「もちろん、私達も協力しましょう。頼みましたよ、紅、白璃。」

紅はウィンクを、白璃はちょっと肩をすくめながら承知と言葉にした。

「さあ、明後日からは忙しくなりそうだ。お休み。」

美麗は自分の部屋で、今日一日のことを振り返りながら、両親に手紙を書いていた。

親愛なるお父様、お母様。お元気ですか？仕事ははかどっていますか？

わたしは元気にしています。そう、今日はとても素敵な一日でした。

実は北山 氷美城先輩といって、この学院の全生徒が憧れている一学年上の先輩の方と一緒に過ごしていたのですが、この方がとても素敵な方で、わたしはレディーのようにエスコートをされ、久しぶりの乗馬を楽しみました。

北山先輩は本当に王子様のような方で

「違う違う！そうじゃなくて、えーと。駄目だ。集中できないわ。」

美麗はあきらめてペンを置いた。そしてベッドに横になると昼間の事を思い出していた。

太陽は暖かな日差しを地上に降り注ぎ、新緑がまぶしいくらいに美しく光っていた。

「美麗、後片付けをしてくれてありがとう。手が荒れてしまうから、流しに置いてあるハンドクリームをちゃんと塗ってね。」

「はい。あの美麗って。」

「何？おかしい？」

「はい。名前と呼ばれましたので...皆さんの立場がありますから。」

この言葉に4人は顔を見合わせた。

「別に気にする事ではないでしょう。私達の立場って何？生徒会役員だから？そんなの単なる肩書きだけだし、同じ学び舎で勉強をしている仲間、それだけが事実じゃない。それに一緒に食事もしたのだし、せっかくのご縁なのだから水をさすような事はいわないでほしいな。」

「氷美城の言うとおりです。この美しい部屋で一緒に食事をするのはいつもこの面子ですからね。こんなに楽しくとても充実した時を過ごしたのは久しぶりです。美麗は楽しくありませんでしたか？だとしたら、私達はホステスとして失格です。むしろ、お詫びしなくてはなりません。」

「お詫びなんてとんでもありません。私こそ楽しいひとときを過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。」

「では、これからもたまに一緒に食事をしましょう。私達4人は実家が遠いものですから、週末に実家に帰る事ができないのです。きっと楽しい食事ができますよ。」

「白璃の言うとおり。氷美城や青も同じだと思うから。あ 美麗さえよければだけど。」

せっかく誘ってくれているのに、即座に断る事は失礼になる。どうしたものかと美麗は少し考えこんだ。しかし、おそらくこの4人には用事があると嘘についても通じないだろう。それならば正直に言ったほうがいい。こう結論を出すとゆっくりと話し出す。

「食事に誘って頂いてありがとうございます。でも、私は皆さんとご一緒することは出来ません。同じ話の繰り返しになってしまいますが、皆さんの立場があります。これが普通の学校で、皆さんがごく普通の生徒会役員だとしたら何の問題もないと思います。でもここは違います。その事は<四天王>あるいは<バラの君>と呼ばれている皆さんが1番良くわかっているはずです。具体的に例えるとしたら、皆さんは天に住んでいる方達ですが、私は地上で無様に這いずり回っている人間という事です。そんな人間が天上に行くということは不可能です。正直に言いますと、私はこの学院に入学できたという事自体、奇跡のようなものだと思っています。この学院には、私のように父親の身分や地位が一介の言語学者であるというような生徒はいませんから。」

「そんな事はこの民主主義の時代に関係ない。違いますか？」

「確かに東川先輩のおっしゃるとおりです。でも、それがここでは通用しないという事も私は痛いほど身にしみています。あらゆるもの全てが快適な設備、食事、そして人…。どれをとっても私には似つかわしくないものばかりです。もちろん、そんな環境に身をおくことが出来ているのですから、とても感謝はしていますし幸せなことだとも思っています。でも時々ふっと違和感を感じてたまらなく切なくなる時があります。多分、幼稚舎の頃からこの環境に身をおいている皆さんには理解できない感情だと思いますが…。あるいは私自身が皆さんと同じように幼稚舎の頃からここに在籍していたとしたら、このような感情は持たないと思います。かなり生意気な事をいいましたが、皆さんには嘘についても通じないと思ったので正直な気持ちを話しました。改めて失礼をお詫びします。申し訳ございませんでした。」

そういうと、美麗は深くと頭を下げた。しばらく沈黙が続いた。

生意気な事を言い過ぎたのかもしれない。でもこれが私なのだから。美麗はその場から去ろうと一步踏み出したが、それを氷美城がとめた。

「美麗、どこに行くの？今日は一緒に過ごす約束でしょう？ふらないでほしいな。」

この言葉に美麗は一瞬眉をひそめた。私の話が通じなかったのだろうか。改めて断ろうと口をあけたが、氷美城はそれを手で制した。

「あなたの言いたい事は良くわかった。もう一緒に食事をしようとか無理には誘わない。でも一緒に食事をしたいという気持ちに変わりはないので、気が向いたらでいいから私達に付き合っしてほしい。それでいいわね？青、紅、白璃。」

3人は黙って頷いた。

「あなたの気持ちが聞けてよかった。私は生徒達全てのことを知っているつもりでいました。でも違った。そして反省しました。あなたに違和感を感じさせていたなんて…。はっきりいってショックでした。と同時に自分が恥ずかしかったです。5年も連続で生徒会長になっているという事に対して、何処かに驕った気持ちがあったのでしょうか。その為になんか人の気持ちを理解できていなかった。」

「それは私も同じです。美麗、あなたに感謝します。そして感激しました。何故なら、あなたのようにはっきりと自分の気持ちを話してくれる生徒など1人もいませんから。もちろん騒がれているという事は自覚しています。でもそれが、氷美城と同様に、私自身の驕りだったのでしょうか。逆にお礼をいいます。そしてあなたの気持ちをひとつの意見として真摯に受け止め、よりいっそう精進しなければと思いました。」

「私の気持ちなど唯の愚痴と同じです。そんな大層な事ではありません。」

単なる愚痴と同じなのに、こうも真剣に受け止められるとは、まさしく恐縮ものである。

「美麗、でもひとつだけ忠告があります。それは、あなたは自分を卑下しすぎています。あなたの話を聞いて

ていると、まるで自分は取るに足りない人間だといっているようですよ。謙虚といえば聞こえはいいですが、それが過ぎると自分を卑しめる言葉になってしまいます。私は今朝、言ったはずですよ。あなたはとても美しいって。その美しいという意味は姿形だけではありません。心も美しいという事です。あなたはもっと自分に自信を持つべきです。人の美しさとはその人の育ってきた環境によります。それこそ、社会的地位だとか身分だとか肩書きとか何も関係ありません。その事を理解して下さい。さあ、時間はどんどん過ぎてしまいます。何をするか計画を立てましょう。」

その後、青、紅、白璃はそれぞれ自分はやる事があると去っていったので、氷美城と美麗は2人きりになった。そして氷美城が美麗の計画していた事は何かと聞いたので、漠然と考えていた事を話した。氷美城は文句も言わず、行動を共にしてくれた。まず、温室へ行き、その中で育てている様々な種類のバラや花を一つ一つ丁寧に説明をしてくれた。そのバラの中には、4人の呼び名の由来となっている、メタリナ・エミネンス・ノアール・ジェイドがあった。それを見てさらに“バラの君”であるという事に納得した。そのバラと4人の雰囲気はまさに対のようにピッタリだった。次に森林浴をしに西の森へ行き、ゆっくりと散歩を楽しんだ。最後に南の池へ行き読書をしようとしたが、それだけは氷美城が反対をしたので、読書ではなくボートに乗って水上の散歩を楽しんだ。

最初の内、美麗は緊張の為に笑顔を見せる事すらできなかったが、最後の池に着いた時は、その緊張もほぐれて心からの笑顔を見せる事ができていた。目が輝き、白い頬が薄く紅潮した様は、まさにこの世のものとは思えないほど美しく光り輝いていた。あまりの美しさに氷美城は彼女から目を離すことが出来なかった。そのときに限らず、しばし見とれている事があったのだが、それを態度に表すような事はしなかった。何故なら、そんな事をしたら美麗は自分に対してまた壁を作ってしまうだろうと確信していたからだ。さらに、ふと美麗と会った事があるという記憶が浮かんだのである。

以前に彼女と一緒にこうして過ごした事がある？まさか！しかし...

美麗はいつしか楽しそうな微笑を浮かべながら、眠りについていった。

「北山先輩！あれはいったいどういうことですか？」

放課後、息せき切って美麗が生徒会室に飛び込んできた。氷美城はその様子を訝しげな表情で見つめた。

「あれって何？」

「あの掲示板です。生徒会補佐と寮の部屋変えのことです。」

「ああ、何だ。顔色を変えて飛び込んできたから何事かと思った。あの掲示板に書いてある通り、あなたに生徒会補佐をお願いします。」

「なぜ私なんですか？私ではなく、他に適任者がいると思います。」

「確かにあなたの言うとおりでありますが、あなたを指名した理由は、あなただけどのクラブにも所属していないからです。」

「それはそうですが...でも生徒会補佐っていったいどんな仕事をすればいいのか全く検討がつきません。」

「それは私から説明しましょう。せっかく生徒会室に来たのだから一緒にケーキでも食べましょう。私と氷美城はちょうどお茶を飲もうとしていたところです。」

「青のいうとおり。まあ、その椅子に座って。」

氷美城は落ち着きなさいとでもいうように、美麗の目の前の椅子を引いた。そこに腰掛けるのを確認してから、自分の席に戻る。青が席を立とうとしたのを見て、美麗が説明を聞いたらすぐに退出しますといったので、青も元の席に戻った。

「まず生徒会補佐の件ですが、美麗は聖マリアンナ祭のことは知っていますね？」

「確か、10月に開催されるという学園祭ですよ。」

「そう。聖マリアンナ女学院では他校のように体育祭と文化祭という二大イベントは行っておりません。聖マリアンナ祭とは体育祭と文化祭を一緒にした学園祭で、内容としては他校とあまり変わりません。運動部に所属している生徒たちは、同じ部内でトーナメント形式の試合を行い優勝者を決定します。優勝者には商品と表彰状が授与されます。文化系のクラブに所属している生徒たちは、各部室や体育館で自分の作品や研究結果を発表します。各クラスではみんなで考えたイベント、例えばカフェをオープンしたり、クレープを売るなどでお客様をもてなします。」

「運動部の生徒たちがトーナメント形式で試合をするということですが、外部での試合には参加していないのですか？」

「そんなことはありません。外部の試合にも参加していますが、我が学院はあなたも知っているように都心よりかなり郊外にあります。そのため、こちらから出向くことは歓迎されますが、都心にある学校を招待してもあまりいい返事はもらえません。せっかく一生懸命に練習をしてもなかなかその成果を発揮することができないため、こういった形で試合をします。生徒たちは皆本気で戦います。応援にもかなり気合が入りますよ。そのおかげで我が学院は、全国大会などの大きな試合のときは常に上位をしめています。」

美麗は学院のパンフレットを思い出した。確かに全国大会クラスの大きな試合ではすばらしい成績をおさめており、何個も優勝という文字が書かれてあった。昨年も、フェンシング部とテニス部、バスケット部、バレーボール部等が全国大会で優勝と記載されていた。かなり美麗も感心していたのだが、こういった理由があったからなのだと納得できた。

「運動部に関してはひとつでも多くの部が試合できるように、スケジュールをこちらで調整しなければなりません。その用意と、学園祭が終了した後に生徒たちの親睦会を兼ねた大きなパーティーを町のホテルで開催します。そのパーティーには、生徒たちのご両親や親戚の方たちも招待するので、色々とお手配をしな

ければなりません。その準備を私たち4人だけでこなすのはとても難しく、毎年こちらで生徒会の補佐をしてくれる生徒をランダムに指名させてもらっています。その内容は、例えばお客様に出す料理と一緒に考えたり、フラワーアレンジメントを考えたり、招待状を作成したりという仕事です。美しい他にあと3名考えています。その内の1名は決定していて、いい返事をもらえました。美しい引き受けてくれたら、あと2名だけになるのですが...だめでしょうか？」

「補佐は、聖マリアンナ祭の準備のためだけなので、臨時のものです。但し、後処理があるからしばらくは補佐の仕事が続くけれど。大変だと思いますが、私からもお願いします。」

「補佐の仕事が臨時のもので、私などでよろしければお引き受けします。」

「ありがとうございます。」

しまったと思っても二人に見つめられたら断ることは難しい。しかも極上の微笑つきである。美しいは断るつもりだったが、思わず首を縦に振ってしまっていた。

「ところで、どうして美しいはどのクラブにも所属していないのかな？確か、必ず1つのクラブには所属するようにと生徒規則には書いてあったはずだけど。入部したいクラブがなかったのかしら？」

「一応テニス部を希望していたので、同じクラスの子に聞いてみたのですが、欠員がないといわれてしまいました。どうしようかと迷っていたんです。」

「なるほど。テニス部は人気があるからね。テニス部に限らず、運動部は何処も人気があって欠員はなかなかでないから...。やはり運動部が希望なのかしら？例えば、園芸部とかはどう？花は嫌い？」

「いいえ。花は大好きです。園芸部も聞いてみましたが、欠員がないといわれて...。」

「それならばぜひ入部して下さい。確かにうちも欠員はありませんが、常に人手が足りないのでもいつも困っています。」

「本当ですか？」

「ええ。何せ花の数が半端ではありませんからね。実際、花の様子を気にかけて世話をしている部員は、私と藤原さん位しかいません。一応有園さんも部員ですが、花の世話をしているところは見ることがありませんね。期待をしていたんだけど がっかりです。」

青は氷美城をちらと見つめながら皮肉な笑顔を彼女に向けた。氷美城は苦笑を浮かべている。

「優香ちゃんも園芸部？乗馬部ではないんですか？」

「そうか。生徒規則に入れるのを忘れていた。うちでは興味があり、ちゃんと責任を持てるならば、いくつでも好きなだけクラブ活動をしてもいいのよ。私は忙しくて無理だから乗馬部にしか所属していないけれど、青は園芸部の他に弓道部にも所属しているの。青は弓道に限らず、武芸百般に秀でている。」

「武芸百般 すごいですね。」

たおやかな風情の青が武芸百般とは想像もできなかった。美しいは思わず青をまじまじと見つめてしまった。その様子に青が苦笑する。

「そんなに驚きましたか？まあ、見かけがこんなですからね。家は両親共に武芸百般を習得していて、代々師範を務めています。子供の時からそんな両親を見てきましたから、自然に私も武芸をたしなむようになったんです。のどが渇きませんか？お茶を持ってきましたか。」

「時間をとらせてしまってすみません。声をかけてくださってありがとうございます。園芸部にはぜひ入部させて下さい。すぐに退出しますからあとひとつだけ。寮の件ですが、私が転校の手続きをした時に事務の方から部屋割り表をもらいました。それを見ると北山先輩は1人部屋となっています。」

「おかしいな。毎年四月になったら部屋変えをするのだけど今年はまだしていません。転校生が来るということだったので、転校生が来てからと思っていたから。でもバタバタしていたのでだいぶ遅れてしまったのです。美しい、その部屋割り表を持っていますか。私に見せて下さい。」

美麗はそれを氷美城に見せた。転校生、つまり私を待っていたとしても、生徒が増えることは確実なのだから、それを見込んだ部屋割りを準備するものではないのだろうか。事務の人が入学手続きを間違えろとは考えられない。私が間違っているとでも？美麗はほんの少しだけ不愉快な気持ちになった。氷美城はわずかに眉をひそめてそれを見るとおもむろに答えた。

「これは1月に出した仮の部屋割り案です。その時はまだ転校生が来るということがはっきりしていなかったの。これをまだもっていたなんて事務職員に注意をしなくては。」

「そうなんですか。え？事務職員に注意をしなくてはって...。」

「氷美城は聖マリアンナ女学院の院長兼理事長です。そして北山財閥の総裁も兼務しています。この学院は北山財閥の傘下です。」

北山財閥は世間に疎い美麗でさえも聞いたことがある、世界一といわれている大財閥である。先祖は王家の血を引くヨーロッパの貴族という噂も聞いている。その資産はとて想像がつかないほどで、世界各国にある交通機関や娯楽施設、リゾート地にある別荘や土地などの不動産や世界に名だたる大企業もその8割以上は北山財閥の傘下だ。その頂上にいるのが北山 氷美城である。やはり天にいる人だ。決して私と同じ地にいる人間ではない。美麗は自然と体が固くなってしまった。氷美城が寂しい目でその様子を見つめた。

「だからといって私は特別な人間ではないから。時間がかかりそうだからお茶とケーキを持って来る。」

「そうですね。お願いします。」

青は優しい笑みと共に氷美城を見送ると再び美麗に話しかけた。

「美麗のことだから、また天の上の人とか思ったのでしょうか？その気持ちもわかります。何せ北山財閥の総裁ですから、一般の大財閥と規模が違いますからね。でも、天に住んでいる人間がこうして目の前にいるのでしょうか。手を触れられるくらい近くにいますか。答えはノーです。氷美城は幼いころに両親を亡くしたので、一人娘である彼女が北山財閥の後継者にならざるを得なかった。彼女の周りには信頼できる大人がほんの僅かしか存在していませんでした。美麗、お願いですからこんな事で壁を作らないで下さい。氷美城に限らず、ここの生徒達は皆そのことで寂しい思いをしてきました。これをいうと余計に壁を作ってしまうかもしれませんが同じ学び舎の生徒として我々の事も理解して下さい。」

我々は家庭の事情から幼いころより友人も制限されてきました。何故ならば心無い人物に営利目的のために利用されるからです。実際にそのせいで誘拐されかけたことがあります。大げさな事ではなく、命さえも狙われる可能性があるのです。どれだけ公立の学校に通う生徒たちを羨ましく思ったか。私達は他校の生徒のように、自由に外出して友人たちと旅行に行ったり、ショッピングを楽しんだりすることさえも制限されてしまうのです。」

青を見つめると寂しげな笑顔を見せている。確かに私にはわからない。正直なところ、美麗はここの生徒たちを羨ましく思っていた。決して自分が属していないセレブな世界。私には関係のない世界だとシャットアウトしていた。なんという矛盾か。私には関係ない世界と思っているのにその世界に属している友人がいる。私は今まで自分のことばかり考えていて、友人のことはあまり考えていなかった。恥ずかしい。青はそれを的確に指摘したのだ。美麗は何も言えなくなり黙って下を向いた。はい、その通りですと素直に認めるほど美麗はいい子ではない。自分の非はわかっているがそれを認めることはなかなか難しい、ごく平凡な人間だ。ちらりと青を見るとわかっているとでもいうように頷いてくれた。

その時、氷美城がお茶とケーキを三人分用意して運んできた。それを美麗が手早く受け取ってテーブルの上に並べる。氷美城がありがとと声を出す。美麗は黙って自分の席に着いた。それを見て、氷美城と青も席に着く。何もいわずにお茶を一口飲むと美麗から話し出した。

「結局、時間をとらせてしまってすみません。寮の部屋の件ですが、何で学年が違う北山先輩と私が同室な

んでしょうか？」

「それなら、私だけでなく青は藤原 優香さんと同室だし、紅は木下 朱美さん、白璃は森本 小夜子さんと同室よ。みんな美麗のクラスだから、1学年下。問題ないと思うけれど？」

「それはそうですけど...。」

「ならこの件はおしまい。このケーキ美味しいでしょう？」

「はい。あまり甘くなくてさっぱりしています。」

その頃、学院内にある掲示板を冷たい目で見つめている生徒たちがいた。冷たいというよりは、ぞっとするほど冷ややかで憤怒の形相をしたといった表現が正しい。

「雅様、あの掲示板はどういう事ですか？納得できません！何であの桜木 美麗が生徒会補佐なの。おまけに氷美城様と同室なんて！雅様なら納得しますけど。」

「生徒会で決定した事だから、どうしようもないわ。」

そういう言葉とは裏腹に、有園 雅の顔は怒りに燃えていた。

翌日の放課後、美麗はいつものように帰り支度をしていた。いつもと違い、とても生き生きとした顔だった。

今日から園芸部。あの素晴らしい花たちの世話ができる、そう思うと自然と笑みが浮かんでくるのである。

「桜木 美麗さんっている？話があるんだけど。」

「私がそうですが、何か用ですか？」

「ちょっと一緒にきてちょうだい。」

そうすると、有無を言わさない様子で美麗の腕をつかんで歩き出す。痣ができるのではないかというくらいに痛かった。

「これはどういう事なのか説明しなさい。」

その場にいた生徒たちは、蒼白な顔をして身動きひとつできないくらい体をこわばらせた。

氷美城の無表情な顔がその怒りの大きさを感じさせた。美麗は青に抱き起こされた。ずぶぬれになり、足に痣をつけ、制服のリボンが破れている。その姿は、一目瞭然で暴力を受けた事がわかる。氷美城は美麗を見つめてきゅっと唇をかむと、再びそこにいる生徒たちに厳しい目を向ける。

授業が終了した時に美麗は他のクラスの生徒に体育館へ無理やり連れてこられた。その人が声をかけた時に嫌な予感がしたのでいったん断ったのだが、時間はとらせないと無理やり連れて来られた。体育館につくとその生徒は思い切り美麗を突き飛ばし、衛兵のように体育館の入り口に立った。中には数人の生徒たちが待っていた。美麗を連れてきた生徒は、おそらく誰も来ないようにするための見張り役なのだろう。思い切り突き飛ばされたのだから、当然、美麗は転んでしまった。その時ひどく膝を打ったために痣ができてしまった。痛みをこらえて立ち上がろうとしたのだが、そうはさせまいとするように1人の生徒がスカートで思い切り踏みつけた。再び床に転んだ美麗はさらに膝を打ってしまった。あまりの痛みで顔を伏せたが、別の1人が三つあみをしている美麗の髪を思い切り驚づかみにしたので痛さが倍になった。続いて何回も平手打ちをされて頬が熱くなった。

「何でこんなことをするの？何か私が悪いことでもしたの？」

「何で？しらじらしい！今すぐに生徒会補佐と寮の部屋変えを氷美城様に断りなさい。氷美城様には雅様がいるのよ。それを泥棒猫が！第一あなたのような庶民がこの学院にいること自体許されないのだということがわからないの。」

この人たちは、もしかしたら北山先輩の親衛隊なのかしら。たぶん間違いない。優香ちゃんがこの人たちの仲間じゃなくてよかったわ。そう察すると美麗はかえって冷静に判断できるようになった。そして怒り狂っているこの人たちが可哀想になってきた。果たしてここから旅立って社会に出ることができるのだろうか。

「ちょっと！何を黙っているのよ！何とかおっしやい！」

「薄気味悪い目で見ないで！庶民は庶民らしくさっさと尻尾を巻いてしおらしく出て行くものよ。おお嫌だ！あなたの親はいったいどんな汚い手でこの学院にあなたを潜り込ませたのかしら。それを考えるとぞっとするわ！」

この言葉はさすがに美麗も許すことができなかった。自分は何を言われてもかまわないが愛する両親を侮辱することは許せない。美麗は痛みをこらえ、自分を押さえつけている手を振り払うと立ち上がった。

「私は北山先輩に取り入ってなどいません。補佐も寮の部屋変えも北山先輩を始め、生徒会で決定した事です。文句があるならば直接生徒会の方たちに言って下さい。それはあなたたちがよくわかっていることではありませんか。また、私もお断りするつもりはありません。」

再び美麗は突き倒された。今度はすかさず別の生徒2人が美麗を押さえつけ、身動きができないようにした。そこで用意をしていた汚水の入ったバケツの水を美麗にかけた。

「おお臭い！庶民にはその格好がお似合いよ。」

そういうとおもむろに、小さなナイフを取り出して制服のリボンを引き裂いた。その目はもはや狂気に近い。うっすらと笑みを浮かべるとそのナイフを顔にむける。

「さぁ、最後のチャンスよ。その顔にきれいな化粧を施す前に土下座をして助けを請いなさい。どうかお許し下さいとってね。」

美麗は逆にきっと相手を睨みつけた。

氷美城と青は、寮に戻ろうとして生徒会室の前に立っていた。すると突然、氷美城が険しい顔をして立ち止まった。何かと、青が氷美城に目を向ける。

「氷美城？」

「嫌な気が体育館の方から感じる。まさしく<負>の気だ。」

「北山先輩！助けてください！」

氷美城と青が駆け出そうとしたまさしくその時に、藤原 優香が走ってきた。優香の後ろには木下 朱美と森本 小夜子がつづいていた。

一方、体育館では美麗と複数の生徒が睨み合っていた。狂気にさらされている複数の目...それを受け止める紫の瞳。その瞳は恐怖を感じて濃い紫になっていたが、気丈にも前を見つめていた。

「切りたいなら、切ればいいでしょう？それで気が済むのならいくらでも切り刻むがいいわ。さぁ！」

「お黙り！」

ナイフを振りかざされても美麗は目をそらさなかった。その瞬間に、氷美城と青が飛び込んできた。すかさず青がナイフを手から叩き落とす。氷美城は美麗に近寄るとそっと手を伸ばした。

「大丈夫？何という酷いことを...。」

次の瞬間、氷美城から尋常ならぬ気があがった。冷たい怒りである。その気に圧倒され、その場にいた生徒たちは体が固まってしまって声すらも出せなくなった。

「これはどういう事なのか説明しなさい。」

当人たちは怯え、ただ首を横に振るばかりである。

「桜木さん！大丈夫？」

突然、何処からか有園 雅が出てきて心配そうな顔を美麗に向けた。そして暴力をふるっていた生徒たちにその目を向ける。しかしその目は、暴力をふるった者に対しての怒りの目ではなく、むしろ失敗した者たちへの怒りの目だった。それは目の前にいる美麗がいちばんよくわかった。彼女はなぜこんなにも私を憎むのだろうか。

「氷美城、私は桜木さんが体育館に連れて行かれて閉じ込められたのを偶然見たの。すぐにあなたに知らせようとしたのだけど、怖くて足がすくんでしまって...。こんな事になっていたなんて。信じられないわ。全員、謹慎処分にするべきよ。」

そういうとうっすらと涙まで浮かべてみせる。殺傷沙汰になったかもしれないような出来事なのに退学処分ではなく、謹慎処分とは。誰もが眉間にしわを寄せる。

「本来なら退学処分にするところですが、今回に限り、聖マリアンナ祭が終わるまで反省室での謹慎処分とします。授業も一緒に受けることは許しません。11月になったら通常の授業に戻るように。但し二度はないと思いなさい。」

そういうと雅の手を振り払いその場から去っていった。その後、青に支えられた美麗を囲むようにして藤原 優香、木下 朱美、森本 小夜子と続いた。

「雅様。すみません。まさか人に見られていたとは思わなかったの。」

「全くだわ。二度と失敗しないことね。私の後についてこないで！あと10分ぐらいたってから戻りなさい。」

そういうと有園 雅は去っていった。

「美麗、シャワーは浴びましたか？こちらに来て下さい。傷の手当てをしますから。」

「ありがとうございます。」

あの事件の後、美麗たちは生徒会室に来た。美麗以外の生徒、藤原 優香、木下 朱美、森本 小夜子の3人はそこに入る事を躊躇したが、氷美城に促されて初めて足を踏み入れた。そして美麗と同じようにその部屋の美しさに息を呑み、しばらくの間は声も出せずにいた。

「北山先輩？何をするんですか。やめて下さい。」

シャワーを浴びて、傷口を洗いさっぱりとした美麗をみるといきなり氷美城が土下座をしたのである。

「ごめん。私が注意しなかったばかりにこんな目にあわせてしまって。謝って許される事ではないけれど、謝らせてほしい。本当にごめんなさい。」

続いて、青や優香、朱美、小夜子まで同じように土下座をする。これを見て美麗があわてる。

「よしてください。この事は北山先輩や東川先輩のせいではありません。優香ちゃんたちもやめて。幸い大事に至らなかったのだし、きっと私にもすきがあったのだから。私も反省しなくちゃ。」

それでも立ち上がらないのを見て、美麗は足が痛いのをこらえながら、跪いて一人ひとりの手を取ると立ち上がらせた。本当に大丈夫だからと微笑みながら。

「本来なら退学処分にしなくてはならないのだけど、私も本心はすぐにでも退学にしたいのだけど 実際、まだ迷っています。」

氷美城の苦悩している顔を見ると心が痛む。〈北山財閥の総裁〉と〈生徒会長〉としての立場。

想像でしかないが、おそらくあの生徒たちの親は〈氷美城の部下〉であり、〈生徒の親〉なのだろう。部下といってもそうそうたる地位を持った人達なのだろう。仮に退学にしたとしたら、まずは部下との良い関係がこじれてしまう可能性がある。そうなるとうえでも亀裂が生じてしまうだろう。不思議な事に世の中はマイナスのエネルギーはマイナスを呼び、プラスのエネルギーはプラスを呼ぶ。

「あの人たちが言っていたように、私こそこの学院に相応しくないのかもしれませんが。もしかしたら、私が出て行くべきなのかもしれませんね。」

ついポロリと弱気な本音が口から出てしまう。

「それは違うな。美麗は全く悪くない。むしろ、この学院に最もふさわしい生徒だと思うよ。」

と突然、生徒会室の入り口から紅の声が聞こえた。

「紅の言うとおりです。美麗、確かにショックなことだと思うけれど、ここにいる生徒は彼女たちのような生徒ばかりではありません。現に、あなたには優香や朱美、そして小夜子のような友達がありますから。でも、私たちの不行き届きがこんな事態を招いてしまった事は確かです。本当にすみませんでした。」

「本当にごめん。謝って許される事ではないと思うけど謝る事しかできない。」

美麗は、氷美城たちに続き紅と白璃まで土下座をしそうになった為、あわてて二人を制した。

「皆さん、本当によしてください。つい弱気な事をいってしまったけど、学院から去るなんてしません。絶対に。」

「本当に？」

氷美城が心配そうな顔で問いかける。

「確かに大きなショックを受けた事は間違いないけど、私はこの学院が好きなんです。こんな事ぐらいでへこたれません。北山先輩。聖マリアンナ祭はきっと成功させましょうね。あらやだ。なんだかお腹がすいてきちゃった。どうしよう。」

「では、皆でお茶にしましょうか。そうだ。氷美城、まだ決まっていなかった生徒会の補佐2名。これでちょうど人数がそろいましたね？」

何？という顔をして青を見つめると、青は朱美と小夜子を見る。氷美城も微笑を浮かべると頷いて改めて朱美と小夜子を見る。

「もし都合が良かったら、生徒会の補佐をお願いしていいかしら？このメンバーならば、すばらしいチーム

ワークで仕事をこなせると思うのだけど。どう？朱美、小夜子。優香と美麗にはもう補佐を引き受けてもらったからあとはあなたたち2人で、準備万端になる。」

極上の微笑み付きのお願いに朱美と小夜子も1つ返事で頷いてしまう。

「それでは、生徒会の懇親会も兼ねてティータイムとしましょうか。」

氷美城と青は小さなキッチンに向かった。すると突然、足を止めて氷美城が振り返る。

「美麗、ありがとう。」

美麗たちが寮に戻った後も氷美城たちは生徒会室に残っていた。ついさっきまでは笑顔で楽しそうに歓談していたのが嘘のように氷美城は黙り込んでいた。密かに眉間にしわを寄せて深く考え込んでいる。そんな相棒を見てそっと青は席を立ち、紅と白璃は黙って席についたままである。

「お茶をどうぞ。」

青は3人の前にカップを置くと何もいわないでお茶を飲んでいる氷美城の言葉を待つ。

「やはり、セイの入れるバラ茶は落ち着くな。」

「今のあなたに必要かと思ったからです。どうかしましたか？」

「わたしは勘違いをしていたのかもしれない。」

「雅のことですか？今更わかったのですか？」

この言葉にじろっとひと睨みして、ため息をつきながら返事をする。

「嫌な性格だな。お前は気がついていたのか。」

「おや、そちらこそわたしの事がやっとわかったのですか。それこそ今更ですよ。何年一緒にいると思っ

ているんですか。雅は決して<彼女>ではありませんよ。」

「コウとハクリはわかっていたのか？」

「私もあなたと同様、雅が<彼女>だと思っていました。彼女の気も決して負のそれではなく、私たちの気

と似ていましたから。」

「私は少し疑っていましたが。でも今日の出来事ではっきりとそれがわかりました。あの忌々しい大戦時の負の気にもあまりにも酷似していましたからね。でもはっきりとそうとはいえません。あくまでも酷似ですから。」

「再び戦が始まるかもしれない。一対いつになったら心穏やかな日々になれるのか...」

「奥様。日本のお嬢様から手紙です。」

「ありがとう。」

桜木夫妻はヨーロッパのとある城にいた。そこは領地というよりも、密かに人知れず発展した一国のように見える。しかも招待されて仕事に来ているという雰囲気ではなく、我が家でくつろいでいるかのようである。

ココル・フェロー家は、700年前より続いている由緒正しい家柄の貴族だ。いわゆる貴族年鑑などには記載されているわけではないのだが、名ばかりの弱小貴族ではない。実際に中世からの統治がこの21世紀になった現在でも続いているのだ。称号としては最高位のデューク（公爵）でガーター勲章を持っているナイトでもある。そしてレディー・クロードア、本名クロードア・桜木・ル・フェローはこのル・フェロー家の後継者なのである。

ル・フェロー家には、直系に当たる子孫が彼女しかいない。彼女がル・フェローを継ぐ前は兄が領主だったのだが、その兄が数年前に亡くなった為に、彼女が後継者にならざるを得なかったのである。それがちょうど最愛の夫が趣味の言語で脚光を浴びるようになってからだった。

美麗は覚えていないが、幼い頃、ちょうど美麗が2～3才の時はよくこのル・フェロー家に遊びに来ていた。とてもハンサムで優しい叔父は桜木一家が遊びに来る事を指折り数えて待っていたものだった。彼自身は病弱だったために結婚をしていなかった。もちろん周囲の親族たちは後継者を望み彼に強く結婚を迫っていた。だが、彼は断固としてそれを拒んでいた。生まれた時から余命を宣告されるほど病がちだったのにどうして結婚を望めようか。彼とて幸せな家庭を持ち、子供たちの笑い声が響いている家にしたかった。しかしその夢は彼が生まれた時にすでに破られたのだ。その分、彼は妹と妹一家をととても愛していた。そして自分が死んだ後に、ル・フェロー家を継ぐ事になるであろう妹のために領地の統治に心血を注ぎ、領民の立場や心情を思いやる名領主となった。現在はそれを美麗の父がしっかりと受け継いでいる。本来ならクロードアが女公爵としてル・フェロー家の領主となるべきなのだろうが、(ル・フェロー家は原則として直系が後継者となる事を定めている)前領主はその遺言に後継者は妹、あるいは妹が依託した信頼の置ける人物を後継者とする事と記載されていたので、クロードアは兄の意思を継いでくれる人間として、愛する夫にすべてを託したのだ。その地位と名誉、そして莫大な財産を。彼はそれに応えて、前領主に匹敵する名領主として領民に慕われている。

「あなた。美麗からの手紙よ。10月25日に聖マリアンナ祭が開催されるって。その後に懇親会も兼ねた大きなパーティーがあるのですって。その招待状だわ。」

「10月25日か。日本はちょうど土曜日だね。その頃には仕事も片付くだろうし、出席しようか。美麗にもル・フェローの事と、来年2月に開催されるウィーンオペラ座の大舞踏会に出席する事を話さなくてはならないし。私としては格式ばらずにのびのびと自由に暮らさせたかったのだがね。ウィーンオペラ座のデヴュタントも高校を卒業してからか、あるいは本人が望まないとしたら、無理に出席をさせなくてもいいのではないかと思っているのだが...。」

「わたくしも同感よ。美麗には自由でのびのびとした生活をさせたいわ。」

「何をおっしゃるのですか。このル・フェロー家の後継者であるお嬢様を社交界デビューさせないなんて。世が世なら、姫君と呼ばれる立場ですよ。冗談にもほどがございます。」

「ああ、わかった、わかった。優秀な君の言う通りにするよ。」

「当たり前です。この年寄りの寿命を縮めないで下さいませ。この前も医師に血圧が高めといわれたばかり

ですのに。」

「すまない。いつもありがとう。とても感謝しているよ。あなたがいなければ私はどうしていいかわからなかっただろう。あなたは私の父に似ている。」

彼は執事の肩に優しく手をのせる。クロードはそれを微笑みながら見つめていた。

「あなた。わたくしは1週間ほど早めに日本にむかいますわ。パーティーはドレスコードが設定されているみたいだから、美しく色々とそろえてあげたいの。」

「それはいいね。きっと美麗も心強いだろう。ジェームズ。申し訳ないが、君も先に日本へ行ってもらえるだろうか。一応ハウスキーパーは雇っているが、美麗は寮生活を送っているから日本の家はあまり居心地いい状態ではないだろう。2週間とはいえクロードが快適に過ごせるように家を整えてほしい。リフォームをしてもいいし、君が気に入らなければ新しい家を購入してもらってもかまわないから。全て君にまかせるよ。私もなるべく早めにいくつもりなので、それまでクロードと美麗を頼む。」

「かしこまりました。」

「では、早速準備を手伝ってくれる？美麗に服を何着か送ってあげたいから。」

「はい。それでは公爵様のご期待に添えますよう最善の努力をいたします。」

「頼んだよ。」

「優香ちゃん、パーティーの返事が来たわ！」

「よかったね。美麗、心配していたものね。それでどうだった？出席なさるの？」

「うん！二人とも出席できるって。お父様は仕事があるからぎりぎりになってしまうかもしれないけれど、お母様は早めに日本に着きますって。」

「じゃあ、美麗の自慢のお母様にお会いできるかな？もしお会いできるなら、私のお母様にも紹介したいわ。」

「そうだね。日本に着く予定は 大変！18日のお昼だって。明日だわ！忙しいのにどうしよう。待ち合わせして買い物をしましょって。」

「あら。じゃあ、外泊願いを提出しに行こう。私もちょうどこれから提出しようと思っていたの。」

「でも、聖マリアンナ祭まであと1週間だよ？外泊なんて無理。」

「そんな事ないよ。本当に美麗って真面目だね。料理の手配も終わっているし試合のスケジュール調整も終わっているでしょ？パーティーの時の選曲も終了したわ。後は会場の飾りつけのフラワーアレンジメントのみ。生花を飾るわけだから、それは当日じゃないとせっかくのお花が枯れちゃうよ。」

「そうだけど...。」

「大丈夫よ。心配なら氷美城様か青様に確認しよう。今日は乗馬部も園芸部も弓道部も部活動はないから、生徒会室にいらっしゃるはずだから。行こう。」

生徒会室の前では氷美城と青がじっと考え込むような表情で空を見つめていた。その表情は悟りを開いた高僧のように見えた。その場の空気がピンと張り詰めていて、何人たりとも足を踏み入れる事が許されないような雰囲気を出している。

「見えるか、セイ。天の気が今までになく激しく動いている...。」

「はい。最近は特に木々のざわめきも尋常ではありませぬ。おそらく、コウとハクリも気が付いている事でしょう。」

「近いうちに何かが起こる...油断ならないぞ。良い方向ならば問題ないが、これは決してそういった天の気の流れではない。」

「はっ！」

生徒会室の前で美麗は瞬時に立ち止まってしまった。何？この<気>は...とても足を踏み入れることができない。これが人間の持つ<気>なのだろうか？北山先輩？東川先輩？

何も感じない優香が美麗をせかす。すると、その<気>は一瞬にしてなくなった。前を見ると、氷美城と青が穏やかな顔で微笑みかける。密かに美麗もほっとため息をつく。

「どうかしたの？」

「はい。聖マリアンナ祭の準備について確認したくて来たのですが。」

「それなら皆のおかげで90%は終了しましたよ。後は当日のフラワーアレンジメントだけですから心配ありません。そうですね。あなたたちには申し訳ないけれど、聖マリアンナ祭が終了する前に、時間は14時30分ぐらいに集合して花を選びましょう。パーティーが始まるのが18時からですから、十分に間に合うでしょう。」

「はい。」

「準備に関しては美麗が1番良くわかっていると思うけどその確認だけなの？他に何か用があるんじゃないの？」

「はい。それだけです。」

「美麗ってば違うでしょう。確認もそうですけど、外泊許可をいただきたくて来ました。氷美城様、まだ間に合いますか？」

「もちろんよ。珍しいわね。美麗が外泊許可に来るなんて。」

「はい。母が明日の昼に一時帰国しますので、迎えにいきたくて。」

「じゃあ、パーティーに出席なさるのね？よかったわね。」

「私も外泊許可を提出しに来たのですがよろしいですか？母と買い物の約束をしているのですけれど。」

「もちろんよ。2人とも楽しい週末を過ごして下さい。」

「ありがとうございます。」

2人は深くおじぎをすると一目散に去ってゆく。

「ずいぶん嬉しそうなお顔をしていますね。あの2人以上に喜んでいるみたいですよ。」

「そりゃあね。何ていったってあの人に会えるのだもの。青も知っていると思うけど？」

「あの人ね。おー鼻の下を長くして！まあ、あなたの憧れの人ですからね。私も楽しみですけれど。」

「何をにやけているのさ！嫌な奴。」

「それはお互い様でしょう。あの人は私の憧れの人でもあるんですから。私たちを覚えていてくれるでしょうか。」

美麗は急いで家路に着いた。久しぶりに会う母に少しでも居心地よく過ごしてもらいたいから、部屋を綺麗にしたかったのである。そこで花が大好きな母のために、青に特別許可をもらい学校の花を何種類か切ってきた。学院から20分くらい歩いた場所に美麗の家があった。そんなに大きい家ではないがよく手入れされた美しい庭がある。美麗にとっては居心地の良い久しぶりの我が家だ。美麗は歩いて帰ろうとしたが、ちょうど優香の実家から迎えの車が到着しており、優香が送るといってほぼ強引に車に乗せられた。しかしそれは、美麗が寮を出るタイミングに合わせて優香が運転手を呼んだという事に気が付いていたので、その好意に甘える事にした。

実家に着いた時、美麗は息を呑んだ。鍵が閉まっているはずの玄関が開いていたからである。家の中には、会ったことのない年配の外国人の紳士が、数人のメイドたちに指示をあたえている。年の頃は60代後半から70代前半といったところだろうか。誰だろう？それにメイド？何で？家を間違えたかしら。ふと不安を覚えた美麗に気が付くとその紳士は慌てて玄関に出てきた。そして深くお辞儀をすると流暢な日本語で話しかけた。

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

「あの、あなたは？」

「わたくしは執事のジェームズと申します。」

「し 執事？」

「はい。お分かりにならないのも無理ございません。お会いしたのはお嬢様が本当に幼い頃ですからね。何と美しくご成長されて...お母様にそっくりですね。」

そういうと、うっすらと涙を浮かべる。誰だっけ？覚えがない...美麗は戸惑っていたが、彼は荷物を受け取ると美麗の部屋へと案内した。そこで美麗は再び驚いた。その部屋には見るからに高級な絨毯が敷かれ、アンティーク調のドレッサーも置かれている。奥にはバスルームがあり、クローゼットの中には華やかなドレスがかかっている。ベッドはというと、上質な布に手の込んだ刺しゅう入りの天蓋付ベッドになっていた。ジェームズ曰く、かなり小さな家だが新しい家を購入するまでもないそうだ。家を購入して誰が？と突っ込んで聞きたかったのだが、まずは湯浴みをして疲れを取って下さいと強く勧められ、今は大量の薔薇の花が浮かんでいる自分専用のバスタブに浸かっている。

「気持ちいい。しかしなんて贅沢なのかしら。いったいこのお姫様のような待遇は何？全く理由が分かんないよ。夢じゃないの。」

頭を悩ませている美麗に、遠慮がちに声をかける。マリアだ。先ほどジェームズに妻だと紹介された。彼女は浴場に入ってきて背中を流すと言ったのだが、頭を整理したいと美麗が断固として拒否したのだ。

「お嬢様。お寛ぎのところ失礼します。ただいま奥様にご到着なされました。」

「お母様が？明日ではなかったの？」

「はい。何でも今日は空の状態がよかったので早く着くことができたそうです。」

「空の状態？まさか自家用ジェット機だったりして。」

「もちろんですよ。奥様も快適な空の旅を楽しめたそうです。」

美麗はもはや頭を抱えて絶句するしかなかった。

「お母様！お帰りなさい！」

美麗の声にゆっくりと振り向いた女性は、優しい笑顔を愛娘に向ける。淡い金髪で、アクアマリンのように美しい薄いブルーの瞳。白い上品なスーツがとてもよく似合っている。

「私の美麗。元気だった？リビングにとてもきれいなお花がいけてあったけれど、あなたが選んでくれたの？」

「気に入ってくれた？」

「もちろんよ。ありがとう。とてもうれしいわ。」

「私こそきれいなドレスがたくさんあってびっくりしたわ。マリアさんに聞いたら全て私のドレスだって。何着か学校に持って行っていい？」

「もちろん。でも流行遅れではないの？実は日本の流行ってわからなかったから、私が美麗と同じくらいの年齢の時に着ていたものがほとんどなのよ。全てオートクチュールで作ったものだから、上質なものばかりなのだけど。明日は美麗のサイズにあわせたドレスを買いに行きましょうね。そうそう、アクセサリも必要だわ。怪訝そうな顔をしてどうしたの？気分でも悪いの？」

「違うわ。ドレスとかアクセサリとかとても嬉しいけどお金がかかるでしょう？」

「そのことなら心配しなくていいのよ。もしかしたら戸惑っている？」

美麗は正直に深く首を縦にふる。父は単なる学者であって裕福なはずがない。しかし、現実に執事がいてメイドもいて、おまけに自家用ジェット機まである。家のリフォームでさえ莫大なお金がかかったはずである。母は優しく娘を抱き寄せる。

「戸惑うのも無理ないわ。あまりにも今までと境遇が違うものね。そのことも話さなくてはいけないと思っていたのよ。詳しいことはお父様がお話するわ。招待されたお屋敷のお金を盗むとかそんな事をしてるわけではないから安心して。」

とちゃめつけたっぷりに話す母を見て、美麗は思わず吹き出してしまった。

「ようやく眉間の皺がとれたわね。さあ、お茶にしましょうか。」

絶妙なタイミングでジェームズがお茶のセットを持ってきた。それを受け取るとクロードディアがお茶を入れる。マリアがかわいらしい一口サイズのスコーンを持ってくる。

「このスコーンはマリアの手作りなのよ。食べてみて。」

「美味しい。」

「でしょう？マリアは料理自慢なのよ。夕食が楽しみだわ。」

「ありがとうございます。奥様。腕によりをかけて作りますよ。お嬢様は苦手なものとかありますか？」

「特にないです。私も楽しみにしていますね。」

「はい。それでは早速準備しましょうね。あなた、食材を運ぶのを手伝って下さい。」

そう言うと、マリアとジェームズはリビングから出ていく。それを見送ってから美麗が母に話しかける。

「あの2人は仲がいいのね。素敵なお夫婦だわ。」

「それだけではないわ。仕事もできるのよ。どれだけ私とお父様が助かっているか。本当に2人には感謝しているの。ところで、明日は何時くらいに買い物に出かけましょうか？」

「お昼くらいでいい？実は友達を紹介したいの。」

「あら。もしかしたら藤原 優香さん？美麗がよく手紙に書いてくるお友達でしょう？確かお母様が日本舞踊の先生で、お若いのに日本伝統文化協会の理事をしていらっしゃるとか教えてくれたわね。」

「そうなの。優香ちゃんもお母様を紹介したいって。もしスケジュールが合うなら、ランチとショッピングをご一緒しませんかって言われたんだけど。」

「それはいいわね。この機会にぜひお会いしたいわ。」

「よかった！さっそく連絡するね。」

嬉しそうに電話をしている美麗を見て、クローディアはそっと微笑みを浮かべる。実は美麗がとても人見知りをしてしまう性格だとわかっていたので、全寮制の学校に預けることは少し心配だったのだ。果たして友達ができるのかどうかと。しかし、学校を卒業したら嫌でも人と接する機会が増えるので、社交性を身に付けさせる為に、あえて全寮制の学校に入学させたのである。もちろんレベルが高いとわかってはいたが、この娘は見事に期待にこたえてくれた。誰よりも心優しく素直な娘はクローディアにとって自慢以外の何ものでもない。電話を終えて席に戻った娘に2杯目の紅茶を入れる。

「ところで通学のことだけど、この一週間だけ自宅から通うことは無理なのかしら？」

「多分、無理だと思う。」

「そう。困ったわね。オートクチュールのドレスを2着ほど作る予定だから、何回か打ち合わせとか必要になると思うの。まあ、打ち合わせは私だけでも大丈夫でしょう。それよりも聖マリアンナ祭が終わったらまた当分会えないのだからせめて一週間だけでも一緒に過ごしたいのだけれど。学院側に聞いてみてもいいかしら？週末だけど、どなたかいらっしゃるかしら。例えば学院長とか、シスター長の先生とか？」

「多分、学院長はいらっしゃると思うけど...。」

学院長とはもちろん氷美城のことである。以前に実家が遠いから週末でも家に帰れないと言っていたのを覚えている。

「はい。聖マリアンナ女学院です。」

「わたくし、桜木 美麗の母でございます。いつも娘がお世話になっております。お忙しいところを申し訳ございません。」

「こちらこそお世話になっております。」

「突然の電話で失礼いたします。実はお願いがありまして電話をかけたのですが。お時間はよろしいでしょうか。」

「はい、大丈夫です。いったいどのような事でしょうか？」

「ありがとうございます。実は、現在わたくしは主人の仕事の関係で、海外を拠点にしております。その為、聖マリアンナ祭が終了したら帰国しなくてはなりませんので、娘にも当分の間会えなくなります。そこでこの一週間のみ娘を実家から通学させたいのですが。全寮制とわかっていますので、このような例は許されない事も存じております。でもあえてお願いをしたくて電話をしました。親の我儘なのですが、お聞き届け願えませんでしょうか？」

「もちろん大丈夫ですよ。レディー・クローディア。あなたは国内にいるわけではありませんから、例え一週間だけでも、美麗のそばにいてあげてください。」

「わたくしのことをご存じなのですか？失礼ですが...。」

「お忘れかもしれませんがね。花のクローディア。氷美城です。北山 氷美城。幼い頃、よくお屋敷にお邪魔してはあなたに纏わりついていました。」

「氷美城ちゃんなの？本当に？そういえば、学院のパンフレットにもあなたの名前が記載されていましたね。同姓同名だったので、もしかしたらと思っていましたが 美麗から 四天王 北山先輩のことは聞いていましたし、人違いとも。だけど、やはりあの氷美城ちゃんなのね。そうそう確か白銀色のバラ“メタリナの君”でもあるのでしたっけ？」

「よしてください。あなたまで。」

楽しそうに笑いながら電話をしている母を見て美麗は驚いた。氷美城先輩と知り合いなのだろうか。北山財閥の総裁の知り合い？ますます頭が混乱してくる。おまけに、今の会話からすると、昔よく母の実家に遊びに来ていたらしい。ということは幼い頃、私にもあったことがあるのかしら？確かジェームズも私にお久しぶりですとかいっていたよね。私は幼い頃よくお母様の実家に来ていたともいっていたから。全然、覚えがないけど...

「美麗、氷美城ちゃんが電話に出してくれて。」

美麗は一度大きく頭を振ってから電話に出た。これ以上考えても頭が痛くなるだけだ。

「お待たせしました。」

「美麗？あなたも聞こえていたと思うけど、特別に実家から通学することを許可します。この一週間はお母様とゆっくり過ごしてね。私も家に来ないかと誘われたのだけど、学院を離れるわけにはいかないのよ。よろしくと伝えて。」

「はい。ありがとうございます。」

美麗は電話を切ると微笑みを浮かべている母に満面の笑顔を返した。

「ここから通学してもいいって！」

「よかったわ。一週間も一緒にいられるなんてとても久しぶりね。神様に感謝しましょう。」

「ところで、お母様は北山先輩を知っているの？」

「ええ。そうね、美麗が2～3才のころかしら。一時的に家で預かっていたことがあるのよ。私も詳しいことはわからないけれど、氷美城ちゃんの先祖はヨーロッパの古い王族の血筋で、ル・フェロー家とは交流があったらしいわ。いつ頃からの仕来たりか、代々氷美城ちゃんの一族の後継者をホームステイさせてきたのよ。ル・フェロー家がその一族の忠実な部下か何かだったのじゃないかしら。」

「そうなの？お母様の実家っていったい...。だって北山財閥の総裁だよ？そんじょそこらの財閥と違うわ。」

「まあ、やはり氷美城ちゃんが北山財閥の後を継いだのね。あの子も大変だわ。あら。また眉間に皺が寄っているわよ。心配しなくても大丈夫だから。お父様が日本に来たら全て話してくれますよ。この一週間は2人で楽しみましょう。」

昼下がりの街中で人々の視線を一心に集めている場所があった。そこには、日本人特有の切れ長の目で凜とした美しさを持った女性と、外国人らしい華やかなバラを彷彿させる美女がにこやかに歓談していた。その横では、彼女たちにそっくりな美少女が楽しそうに話している。藤原 香代乃とクローディア・桜木・ル・フェロー、優香と美麗の母親である。2人とも16の娘がいるようには見えない。

「初めまして。わたくしはクローディア・桜木・ル・フェローでございます。娘が大変お世話になっております。」

「わたくしは藤原 香代乃でございます。こちらこそ優香が大変お世話になっております。また、ル・フェロー家のご高名はよく存じ上げております。こうしてお会いできるとは、とても光栄で名誉なことでございます。」

「まあ、そんな堅苦しいことは抜きにしましょう。わたくしのことはどうかクローディアと呼んで下さい。わたくしは日本での友人はあまりおりませんので、ぜひ友人になって下さい。わたくしも香代乃と呼ばせていただいてもいいかしら？」

「もちろんです。でも身分が違いすぎますわ。」

「決してそんなことはありません。確かにわたくしはル・フェロー家の人間ですが、その前に主婦であり、可愛い娘を持っている母親です。香代乃と少しも変わりません。どうか友人として末永く付き合ってください。」

「わたくしでよければ喜んで。」

「よかった。実は、初めてお会いしたのに何故かあなたを知っているような気がしていたの。ずっと以前にどこかで会ったことがある気がするわ。」

「まあ。わたくしもそう思っていました。何故かしら？とても失礼なのですがずっと以前にいつも一緒に過ごしていたようなそんな懐かしさを感じていました。」

「本当ですか？実は私も美麗と初めて会った時に、同じことを感じましたの。どこかで会ったことがあるって。」

「え？優香ちゃんもなの？実は私もそう思っていたの。不思議だわ。親子で同じことを思うなんて...。」

4人はお互いの顔を見つめた。そろいもそろって何故同じことを感じるのだろうか。変な緊張感が走ったその時にふっと一陣の風が頬にふれた。これは本当に単なる偶然なのか...。運命の歯車は確実にその時を刻んでいるのであった。

一方、聖マリアンナ学院の生徒会室では、氷美城、青、白璃、紅の4人が奥の一室に籠り、円陣を組んでいた。北に氷美城、東に青、西に白璃、そして南に紅が立っている。氷美城の呪文とともに、初め4人の姿は金色の光に包まれ、次に青は龍の形をした青い光、白璃は白虎の形をした白い光、そして紅は朱雀の形をした赤い光、氷美城は玄武の形をした銀色の光が炎のようにその身を覆った。そして、北山 氷美城、東川 青、西道 白璃、南池 紅の姿は消え、4人の真の姿、トゥジュール国の四神、北の王神ヒミキ、東の聖王セイ、西の聖王ハクリ、そして南の聖王コウに変化した。その後、最初はセイ、次にハクリ、コウの順番で呪文を唱えると、それぞれ呪文の最後に腕を天に向け、そこから一筋の光条が放たれた。海のような青い光、雪のような白い光、炎のような赤い光である。最後にヒミキが呪文を唱えると、三色の光条は一つとなり、金色に輝いて天に向かう。やがてアストラル・ロード(=星世界)が開かれ4人の頭上に宇宙が出現した。そして一瞬にして宇宙は閉じられ生徒会室の天井となった。

「一応、結界を強化した。しばらくは心配ないはずだが完璧なものではない。銀水晶の力がないから 負の力 に破られる可能性もある。そんな事にならなければよいが、万が一という事もある。その時は頼んだぞ。」

この言葉をうけた、セイ、ハクリ、コウがヒミキに深く頭を下げる。

「じゃあね。優香ちゃん。3日後の聖マリアンナ祭は頑張ろう。」

「うん！あの素敵なドレスを着た美麗を楽しみにしているわ。」

「ありがとう。優香ちゃんのドレス姿も楽しみにしているわね。」

「ではお嬢様。家に帰りますよ。」

「はい。お待たせしました。今日のマリアの料理は何かしら。とても楽しみ。」

そういって美麗は銀のロールス・ロイスに乗り込んだ。それを見送る優香。部活に向かおうと後ろを振り向くと、いつの間にか有園 雅がいた。顔は笑顔だがその目は笑っていなかった。嫌な予感がしたのでいつもの挨拶をしてその場から離れようとしたのだが、案の定声をかけてきた。

「これから部室に行くのでしょうか？ご一緒しません？同じ乗馬部だし、ちょっと聞きたいことがあるの。」

ほら来た！嫌な予感ってあたるのよね。そう思いつつも平静に答える。

「私に聞きたいことって何かしら？」

「桜木さんのことよ。あちらにいきましょう。」

「雅、そんなに時間がかかる話なんですか？優香はこれから私と一緒に園芸部に行く予定です。花達の世話が待っていますからね。何だったらあなたも一緒に行く？一応、あなたも園芸部よね？草むしりとかしてあげないと病気になってしまいますから、一緒に草むしりをしましょう。」

「草むしり 私は乗馬部に行きますわ。」

「では、早く話をすませてください。草むしりをするのに色々道具が必要なので、優香に手伝ってもらわないと。話が終わるまでここで待っていますから。」

雅は口をきゅっと引き結び軽く青をにらんだが、青はいつもとかわらずクールにみつめかえすだけである。

「桜木さんだけど、全寮制なのに何で自宅から通学しているの？規則違反じゃない！」

「それなら私が答えましょう。学院長、つまり氷美城が聖マリアンナ祭終了時まで、具体的にいえば、美麗のご両親がヨーロッパに帰国されるまで許可したんですよ。」

「そんなの！彼女だけ特別扱いするなんて納得できないわ！氷美城はきっとあの女に脅されたのよ！」

「そんなわけないでしょう。口を慎みなさい。あなたにもわかっているはず。美麗のご両親は日本に住んでいるわけじゃないから、外泊届を出せばいつでも会える距離にはいない。子供じみたことを言わずにもう少し大人になりなさい。美しい顔が台無しですよ。おっと。」

手をあげた雅を優雅な仕草でよける青。雅は悔しそうに足を一回踏み鳴らすとその場から去っていく。

「あの様子だと馬場に行くのは避けたほうがよさそうですね。このまま温室にいきませんか？その後、生徒会室でお茶を飲みましょう。氷美城もいるはずですよ。」

もちろんその提案を喜んで受け入れる優香である。優香が草むしりは？と尋ねると悪びれた様子など少しもなく、あれは嘘ですと答える青だった。

美麗は車の中でそわそわと全く落ち着いていなかった。それこそ5分おきぐらいに、まだつかないのかと何回もしつこく質問をした。ジェームズは半ば呆れながら、何度ももうすぐですと律儀に答えていた。こんな事でル・フェロー家の将来は大丈夫なのだろうかと本気で考えた位である。しかし美麗のきらきらと光る目や、心から嬉しそうにしている態度を見たら、まあ仕方がないなと思う事しかできなかった。自然と笑みも漏れる。

「お父様！お帰りなさい！」

家に着いたとたんに満面の笑顔を浮かべて飛び込んできた娘を、桜木 麗土は目を細めて愛おしそうに見

つめた。

「元気そうよかった。学園生活を楽しんでいるようだね。安心したよ。」

「お父様が来るのはぎりぎりになるかもしれないと思っていたので、車の中で家に戻っていると聞いてとても嬉しかったわ。仕事は大丈夫なの？」

「もちろん。思ったよりも早く終わったのですぐに出発したんだ。一刻も早くお前たちに会いたくてね。家も素晴らしいよ。さすがだな。ありがとう、ジェームズ。」

「恐れ入ります。」

麗士は満足そうにうんうんと頷いた

「美麗、着替えていらっしやい。お父様からお話があります。」

「はい。」

美麗は急いで自分の部屋に向かう。部屋にはマリアが待っていた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。お召替えの前に軽くシャワーでも浴びられますか？」

「いいえ。今日は後でゆっくりお風呂に浸かるから今は着替えだけにするわ。」

「かしこまりました。今日はこちらのワンピースをお召しになられてはいかがですか？」

それは母と一緒に買い物をした時に作ったワンピースだった。とても淡いらベンダー色でウエスト位置は高めになっており、ベルトになっている部分が濃い紫色になっている。華やかな飾りはなく、少し大人っぽい上品なワンピースだ。美麗の薄紫色の瞳とよくあっている。美麗は一も二もなく大きく頷き、それに着替えると階下で待つ両親のもとへと急ぐ。

スワロフスキーのシャンデリアが煌めき、いかにも高級な家具が配置されたリビング・ルームのソファーに座っている美麗の瞳は大きく揺れており、濃い紫色になっていた。麗士はじっと考え込んでいる娘を優しく見つめ、そんな麗士の肩にそっと手を置いて同じように娘を見つめるクロードア。やがて美麗が重たい口を開いた。その声の調子から、明らかに彼女の不安な気持ちが感じられた。

「つまり、お父様はすでに一介の言語学者ではなく、ル・フェロー公爵というわけね。そしてお母様の実家であるル・フェロー家とは、貴族年艦には載っていなくても、700年前から続いている由緒正しい家柄で、それは王家に匹敵する。そして次代の公爵候補は私というわけ？私の本名は、美麗・桜木・ル・フェローだと。来年のウィーンオペラ座の大舞踏会で社交界デビューをすると同時に次代の公爵としてお披露目する。そんな事とても信じられない。冗談でしょう？」

「神にかけて嘘や冗談は言っていないよ。お前が戸惑うのも無理ないが。何、ちょっと肩書きができるだけでそれ以外は変わらない。実際にお前が女公爵としてル・フェロー家を継ぐのはまだまだ先の事だよ。」

「私には荷が重すぎるわ。だって貴族のマナーなんてまるでわからないし、領地を統治する為の知識も全然ないのよ。」

「それをいうなら私もお前と同じだ。正直に言うと、まだまだ戸惑うことが沢山ある。だが、ジェームズやマリア、クロードアの助けを借りながら精一杯ル・フェローの当主としての務めを果たしている。素人の私にも出来ていることをお前ができないなんて事はないよ。もちろんお前の周囲は私と同様に今までとは全く違う環境になるだろう。だからといって私は変わったかな？」

「いいえ、変わっていないわ。」

「その通り。だから美麗も変わる必要はないし、むしろ変わってほしくない。愚かなことだが、人間というものには少し環境が変わるだけで性格まで変わってしまう。特に財産が絡んでくるとなおさらだ。今まで見えていたものさえ見えなくなってしまう。だから罪を犯してしまう人もでてくる。でもそんなのはただの幻想なのだという事を忘れないでほしい。」

麗士は、困惑の表情を隠せずに黙り込んでしまった娘の横に座ると、優しく抱きしめた。

「本当はお前が高校を卒業してからゆっくり話そうと思っていたんだが、社交界デビューの話が出てきたので話すことにした。いきなりウィーンオペラ座のデヴュタントの話をしたら余計に戸惑うだろう？心配しなくても大丈夫だよ。お母様もお前と同じ年齢の時にこの大舞踏会に参加したそうだ。会場には私たちも一緒に行くから安心していいよ。」

だから真っ白いドレスと手袋、そしてアクセサリーを買ったのね。全て来年の2月にウィーンオペラ座のデヴュタントに出席する為の準備。白いドレスは2着あったけれど、もう1着のほうは聖マリアンナ祭用。確かお母様が来ていたドレスをリフォームしたものと教えてくれたわ。変ね。私は何故こんなことを冷静に考えられるのかしら…。

美麗はまだ戸惑っているものの、父親の広い胸に抱かれていることによってだいぶ落ち着きを取り戻してきた。もちろんまだ不安はある。しかしこれが自分の運命なのだと冷静に思うことができたのだった。だからこそ執事がいて、メイドがいて、自家用ジェット機なのだ。へんに納得してしまったのである。そんな娘がわかったのか、麗土はそっと娘を元の場所に戻した。そしてにっこりと笑う。

「このワンピースも買ったのかい？お前の美しい薄紫色の瞳とよく合っているね。とても素敵だよ。さあ、マリアが待ちくたびれてしまうから食事しよう。これから4日間、お前たちと一緒にいられるなんてとても嬉しいよ。家族で過ごすのは久しぶりだ。」

10月25日の当日、その様子はまさしく圧巻だった。街のホテルに次々とベンツやロールス・ロイスといった高級車が続々と到着しては駐車場に吸い込まれていった。ベルボーイが休む暇もなく、華やかに着飾った人々をホテル内に案内している。ロビーの入り口に近い場所で、氷美城、青、紅、白璃がゲストを迎えていた。4人ともシンプルなタキシードに身を包んでいた。そんな4人に熱い視線を向ける女性達。もちろん妙齡のハンサムな男性も大勢いるが、そんな彼らもかすんでしまう位に目立っているのだ。そして、また1台銀のロールス・ロイスがホテルに到着した。

「お父様。どうかしたの？何だか気分がよくないみたい…。」

「いや、気分が悪いわけじゃない。何だか妙な感覚がしてね。不愉快な感覚というわけではないんだが…。」

「あなたも？実はわたくしも同じように感じているの。どうしてかしら？」

「お父様もお母様も大丈夫？気分が悪いのなら無理しないで。北山先輩には私から話しておくから。」

「体調が悪くて気分が悪いというわけではないから大丈夫だよ。幼い頃家にいた氷美城ちゃんにも会いたいし。それにこんな美女2人をエスコートできる機会なんて滅多にないからね。」

3人はゆっくりとホテルへ向かう。それに気がついたベルボーイが中へ案内しようと近づいたが、一瞬にして体が硬直したように動かなくなった。思わず開けてしまった口を閉じることができずにただ見とれている。麗土がル・フェローですがと名乗るとあわてた様子で失礼しましたといった。美麗たちに気がついた氷美城が、顔を少し赤くして、興奮したように喜びに輝いた瞳で近寄ってきた。負けじとするかのよう青も続いた。そんな2人に気がつき、紅と白璃が続く。

「お久しぶりです。公爵様。北山 氷美城です。覚えていらっしゃるでしょうか？」

「もちろんだよ、氷美城ちゃん。そちらは青ちゃんだろう？2人ともとても美しくなったね。だけどドレス姿が見られないのは残念だな。まあ、仕方がないか。なんていったって“四天王”だからね。そうそう、別名“バラの君”だっけ。」

茶目っ気たっぷりに話す麗土に顔を赤くする氷美城。

「そんな事...お恥ずかしい限りです。覚えていて下さって光栄です。」

「公爵様、お久しぶりです。私のことまで覚えていて下さったなんて光栄です。」

「当たり前じゃないか。家にはいつも一緒に来ていたのだから。2人共クローディアを慕って、纏わりついていた事が思い出されるよ。」

「本当に美しくなりましたね。幼い頃の2人がつい昨日の事のように鮮明に思い出せるのに。そう、氷美城ちゃんが北山財閥を継いだという事を娘から聞きました。とても大変でしょう。何かあったら主人とわたくしが力になりますよ。遠慮なく相談して下さいね。」

「ありがとうございます。あなたは全くお変わりありませんね。相変わらず花のように美しい。」

「まあ、ありがとう。お口も上手になったわね。メタリナの君？」

「あなたまで...やめて下さい。」

そして氷美城が美麗を食事するテーブルにエスコートしていく。美麗を見つめているその目はとても優しい。テーブルには藤原家が待っていた。氷美城にル・フェロー家を紹介された優香と優香の両親は、洗練された本物の貴族に会えた事でとても興奮し感動している。そんな中、ホテルの支配人が恐縮しながらお時間になりましたと声をかけてきた。氷美城は両家に一時的に退席する旨を伝えるとその場から離れていった。

「皆様。本日はお忙しい中、この親睦パーティーにご出席いただきましてありがとうございます。また、今年は特別ゲストとしてル・フェロー公爵夫妻をお迎えできたことに感謝します。その事によって、我が聖マリアンナ学院の名声もますます世間に広く知れわたる事になるでしょう。短い時間ではございますが、美味しい料理と優雅なダンスタイムをお楽しみ下さい。乾杯！」

皆が楽しそうに歓談をし、美味しい料理に舌鼓をうっているなか、有園 雅は一人だけ不機嫌だった。口をへの字に曲げて見つめているその先には美麗がいた。見るからに上品な白いドレスを着ているその姿はまさに可憐な王女のようなようであった。華やかな飾りはなく、銀色の糸で美しい刺しゅうを施してある上質なレース。少し細身に作られたそのクラシカルなドレスは美麗の美しさを際立たせている。そもそも美麗はドレスを作れるような身分であるはずがないと思っていたのに、あろうことが由緒正しい家柄で貴族の娘だったとは！しかも北山財閥とも交流がある大資産家、ル・フェロー家の後継者だ。つまり財産も美貌も持ち合わせているという事になる。有園家も結構な財産を持っていることは確かだが、北山財閥やル・フェロー家は格が違いすぎる。

もともと聖マリアンナ学院に転校生として入学してきた美麗が大嫌いだった。初めはどんな子が入学してくるかわからないから、自分の取り巻きの一人に加えてあげてもいいと思っていた。しかし実際に入学してきた美麗を見たときにその美しさに驚いた。自分ほど美しい者はいないと思っていた雅が初めて負けたと思った人物である。しかも頭もいいし、何よりも自然と人を引き付ける魅力があった。雅は憎しみが込み上げてくるのを止めることができなかった。そしてその思いはますます募るばかりである。

「絶対にここから追い出してやるわ！」思わずそんなつぶやきが漏れた。

その通りだ。あんな娘はお前の力で追い出してやるがいい。

「誰！」

その声の主をさがして周辺をみまわしたが、そこには誰もいない。気のせいかと思ったその時、再びその声が聞こえてきた。

なぜ思い通りにしないのだ。お前がこの女王ではなかったのか？なんなら力を貸してやろう。私の名を呼ぶがいい。

「いったい誰なの？姿を現しなさい！」

私の姿を見たいのなら、我が名を呼べ

ぞくっと寒気を感じる、挑発をするような声に恐ろしくなり、氷美城の姿を必死に探す。氷美城はどこ？どこにいるの？

「氷美城！」

「雅？どうしたの。顔が真っ青よ？」

氷美城の腕につかまり、ほっと息を吐く。雅？と再び声をかける氷美城。

「少しだけ気分が悪くなっただけ。もう大丈夫よ。」

「そう？それならいいけど。」

その時、ホテルから美しき青きドナウが流れてきた。

「さあ、ダンスタイムよ。踊れる？」

「もちろんよ。氷美城に恥はかせないわ。」

そうすると、雅は当然のように氷美城の方へ優雅に手を伸ばした。氷美城は困ったようにそっとその手を外した。雅がどうしてというように首をかしげた。

「悪いけど、一番初めは美麗と踊るから。」

雅の目がいきなり怒りの目にかわる。

「許さないわ！去年だって一昨年だって私と踊っていたじゃない！」

「別に雅とだけ踊っていたわけじゃないでしょう？それに今年は美麗たちが手伝ってくれたからこそ、こん

なに盛大なパーティーを開催することができたのよ。まずは生徒会のメンバーから踊るという予定を立てた。私たちが踊り始めないとダンスタイムが始まらない。」

「そんな事知らないわ！皆だって知らないはずよ。」

「ちゃんとプログラムに書いてある。さあ、子供みたいなことを言っていないで会場に戻るよ？雅と踊りたい紳士がたくさん待っているわよ。」

「私は氷美城以外の人と踊るのは嫌なの！早く私をエスコートして！」

雅がその腕にしがみつくと、眉をひそめながらその腕をはずす。

「勝手にしなさい。」

そういうと氷美城は雅を後に残して1人で会場へ向かう。氷美城！と大きな声を出してその後を雅が追っ

ていく。会場では青、紅、白璃がやきもきしながら氷美城を待っていた。氷美城は謝るとずっと美麗の手を取り、優雅なワルツを踊り出した。続いて青と優香、紅と朱美、白璃と小夜子のペアーが踊り出す。そしてパートナーチェンジをしたと同時に桜木夫妻と藤原夫妻が踊り出した。あまりの美しさに会場はしんと静まり返ったが、やがて少しずつ踊るカップルが増えてゆき、最後は全員で踊り出した。その様子は圧巻で、とても日本とは思えなかった。

雅は踊りを申し込んできたハンサムな青年の手を思い切り払いのけ、一人その会場から外に飛び出した。この怒りをどうしよう！私から氷美城を取ったあの女！絶対に許せない！

「絶対に許すものか！ずたずたにして追い出してやる！アミヤ！」

え？アミヤ？いったい誰？そう思ったとたんに雅は意識を失いその場に倒れた。数秒後、意識を取り戻した雅は会場の方へ体を向けた。そしておもむろに呪文を唱えるとその手をまっすぐに会場へ向けた。すさまじい稲妻のような赤黒い光が放たれた。

パーティー会場ではラストダンスとなる皇帝円舞曲が流れていて、人々の興奮は絶好調になっていた。だが氷美城たちだけは違った。凄まじい負のエネルギー。危ない！そう思った時はすでに遅かった。会場が大きく揺れ、続いて稲妻のように大きな爆発音が鳴り響く。人々はパニックを起こし恐怖に震えた叫び声をあげる。やがてしんと静まり返り、闇が広がる。

そんな闇の中、破壊された会場の入り口に赤黒い光が出現した。その光の中には赤い目をした雅がたっていた。妖気を漂わせ艶っぽい微笑みを浮かべている姿はとても人間には見えない。

「何と脆いこと。所詮、人間は人間。どうでもいいわ。わらわの知ったことではない。さて、これからどうしようか。まずは彼らを見つけなくては...誰だ？」

「お久しぶりでございます。アミヤ様。我等の女神よ。」

「そなたは黒の長老。やはりそなたもここにいたか。もしやいないのではないかと思っていたぞ。」

「私がお側にいないわけがございません。恐れ多いことですが、あなたが幼い頃から親としてお側にありましたぞ。あのヒミキらから私の気配をすっかり消さなくてはならなかったことに苦労しましたが、あなた様の偉大なお力のおかげで今まで有圓 雅章として生活をして来られました。奴らも気づいておりますまい。」

「そうだったな。わざわざ同じ文字を使って結界を作っていたのだった。しかし、お前の娘はなかなか強情だぞ。こうしていてもわらわに全てをゆだねようとはせぬ。後でお仕置きをしなくてはならない。」

「私にお任せ下さい。何しろ父親ですからな。」

「これから忙しくなるぞ。愚かな人間どもを我らの奴隷にせねばならないからのう。今度こそこの世界の全てを我らのものにする為に。そしてわらわは名実ともにこの世界の支配者となるのだ。」

「そうはさせない！」

「誰だ！」

闇の中にまた光が出現した。銀の光と青の光である。そしてそこにはヒミキとセイの姿があった。銀色のオーラを放ち銀の鎖帷子に身を包んだヒミキ、北の玄武の力を持つ王神にしてすべてを支配する人類の王、そして、銀青色のオーラと青い鎖帷子に身を包んだセイ、ヒミキの右腕にして東の青龍の力を持つ神であり、東の地を支配する聖王。

「信じたくなかったが、やはり雅の中にそなたが潜んでいたか。そして黒の長老。そなたまで転生していたとは...」

黒の長老、かつて雅の父親であったその男は鼻先でフンと不敵に笑う。

「わたしは不死身だ。何度封印されようこの命が尽きることはない！この世に人間がいる限り何度でも転生できる。お忘れですか、ヒミキ様？黒の一族とは人間が誰でも持っている 負 の心から生まれた闇の一族でもあるという事を。」

そう皮肉を言ってから、剣をヒミキに向ける。その様子を見た雅、アミヤはその場から離れようと背を向けるが、セイがそれを阻む。

「逃がしはせぬぞ。」

「おのれ！その息の根を止めてやる！」

闇の中で剣と剣の火花が散る。アミヤとセイ、ヒミキと黒の長老、4本の剣が入り交りあい光を放つ。やがて、アミヤの剣をセイがはじき飛ばす。

「ヒミキ様！今です！アミヤに封印を！」

その言葉で一気に長老の剣を振り払うと封印の呪文を唱えるヒミキ。

「天空にあり東方、西方、南方を支配するもの、北の玄武のもとに集い、我が言の葉に答えよ。」

「そうはさせぬ！」

長老が再び剣を取りヒミキを襲う。セイが剣で応じるが、長老の剣がセイの右腕に突き刺さる。それを見てもう一方の手に青龍刀を持ち、それを振りかざす長老。

「セイ！危ない！」

ヒミキは銀の光を放ちその刀を消滅させると傷ついたセイにかけよる。そのすきに、アミヤと長老が姿を消す。

「逃げられたか...。」

「申し訳ございません。私が不甲斐ないばかりに奴らを逃してしまって...。」

「そなたのせいではない。まずは会場の人々の手当てをしなくてはならないのに戦いを先行させてしまった。これではかの大戦の二の舞になるところだった...」

「ご心配には及びません。人々はすでに怪我の手当てを受けております。」

「誰だ？」

警戒をしながらヒミキとセイは声のした方を振り返った。ゆっくりとヒミキとセイの前に男女二人が歩み出て跪く。クローディア？公爵も？何故だ？驚きの表情を隠さず見つめているヒミキとセイにクローディアが深くお辞儀をして口を開く。

「我々人類の王、そして尊き王神、ヒミキ様。わたくしはかつて大神官と呼ばれていたもの」

「わたくしは北の玄武を奉り、北の大地を祀る部族の長でございます。」

ヒミキは遠い過去を思い出すかのように一度目を瞑った後に、再びゆっくりと目を開きもう一度2人を見つめる。懐かしいオーラを確認すると静かに口を開いた。

「大神官クレアと北の大地の部族長サレイか。そなたたちが転生するとは思ってもいなかった。だが、闇の女神アミヤの封印が解けた今、何と心強いことだろう。しかし何故そなたたちは目覚めたのだ？」

「おそらくこの会場に来たとき、その時は目覚めておりませんでした。違和感がありました。もちろん不愉快なものではありませんでしたが、他の場所とは異なる空気を感じました。そして先程のアミヤの攻撃とヒミキ様たちのオーラによって、一気に古の記憶が蘇りました。正直なことを申しますと、大神官とはいえ、人間であるわたくしが転生するとは思っていませんでした。ましてやわたくしは自ら命を絶った身。」

「それをいうならば、わたくしも同様です。力ある大神官様ならば納得も致しますが、わたくしは一介の部族の長でしかありません。」

「サレイの部族の代々の長のもとへは、何人もの力ある女神や精霊が嫁いでいる。その事もあり、そなたの部族にはたびたび人間とは逸した超常力を持って生まれてくるものがある。そなたとてそうだったではないか。その力はクリアにも勝ると劣らぬほど。しかし、男であるがゆえに神官にはならなかった。それは幼馴染であるクリアが一番わかっていたはず。一介の部族長とは異なる者だ。転生も不思議ではない。」

「恐れ多い事でございます。」

「それよりも何も知らない会場の人達はどうなっているのだろう。手当てをしていると言っていたが。」

「はい。神官カノと神官ユアが手当てをし、コウ様とハクリ様が人々の恐怖の記憶を消しております。」

「神官カノと神官ユア？いったい...？」

「藤原 香代乃と藤原 優香です。これで最初に会った時に、何故か懐かしいと感じた理由がわかりました。古の記憶です。」

「何という事だろう。何故 彼女 と縁のある者ばかりが目覚めるのだろう。これはただの偶然なのだろうか。」

「もしかしたら、銀水晶の姫も目覚めているのでは？」

「そうだとしたら、彼女の 気 を感じるはずだが、何も感じないし気配すらも感じられない。」

ヒミキは悲痛な顔をして下を向く。そう、愛する人がこと切れていく姿を今でもはっきりと覚えている。私は何もできずにただ抱きしめていただけだった。美しいその人は、悲しげに微笑んでいた...。そんなヒミキの肩にそっと手を置くセイ。その顔にはヒミキと同じように悲しみの影を色濃くうつしていた。

その昔、この世は四人の神と大神官によって統治されていた。四人の神は、玄武・青龍・朱雀・白虎の力を持っており、その力を四つの神器に封印して大神官に託し、地上にはほとんど姿を現さなかった。神との交信が可能なのは、大神官とその修行をしている次代の大神官候補者だけだった。

神殿で神官の修行を受ける事ができるのは良家の娘のみと限定されていて、その中で大神官候補者となるのは、北の守護・玄武を奉る一族、東の守護・青龍を奉る一族、南の守護・朱雀を奉る一族、西の守護・白虎を奉る一族の族長の娘だけだった。各一族の中で、一角獣を祀る部族、土地を祀る部族、植物を祀る部族というように細かくわかれており、部族長の娘達も修行はできたが大神官にはなれなかった。まれに優れた力を持つ部族長の娘もいて大神官候補者に上がったが、ごく一部に過ぎない。

ある時代、アミヤという名の朱雀を奉る一族の族長の娘がいた。とても美しく、優れた神通力を持った娘で、次代の大神官とまでいわれていた。同じ時代に、玄武を奉る一族の中で、大地を祀る部族に一人娘ラミレも生まれ、彼女も他の部族長の娘達と同様に神官としての修行をしていた。

当時の大神官クレアは、その美貌もさることながら、とても慈悲深く優れた能力を持ち、人々の尊敬を一身に集めていた。アミヤを始め、彼女の周りで修行をする娘達にも恵まれていた。この大神官の下、この世の平和は維持されるはずであった。

部族長の娘達は10歳から見習いとして神殿に預けられるが、四族長の娘達は7歳から預けられる者もいた。もちろん、次代の大神官候補者である。彼女達は、他の娘達が神官に預けられるのに対して、最初から大神官に預けられた。アミヤとラミレは後者で、7歳より神殿に入り大神官クレアが師であった。アミヤは朱雀を奉る一族の族長の娘なので、大神官が師となるのは当然なのだが、ラミレは玄武を奉る一族の中の、大地を祀る部族の部族長の娘である。本来なら神官に預けられるのだが、特待生として大神官クレアに仕えていた。その理由は、他の部族と異なり特殊な部族だったからである。

ラミレの部族は、北の玄武の大いなる守護を受けていた。というのも北の大地の部族長のもとには、何代も前から人間ではなく並外れた力を持つ女神や、女神クラスの美しい精霊たちが嫁いできていた。つまり人間と女神（あるいは精霊）の両方の血が流れているのである。中には超常力をもって生まれてくる者もいた。ラミレの父サレイも優れた超常力を持っていた。大神官クレアとは幼馴染で、その特殊な環境から、男性禁止の神殿への出入りが許されていた。ラミレは父親と同じような超常力は持っていなかったが、人並み外れた直感の持ち主であった。

「ラミレ、どうしたのだ？明日は神殿に戻る日だろう。早く休みなさい。何でそんなに暗く浮かない顔をしている？美人が台無しだぞ。」

「お父様...。」

月一度の一週間の里帰りが終わる前の晩の事だった。ラミレは不安に襲われてなかなか寝付けなかった。何故ならば、昨晚、とても嫌な夢を見たからだだった。それは愛する父親が寝室で血まみれになっている夢だった。倒れている父親の周りには、黒装束で覆われた人間が数名いた。それに追い打ちをかけるようにこの屋敷は炎に包まれていた。さらに、この国が焼け野原となっていて、荒涼とした大地にすすり泣きのような風が吹きすさび、大量の、山のような死体にあふれていた。それをあざ笑うかのように響く嬌声...

「何か心配な事でもあるのかい？」

「昨夜とても不吉な夢を見ました。とても胸騒ぎがします。どうしても神殿に戻らなくては駄目でしょうか？お父様の身が心配なのです。」

母親譲りのその美貌の顔に憂いの影を色濃く落とし、薄紫色の瞳が濃い紫色に変化して不安に揺れている。

サレイはそんな愛娘を見つめ、優しく抱きしめると安心させるように背中を軽くたたいた。

「大丈夫だ。何も起こらないよ。私の周りには、サイドを始め、優秀な近衛兵や最強といわれている屈強な兵士が沢山いる。お前は安心して神官の修行に励みなさい。明日は神殿の近くまで私が送って行こう。もうお休み。お前に北の玄武と大地の精霊のご加護がありますように。」

ラミレは父親を確認するように、何度も振り返りながら自室に向かった。そんな様子の娘を見送りながら、密かに眉をひそめる。昔から彼女の直感が外れたことはなかった。サレイが眉をひそめた理由はそれだけではなかった。彼自身もまた、自分の死が近いという事を予知していたのである。

彼は自分が死ぬことに対して恐ろしいとは思っていなかった。この世に生を受けてから何事にも全力を尽くし、精一杯生きて、笑って、泣いて、愛してきた。この世に未練はなく悔いることもない。ただ娘だけが心配だった。おそらくは確実に神官にはなれるだろう。しかし、彼女の力は一介の神官だけで終わるような能力ではない気がするのである。だが、あくまでも彼の勤であって、確定しているわけではなかった。クリアは気が付いているのだろうか…。

彼が物思いにふけりながら自室に向かう廊下を歩いていると書斎の中から光が漏れていた。明かりを消し忘れたかとその部屋に入ると、光輝いていたのは、ラミレが大神官から渡された神官の心得書だった。疲れているのかと目をしばたたかせ、改めて見直してみる。しかし、それは何の変化もなかった。

「気のせいかな。ラミレが忘れないように渡してやらなくては。」

早朝にサレイとラミレは馬で神殿に向かった。通常よりもだいぶ早く屋敷を出たので、久しぶりの乗馬を親子で楽しんだ。神殿前で馬をとめるとサレイはラミレに神官の心得書を渡した。彼女はそれを一瞬だけ躊躇し、恐る恐るといった感じで受け取った。

「ここで別れよう。また来月に元気な顔を見せておくれ。」

「お父様もお元気で。」

これが、親子で交わす最後の会話となった。

光の国、toujours。しかし、光があれば闇も生まれる。この世の中は決して「光だけ」「闇だけ」では成り立っていかないものである。相反する二つの力が調和して初めて物事は成り立つのである。だが、正反対の二つの力が調和することは難しく、時に大きな悲劇を生む。

ある夜の事である。ラミレは再び屋敷での悪夢を見た。結局、ベッドで何回も寝返りを繰り返し、一睡もできずに白々とした明け方になってしまった。彼女は顔と手を洗うと神殿の庭に向かった。庭に出ると花さえも何かに怯えているように見えた。

「大丈夫よ。大丈夫。」

ラミレは不安のあまり、自分を励ますかのようにして花に言葉をかけた。ふと何かを感じて前を見ると、若くてとても美しい青年が立っていた。銀の髪と黒真珠がはめ込まれている額飾り、銀色の衣装を身に付けている姿は神秘的で、まるで銀の光の化身のようである。

「あなたはどなたですか？」

すると幻のようにその姿はスッと消えてしまった。ラミレは夢心地になり、彼が消えたその後もなかなかその場を離れることができなかった。

「あなたはあの方が見えたのですか？」

ラミレは大神官クリアの声で我にかえり、現実に戻った。

「先程の、銀の光の化身のような方の事でしょうか。大神官様はご存じなのですか？」

「そうです。人間如き卑しきものがお目にかかることなど許されないお方です。あなたが帰省した時、神官の心得書に何か変化があったのではありませんか？」

ラミレは躊躇しながら、心得書を読んだ時に呪文のような光の文字が浮かび上がり、心得書が光ったこ

と、光の文字の意味は分からないが、体に浸透していったことを話した。クレアは一度、天を仰ぎみてからラミレに視線を戻した。

「あなたが見たお方は、四神の最高神である玄武、すなわち北の王神ヒミキ様です。」

その直後の事である。重傷を負っている男が神殿に辿り着いた。血まみれになりながら、息も絶え絶えにラミレを訪ねてきた男は、北の大地の部族長を守る第一近衛連隊の副隊長ライルだった。彼はサレイの無念な死を告げる為だけに、気力で神殿にきたのだ。ラミレに敵は身近にいるから、気を付けるようにというサレイの最期の言葉を伝えるためだけに。そして彼はラミレと大神官クレアに支えられながら息絶えた…。

光と闇の戦が始まり、数ヶ月が過ぎていた。ラミレは休むことなく戦場に出向き、傷ついた者達の手当てをして、時には励ましの言葉をかけていた。しかし、戦で負傷する人々は増えるばかりだった。彼女自身も疲労で何回も倒れたが、大神官クレアが止めても、戦場には重傷を負ってとても苦しんでいる人達がいるからと、戦場に行くことをやめなかった。

地上の惨状に見かねた四神が降臨し、人々と共に戦ったが、この戦が終了するには長い時間がかかった。そもそも闇とは何なのか。それは、人間の心にある欲望に他ならない。

戦はもともとその欲望に取りつかれた神官アミヤの驕りの心から始まったのである。彼女は大神官クレアの持つ神通力と同等の力を持っていた。それゆえ、次代の大神官と人々に期待されており、クレア自身も認めていた。だが、なまじり力があるために驕りという心の闇に取りつかれ、ついに人々を虐殺し始めたのである。自分こそがこの世界の支配者であると誇示するためである。

彼女はまず、北の大地の部族長サレイを殺した。その理由は、彼女にとって目の上のたんこぶである大神官クレアの幼馴染という事と、この国の人々に慕われている彼は、自分がこの国を支配するうえで必ず厄介な存在になると確信していたからである。その後、次々と各部族の土地を侵略していった。その非情さは人々に恐怖を与え、闇の女王といわれるようになった。しかしその一方で、そんな彼女を崇拜し、偉大な女神と称賛する者も出てきたのである。

ラミレは戦が始まってから、ひたすら人々を看病し、励ましていた。その瞳と微笑みは慈愛に満ちており、まさに聖母そのものだった。そんな彼女をずっと見つめ続けてきた北の王神ヒミキは、ラミレを見初め愛するようになっていた。

戦場はとても危険な場所である。ラミレは何回も命を狙われた。ヒミキとセイは何度も彼女を助けたが、意外にも彼女は見事な剣の使い手だった。数人と戦っては勝利していたが、彼女は人を殺めるごとに、苦悩の表情を見せては涙を流し、相手の死を悼んでは、祈りを奉げ、埋葬をしていた。彼女が哀惜の表情を見せるたびにヒミキの心も痛んだ。何とか彼女を助けたいと切実に思い、危険な賭けに出ることを決意した。それは人間が使いこなせるかどうか分からない力、すなわち神の力の一部を与える事だった。

「ヒミキ様。この美しい銀水晶は？」

「それは私の力の一部だ。あなたに預けよう。その水晶は四神すべての力、すなわち、玄武、青龍、朱雀、白虎の力を召喚できるようになっている。」

「何と恐れ多い事でしょう。これを賜るのが大神官様ならば納得も致しますが、わたくしごとき若輩者には荷が重すぎます。」

「あなたの母上は、偉大な花の女神フローラでした。彼女の血を引いているあなたならばきっと大丈夫です。」

「セイのいう通りだ。私とその力の使い方を教えよう。あなたはきっと使いこなせるはずだから。」

「でも...。」

ヒミキは口ごもるラミレにもう一つのものを手渡した。それはレースの様な精巧な飾りが施されている金の額飾りである。一瞬、それを見たセイは驚きの表情を見せたが、何故か憂いの表情を浮かべながらも、す

ぐに冷静な顔つきに戻った。

「これをあなたに。これは光でできている金の額飾りで私の分身でもある。あなたが傷つけば、私も同じ箇所傷を負い、同じ痛みを感じ、あなたの身に危険が及んだら、すぐその場に行くことができる。そして、近い将来あなたは私の妃となり、私の子を産むだろう。そして大地の母、人類の女王となる。」

ラミレは驚愕の表情を浮かべたが、次の瞬間に喜びの涙があふれた。ヒミキに愛されること、それは決して叶わない切ない願い事と思っていた。

「春と木を司り、東を守護するもの、青龍『セイ』。改めてここに北の王神ヒミキ様と、その妃ラミレ様に忠誠を誓います。」

セイは跪くと、ヒミキの手に礼を取り、続いてラミレにも同じように礼を取った。ヒミキとラミレは熱い口づけを交わした。

ヒミキが妃である証の、光でできている金の額飾りをラミレに渡してからさらに数ヶ月が過ぎ、ラミレは神殿で男の子を出産した。その頃は、戦も一時的に休戦状態となっていた。ラミレの側には、必ず大神官クレア、神官カノ、神官ユアが控えていた。彼女達はアミヤとラミレの同期で、もともと大神官クレアに仕えていた。ユアは東の青龍を奉る一族の族長の娘で、カノは西の白虎を奉る一族の族長の娘だった。2人とも大神官候補者だったが、大神官の修行をしても、あいにくと神通力はあまり得られなかった。だが、とても素直で従順な性格からクレアが気に入り、側近として自分の世話をさせていた。ラミレが、ヒミキの妃となったその日から、クレアの指示によりラミレにも仕えていた。

ラミレは、ヒミキの妃という尊い身となってからは、戦場に行かないでくれというクレアの強い望みにより、神殿に籠るようになった。それからというもの、ヒミキはもちろんだが、必ず四神の誰かがその身を守護していた。特にセイは毎日とっていいほど、頻繁にラミレの身辺警護をしていた。ヒミキの右腕というだけではなく、まるでかけがえのない大切な人を守るかのようにいつも影のように付き添っているのだ。

だが、そんな穏やかな日々は続かなかった。再び戦が始まったのである。休戦状態と思っていた事は大きな間違いで、アミヤ達は、この戦に決着をつけるべく総攻撃の準備を整えていたのだ。そんな中で神の子の誕生と、ラミレが大地の母となったことを知った。大地の母、人類の女王となるのは、この私であるはずなのにと激怒し、今まで以上に激しい攻撃を仕掛けてきた。アミヤもまた、密かにヒミキを慕い、愛していたのである。

もともとクレアと同等の力を持っていた彼女は、ラミレがヒミキに出会う以前に、クレアと共に、何度も神殿の祈りの間でコンタクトを取っていた。拝謁する度に胸をときめかせ、この方にふさわしい女性になりたいと思っていた。この戦とて、ヒミキに自分の力を披露し、どれほど優れているかを理解してもらい、神官アミヤこそが北の王神ヒミキの妃、人類の女王であると認めてもらいたかったからである。

死闘の末、アミヤ以外の闇の者達はヒミキら四神によって壊滅した。アミヤはもはやこれまでというところまで追いつめられた。プライドが高く、決して負けを認めないアミヤは、ヒミキ達、四神を振り切りながら神殿に向かった。ラミレとその子供を道連れにして死ぬためにである。ヒミキに愛され、子供まで儲けたラミレだけは絶対に許せなかった。必ず殺すという強い殺意を胸に秘めながら神殿に到着した。神殿には結界が張ってあったが、アミヤにとってはほんの子供のお遊び程度にしかない。たちまち結界は破られ、いともたやすく神殿の中に侵入した。神殿の中には大神官クレアが一人で佇んでいた。呪文対呪文の激しいバトルが繰り広げられた。

ラミレと御子、神官ユア、神官カノは秘密部屋に潜んでいた。アミヤが来るという事を予知していたクレアが、4人をこの部屋に隠したのである。自分の身に何があっても絶対にこの部屋を出るなときつく厳命したのだった。そしてラミレは、一旦その指示に従ったが、すぐに我が子をユアとカノに託し、地上に続く道を作り、3人を逃がそうとした。ユアとカノは、ラミレも共にとかたくなに拒んでいたが、ラミレは静

かに微笑みを浮かべ、首を左右にふった。しばらくしてから、部屋の扉が開き、恨みの目をキラキラさせて、血にまみれた剣を持ったアミヤが現れた。床には、アミヤによって重傷を負わされた大神官クレアが倒れていた。剣を振りかざし、ラミレを襲うアミヤ。ラミレは銀水晶の剣でそれに応じる。アミヤの黒い炎をまとった闇の剣と、光の銀水晶の剣が火花を散らす。ラミレは一旦アミヤの剣を思い切り振り払うと、銀水晶の剣を本来の銀水晶の姿に戻して呪文を唱える。たちまち、ユアとカノは光の結界に覆われた。

「ラミレ様！」

「ユア、カノ。わたくしとあの方の御子を頼みましたよ。」

「逃がすか！」

アミヤは再び黒の剣をとると呪文を唱える。そんなアミヤを後ろから、クレアが羽交い絞めにしてその呪文を阻む。しばらくの間、二人のもみあいが続いた。ついにアミヤがクレアを突き飛ばすと、黒い剣の切っ先をクレアに向ける。クレアが覚悟を決めて目をつぶったその時、銀色の鋭い光がアミヤに向かって放たれた。それをまともに受けたアミヤはその場に倒れこむ。その光の元を見ると、ラミレの手の中にある銀水晶だった。ラミレはクレアに駆け寄ると、重傷を受けたその体を抱き起こし、銀水晶をその体にあてる。

だが、今度はすでに起き上がっていたアミヤが、黒い光をラミレに向かって放つ。と同時にラミレの体が光輝いた。するとそこに銀水晶の壁が出現した。

「ラミレ！やめてくれ！」

そこに現れたヒミキが叫ぶ。しかし、ラミレは呪文を中断しようとはしなかった。ヒミキの方を向くと、悲しげな微笑みを浮かべた。それを見たクレアは剣で自らの命をたつ。

「な...に...い...。おのれ、ラミレ！このままではすまぬぞ！私は必ず蘇る！」

アミヤはこう呪いの言葉を残し、その場から消滅した。ラミレが唱えた呪文は、秘儀中の秘儀で、自分の命と引き換えにして全てのものを封印するという、最終手段であった。そこは銀水晶の洞窟となり、ラミレはその場に崩れ落ちるように倒れる。ヒミキはラミレに駆け寄ると、愛しい人を抱きしめる。暖かかったその体のぬくもりがだんだんと消えてゆき、終には水晶と同じ位に冷たくなってしまった。残されたのは、ほんの一時の幸せと、最大の哀しみであった。

涙にくれているヒミキに、神官ユアが御子をそっと差し出す。その子はすやすやと寝息を立てて眠っていた。ふと目を開けるとヒミキを見て微笑んだ。ヒミキはその子を抱きしめる。

「何と暖かいのだろう...。」

そうつぶやいたヒミキの心を現すように、一陣のそよ風が通り過ぎていった。

「クレア。セイが黒の長老の剣を右腕にうけている。すまないが、見てやってくれないか？」

「はい。セイ様、右腕をわたくしに。」

「すまない。」

クレアはその傷を見ると一瞬だけ眉を顰めたが、すぐに呪文を唱え始めた。やがて傷口より不気味な黒い煙が上がる。すかさずヒミキが呪文を唱え、光の玉を出現させると、その中に煙が吸い込まれていき、最後には消滅した。消滅する前にその煙は断末魔のような悲鳴をあげた。ヒミキが光の力によって、黒の長老の一部を滅ぼしたのである。

「これで黒の長老の力は少し弱まっただろう。だが微々たるものだ。彼女 がいけない今は、我々だけで闇の一族とアミヤと戦わなくてはならない。かなりの苦戦が強いられることだろう。サレイ？どうかしたのか？」

「この場所に来た時に感じた違和感について考えておりました。クローディア、いえクレア様と来たあの時に感じた違和感は、恐らくはヒミキ様たち四神の尊いお力だと思うのですが、まだ目覚めてもいなかったのに何故それを感じる事ができたのかと...今は明確に古の記憶も蘇っておりますが、何かきっかけがあったのではないかと...そのきっかけとは一対何なのだろうと考えておりました。銀水晶の姫のお力がはたらいたのなら別ですが、ヒミキ様のおっしゃったとおり、姫の 気 は感じられませんでした。」

「姫はあなたの娘でしたね。あなたが愛娘の 気 を感じられないはずがない。その当時、わたくしが持たせた呪文書があるのなら別ですが。」

「その呪文書ですがクレア様がお持ちなのではないかと思っていました。確かル・フェロー家に代々守っているという“開かずの金庫”がありましたよね。鍵も何もついていないアンティークな美しい金庫が。」

「ええ、確かにあります。こちらの世界で兄だった方が亡くなった時に、鍵も何もついていない金庫があって、これはどうやってあけるのかと非常に困りました」

「その金庫の中に呪文書が封印されているのではないかと思うのです。クレア様が目覚めた今、その封印も解かれているような気がします。あくまでも私の勘ですが。」

「クレア、すぐにそのことを調べてくれないか？サレイの勘なら99%は間違いないだろう。その呪文書はかつて私が与えたもの。私の力の一部でもある。これから始まる戦いに、それがあるとないのでは戦況が異なってくる。」

そういうとヒミキは氷美城に戻り、パーティー会場へと向かう。破壊されたはずのそこは、何事もなかったかのように人々はにこやかに別れの挨拶をかわしている。白璃、紅がそんな人々を見送っていた。そこに氷美城が加わる。

後に残されたクローディアはとても不安げな暗い表情をしていた。心配してサレイが声をかける。

「クレア様？どうしたのですか。お顔の色がすぐれません。」

「あなた、いつものようにクローディアと呼んで下さい。転生とはいえ、今はあなたの妻です。他人行儀な呼び方はやめて。」

「すまない。どうしたんだい？悩み事でも？」

「セイ様の怪我です。治療してヒミキ様が長老の一部を消滅させたけど、完全に治癒していない気がします。何故ならこの世界はあまりにも 負 のエネルギーが強いから。とても不安なの。」

麗土はそんな妻をそっと抱き寄せる。大丈夫だ、安心しなさいと言ってあげたいが、決してそんな事は言

えなかった。彼もまた妻と同じ不安を感じていたからである。

「まずは呪文書をさがさなくては。君も覚えているだろう？かの大戦の悲劇を繰り返してはならない。」

「ええ。その通りだわ。二度とあんな思いはしたくない...。」

肩を寄せ合いながら歩いていく2人を見つめる影があった。セイである。セイは負傷した右腕を見るとさびしい微笑みを浮かべその場から去って行った。

「ご機嫌様。」

美しい荘厳な鐘の音が鳴り響き、今日一日の授業が終了して交わされる挨拶。何も変わらない光景。ただ一つ、有園 雅がないという事以外は。しかし誰も気にする様子がない。むしろ彼女の存在そのものが無かったかのようである。ただ一人、桜木 美麗を除いては。

美麗はいつものように講堂に行こうとしていた。何だか気持ちがすっきりしない。いつもと変わらない光景だけど何かが違う気がする。誰かがいた。いつも自信にあふれていた誰かが...名前が出てこない。

「美麗。何をポーっとしているの。クラブに行くよ？」

「優香ちゃん。そうね。あれ？でも今日は園芸部の活動はないんじゃない？」

「何を言っているの。乗馬部の方だよ。氷美城先輩も待っているよ。3人で西の馬場に行きましょうって約束したじゃない。」

「そうだった？でも、私が所属しているクラブは園芸部だけだよ。確かに優香ちゃんが乗馬部に誘ってくれたけれど、違う人が入部したじゃない。」

「美麗、頭は大丈夫？誘うも何も私と同じで、美麗は最初から乗馬部と園芸部に所属していたじゃない。ほらぐずぐずしない。」

美麗はなかば優香に急き立てられるようにして乗馬部の部室に向かった。

馬場に着くと氷美城が待っていた。美麗は当たり前のようにずっと白い馬に近づくと優しく馬をなでた。するとその馬も嬉しそうに頬ずりをして美麗に甘えた。

「今日も素敵ね。ユージン。いい子にしていたかしら。」

「焼けちゃうほど仲がいいわね。ユージンは私にだってそんなとろけそうな目をして甘えたりしないのに。美麗は特別なのね。」

「そんな事はないです。ただ私はユージンが大好きなだけ。ところで、この頃東川先輩を見かけませんがどうかしたのでしょうか？」

「私にもわからない。優香は？」

「私もわかりません。もしかしたら自分の故郷へ帰っているのではないのでしょうか？」

優香は氷美城にしかわからない 故郷 という言葉を返した。

「故郷か。本当にそれだけならいいけれど...。さあ、乗馬を始めましょう。このままだと日が暮れてしまう。」

ル・フェロー家ではクローディアがある部屋の前にいた。“開かずの間”と呼ばれているその部屋は直系の者しか入室を許可されていない部屋だった。どういう理由かは不明なのだが、代々その部屋を守り続けるようにと伝えられてきたのである。現当主の麗土さえもその存在を知っているだけで、部屋に入ったことはなかった。クローディアは不安になり、一緒に来てくれないかと頼んだのだが、それは許されないことだからと説得したのだった。幾何学模様が彫刻されている重厚な扉を開けて中に入ってみると、たちまちクローディアのオーラが光輝いた。まるでその金庫の光に引き寄せられるように燃え上がったのである。

その部屋には、四本の柱に守られるようにして鎮座している光輝く小さな金庫があるのみであった。鍵もないその金庫に彼女が近づくと、音もなく金庫が開かれた。そして金色の文字が浮かび上がると、一瞬にして彼女の全身を覆い一枚の巻紙へと変化した。彼女は思い出したかのように呪文を唱えると再び金庫

を閉じた。さらに部屋の扉を思い出すとそこにある幾何学模様はこの呪文と同じものである事に気が付いた。そっと部屋を出ると再び呪文を唱える。するとその部屋そのものが消えてしまった。彼女はそこから背を向けると夫の待つ書斎へ向かった。

書斎では麗土が忙しく仕事をしていた。彼女の気配を感じ、書類から顔を上げると彼女を見つめた。その顔はすでに桜木 麗土の顔ではなく、北の部族長サレイの顔であった。クローディアがゆっくりとその口を開く。

「あなたのいった通りです。呪文書は“開かずの間”の 開かずの金庫 にありました。あの部屋そのものが結界となっており、その中に封印してあります。」

「やはりそうか。おそらくこのル・フェロー家の領土はかつての神殿があった場所だろう。私がル・フェロー家を継いだ時に気になる古文書を見つけたのを覚えていますか？」

「ええ。覚えています。その当時はわたくしもあなたも古の記憶がなかったから、とりあえずという事で図書館に保管しました。」

「それを持ってきて読み返してみました。誰が書いたかは不明なのですが、私たちの故郷のことが書かれてありました。“その昔、古の頃、自然と人々と神が共存していたこの世の理想郷があった。その名をトゥジュール国という。美しき四人の神々に守られ銀水晶の力で人々は平和に暮らしていた”とね。それにその当時の地図も書かれていたのだが、まさしくこの場所が大神殿のあった場所だった。だが...。」

苦悩の表情を浮かべながら、サレイは下を向いて黙り込んでしまった。そっとサレイの肩に手を置くクリアに、ためらいがちに古文書を見せる。クローディアが古代文字のそれを読むことは不可能だが、すでにクリアとしての自覚もある彼女がそれを読むことは簡単なことだった。それを読むと彼女も同じように一瞬声を失うが、静かに読み始めた。

「かの美しき国に禍が起こりついには滅びぬ。その禍は初めに力ある偉大なる北の大地の部族長の命を奪い、次には尊い大神官を自刃させた。そして銀水晶の姫の命をも奪う。」

その後を読もうとしたがそこで古文書は終わっていた。

「その地図を見るとすぐ近くに黒の一族の土地がある。時代と文明が変わるとその土地の様子も変わるが油断してはならない。ここは toujours 国にもっとも近い聖域であると同時にもっとも危険な場所だ。ヒミキ様たちが降臨されているという事は聖マリアンナ女学院には toujours 国につながる道があるのかもしれない。つまり、ここにもその道がある可能性がある。だからこそル・フェロー家は代々北山財閥の後継者をホームステイさせてきたのだろう。北山財閥の後継者というよりも、北の玄武、尊き王神ヒミキ様をここ（神殿）にお招きしていたのだ。」

2人は顔を見合わせると深く頷いた。Toujours 国は滅びていない。自分たちの故郷につながる道を見つけ、アミヤ達から守らなくては。そして懐かしい故郷に想いを馳せる。

「銀水晶の姫はどこにいらっしゃるのだろう。ラミレ...。」

クリアは思わずそうつぶやくサレイを優しく抱きしめた。そして彼女もまた愛しい夫と同じ思いをかみしめていた。銀水晶の姫に会いたい と。

美麗は悪夢にうなされていた。何も無い闇の中に1人で立っていると、周りから人々のうめき声や泣き声が聞こえる。やがてははっきりとした映像が浮かんできた。彼女は何処かの土地にいた。周りを見渡すと草木が枯れていてあちらこちらで煙が燻っている。何処かの戦場のようだ。足元には戦で命を落とした人たちや、大怪我をして苦痛に顔をゆがめている人、幼子をかばうようにして死んでいる若い母親 その幼子もすでに亡くなっていた がいる。美麗はその光景に耐え切れず走り出した。するとまた闇の道が広がる。その中をずっと走り続けるとはるか彼方に光が見えた。その光を目指して走り続けたがいっこうに近づけない。ようやく側までたどり着いたがそれは光ではなかった。見たこともないその場所は、薄暗い灰

色のどんよりとした雲におおわれ、異常なくらいに寒かった。たとえ僅かでも暖を取ろうとして腕を組む。冷たい風が吹きすさび、厚い氷の壁に囲まれているそこはどこなのか。突然、すすり泣きの声が聞こえる。

誰？どこにいるの。泣かないで。必ず助けてあげるから。ふと前を向くと一人の美しい少女が頑丈な鎖につながれて泣いている。その隣には少女の命の光（魂）が厚い氷に覆われていた。美麗が近づこうと一歩足を踏み出そうとしたとたんにもまた闇の中に引き戻される。

「美麗！」

氷美城の声で目が覚める美麗。

「早く助けなくちゃ！彼女が死んでしまう！」

ベッドから飛び起き、今にも走り出そうとする美麗を制し氷美城が声をかける。

「待ちなさい。いったいどうしたというの？」

「早く彼女を助けてあげないと！あのままでは死んでしまう！」

「彼女って誰？何で死んでしまうの？」

「有園さんのことです。有園 雅さん！」

「有園さんって誰のこと？そんな生徒はここにはいない。」

「何を言っているんですか！北山先輩が妹のようにかわいがっていた有園 雅さんです！彼女は今囚われています！とても寒い氷の壁に囲まれて、冷たい風が吹きすさんでいる荒涼とした洞窟のような場所に。そこで頑丈な鎖につながれていて、その横には彼女の命の光（魂）が。このままでは力尽きて消滅してしまう。彼女の肉体が限界になってしまったその時に命の光（魂）も尽きてしまい、有園 雅という一人の人間が消滅してしまう！」

そういったとたんにも美麗は気を失った。氷美城が何か呪文を唱えていた。そっと美麗をベッドに寝かすと寮の部屋を抜け出して生徒会室に向かう。その顔は優しい先輩、北山 氷美城の顔ではなく、厳しい顔をした北の王神、ヒミキの顔であった。

「我々の力が効かない？それはどういう事でしょうか。」

「わからない。美麗には雅の記憶も残っている。」

「そういえば今日、馬場に向かう前に彼女は自分で、私は乗馬部ではないとっておりました。名前は覚えていなかったようですが、私に紹介はされたけれど別の人が入部したと言い切っていました。」

「大神官クレアをはじめ、北の大地の部族長サレイ、神官カノ、神官ユアが次々と目覚めました。我々の力が効かず消したはずの記憶も断片的に覚えている...もしかしたら美麗が 彼女 なのではありませんか？」

「それはないだろう。美麗の 気 は人間のものだ。確かに誰もが持っている人間の 気 とは少し異なっているようだが toujours の 気 ではない。それはハクリとコウも感じているだろう？もしかしたら我々と何か関係があるのかもしれない。例えば、彼女の前世は我々の世界の人間だったとか...。もし美麗がラミレの転生だとしたら、我々のことはすぐにわかるだろう。だがその気配はない。」

ラミレ、銀水晶の力を持つ心優しき光の姫...。誰もがその微笑みに癒され、母のように慕い、そして愛されていた。彼女もまた人々を愛し、その優しい瞳で世界を見つめていた。

「ところでセイがどこにいるか知らないか？聖マリアンナ祭が終了してから姿が見えない」

遠い思いを振り切るようにヒミキがハクリとコウに問いを投げかける。しかし2人は黙って首を横に振るだけである。すると優香（神官ユア）が三人の前に跪き、ゆっくりと話し始めた。

「恐れながら申し上げます。わたくしも不安に思い大神官クレア様にお尋ねしましたら、今から1時間くらい前に伝言がございました。おそらくセイ様は toujours 国の東の神殿に戻っているのだらうとおっしゃっていました。理由は...。」

そこまでいうと、神官ユアは言葉を飲み込んだ。その顔には不安な表情が浮かんでいる。それを目ざとく見つけたヒミキはゆっくりと話しかける。

「ユア、あまり良い情報ではないようです。大丈夫です。話して下さい。私はセイが傷をつけられたその場所にいたのだからある程度の想像はできます。」

「はい。セイ様をその場で治療してヒミキ様はその呪いを消滅されましたが、完全に治癒されていないのでしょうとおっしゃいました。本来ならばそれで完全に治癒しますが、 toujours 国と違いこちらの世界はあまりにも 負 のエネルギーが強すぎると。その為に少しでも 負 のエネルギーを感じない場所に身をひそめているのでしょうということです。ヒミキ様たちにお知らせしなかったのは、アミヤ達との戦いが始まるうとしているこの時に、ヒミキ様たちのお心に憂いを持たせてはいけないと考えたからだと思います。」

「やはりそうだったか。それがわかったからには何としてもアミヤと黒の長老を封印して、有園親子とセイを救出しなくては...。闇に取り込まれる前に決着をつける。」

「しかし、有園親子は何処に囚われているのでしょうか。皆目見当がつきません。」

「おそらく彼等の土地だ。とても寒い氷の壁に囲まれて、冷たい風が吹きすさんでいる荒涼とした洞窟のような場所。そこに雅は囚われているらしい。まさに彼らの地底の国だ。」

「ヒミキ様。おそれながらお伺いします。その情報はどちらからの情報でしょうか。確かなものなのでしょうか？」

「美麗から聞いた。聞いたというよりも美麗の夢だ。聖マリアンナ祭が終わってから毎晩うなされていた。悪夢でも見ているのかと思い、それを取り除こうと彼女の夢の中に入ろうとしたがいつも弾かれてしまうので、今でもまだ入ることができていない。」

「美麗はどうしてそんな夢を見るのでしょうか？彼女はどう見てもごく普通の少女です。」

「ハクリのいうとおりです。とても超常力のある少女には見えない。」

「彼女の潜在意識下の力なのかも知れない。超常力を持ちながらそれをコントロールできていない可能性がある。あるいはそのことを知っていながら、自らの強い意志でその力を封印している可能性もある。私の勘だがおそらく彼女は後者だろう。彼女と初めて会った時の彼女の言動でそのことを感じた。彼女の夢は決して100%正しいとは言えないが、現在の状況を思えばわずか1%の情報だとしてもそれに賭けてみたい。」

「それは…。そうだとすると我々がそこに行くのは不可能です。一步でも我々光の者がその土地に足を踏み入れたら光と闇の大きな力が反発しあい、それが起爆装置となりこの世界はたちまち崩壊してしまいます。それこそ銀水晶の力がない限り、我々自身がこの世界を滅ぼすことになってしまう。」

「だからこそ呪文書が必要なのだ。クリアに与えた呪文書は、銀水晶の力の一部が封印してある。死闘となることは否めないがそれさえあれば、ほんのわずかだが世界が崩壊する時間を延期させることが可能になる。」

その時、一瞬その場が歪み、バランスを崩してよろめいた。アミヤたちの攻撃かと身構えたがそんな気配は全くなかった。すると、何もしていないのに突然アストラル・ロードが開かれた。そしてそこには、黒の一族の土地で頑丈な鎖につながれている有園 雅の姿があらわれた。彼女は憔悴しきっている様子でその瞳には焦点がなく、ただ前を見ているだけだった。その横には、厚い氷に覆われた彼女の魂が弱々しい光を放っている。そして突然あらわれたその映像は、あらわれた時と同じように唐突にその場から消えた。いったい何が起こったのか？その場にいる誰もが不審な思いを抱いたが、美麗の言ったことが真実であるという事が証明された。

「あんなにも鮮明に映像が現れるとは…。あれは間違いなく雅だ。かなり深刻な状態になっている。一刻の猶予もならない。」

ヒミキは、アストラル・ロードに大神官クリアと北の部族長サレイを呼び出していた。本来なら、人間である二人の肉体はこの異空間に耐えられないので呼び出すことなどしないのだが、人間1人の命がかかっている緊急事態だ。やむを得ずに呼び出したのである。もちろん二人の周りには結界を張ってある。

「ヒミキ様。」

「クリア、急に呼び出して申し訳ない。サレイもよくきてくれた。」

「いいえ、ヒミキ様のお呼びであれば、忠誠を誓う大神官として、こうしてすぐに参上いたします。」

「ありがとう。ところで、例の呪文書は見つかったのだろうか？」

「ここにお持ちいたしました。本当ならば、人間如き身であるわたくしが手を触れることなど許されない尊いものですが、大神官様に特別お許しをもらい、持参させていただきました。」

そういうと、うやうやしくヒミキの前に差し出す。それを受け取るとヒミキは二人を見つめた。

「どうしてわかったのだ？」

「親心とでもいうのでしょうか？恐れ多い事ながら、私とクリア様は同時に同じ夢を見ました。」

「夢？」

「はい。わたくしたちの愛する娘の夢でございます。」

「美麗の夢？」

「はい。あの娘が不気味な洞窟、おそらくは闇の一族の土地でしょう。でこの世のものではなく、深い闇よりもなお深い闇より出てくる、魑魅魍魎どもと1人で戦っている夢です。その手には何故か銀水晶の剣をもっておりました。しかも…。」

そこまで言うと、耐えられないとでもいうようにクリアは顔を伏せた。そんな彼女を気遣うように優しく抱きしめるサレイ。そして妻の代わりに静かに口を開く。

「しかも、あの娘は血にまみれておりました。それでもなお、その洞窟で戦っていました。そして最後には。」

そこまでいうと、サレイも耐えられないというような顔を見せて、力なくその言葉をつなげた。

「最後にはとうとう力尽きてその場に倒れ、その命が尽きる夢です...。」

「銀水晶の剣...。」

ヒミキもその当時を思い出したかのように、苦悩の表情を見せる。だが、すぐにそれを打ち消すかのように頭を強く振ると、力強い声を出す。

「美麗が何故銀水晶の剣をもっているのかはわからないが、美麗をそんな事にはさせない。必ず助ける。例えその場で私の命が果てようと、彼女の事は守り抜いて見せる。」

美麗は闇の中をゆっくりと漂っていた。そこはまるで揺籠で眠っているように心地よい。

ここは何処だろう？ いったい何処に行くのかしら？

やがて光が見えてくると、急速にその光に吸い込まれていく。たどり着いたそこは、きらきらと光っていた。周りを見ると不思議な色を放っている、美しい水晶の壁に囲まれていた。

「きれい...。」

次の瞬間、ふと漏らした言葉を思わず飲み込んだ。何気なく前を見たら、そこに美しい女性が横たわっていたからだ。死体？ それにしてはあまりにも美しすぎる。本当に人なのだろうか...。もっとよく見ようと近づいてみると、その女性は周りの壁と同じ水晶に覆われて横たわっていた。頬にはかすかな朱がさして、まるで眠っているように見える。その顔を見た瞬間、美麗は心臓が止まるかと思うほど驚いた。

「まさか！ 嘘でしょう？」

その女性は美麗に瓜二つだった。美麗は思わず後退りをする。その瞬間にそこが光り輝き、目の前の女性がゆっくりと目を開いた。と同時に美麗は別の場所に立っていた。見覚えのあるそこは、前に美麗が紛れ込んだ別世界の国だった。

「toujours 国...！ 何で？」

まさに青天の霹靂である。ヒミキが消したはずの記憶が蘇る。そう、ここは toujours 国。私は前に聖マリアンナ学院のあの小塔からここへ来た。だけど今回はあそこから来たわけじゃない。たんに眠っていただけのはず。美麗は1度目を閉じて大きく深呼吸をする。ゆっくり目を開けると空を見上げてみる。そこにはシルフィード達が優雅に飛んでいた。光を見ると、光の精がかわいらしく戯れている。その姿に思わず笑みを浮かべる。前に一度来たせいも、最初の時のようにパニックにはならず、むしろ逆に落ち着いており、開き直っている。

「間違いのないわ。ここは確かに toujours 国。ファンタジー小説や映画で異世界に召喚されるという話はよく読むし見たりもするけれど、まさか自分の身に本当に起こるとは思いもしなかったわ。相変わらず綺麗な国。でも...？」

前に来た時と何かが違っている。美しいということに変わりはないが何故だろう？ 改めて周囲を見回してみると、そこは緑に囲まれている場所だった。芝生に覆われた大地にきらめく川が流れ、川に沿って様々な木が自生しており、青々とした葉が生い茂っている。その木々に導かれるように奥へと歩いていく。どこまでも続く緑のトンネル。木の精霊達が美麗を歓迎していた。しばらくすると美しい門が見えてきた。その奥には宮殿が建っていた。門の近くまで行くと、いきなり何かに弾き飛ばされた。それは今まで彼女を歓迎していた木の気ではなく、何者をも拒むような冷たいものだった。目を凝らすと、それは蔦のように蔓を伸ばした茨の木枝だった。さらにその茨の壁の先を透視すると、美しいと思った宮殿は、びっしりと葉

に覆われていた。まるで来るものを拒む緑の要塞のようである。そしてその宮殿の奥に誰かが見える。

その人は何かと戦っているような苦しげな表情をしていた。サファイアのピアスにサファイアをはめ込んだ額飾り。一瞬上げたその顔はよく見知っている人の顔だった。

「東川先輩？」

次の瞬間、美麗はまたしても別の場所に立っていた。周りには惑星群がゆっくりと流れるようにまわっている。

「何これ？宇宙？あれは...。」

ふと前を見れば、水晶の洞窟に横たわっていた美麗と瓜二つの、あの美しい女性が立っていた。

「ここはアストラル・ロード、星世界です。」

「星世界？宇宙のことではないの？」

「正確に言うと、宇宙と地球との間にある次元結界とでもいいますか。普通の人間が来ることは不可能な場所です。」

「嘘でしょう？だって私は普通の人間だわ。あなただって...。」

その人はゆっくりと首を左右に振る。

「あなたの実態が来ているわけではありません。あなたの体は地球にあります。そうですね。あなたはちょうど幽体離脱をしている状態です。下をごらんください。」

言われるままに下を見ると、美麗自身がベッドの上で寝ているのが見えた。確かに私は幼い頃より他の人達と違って、あらゆる自然と話せたり動物の気持ちがわかったりした。それが当たり前だと思っていた。でも年月を重ねるごとに、それは当たり前のことではなく、自分がおかしいのだと気が付きその力を封印した。何故そんなことができたのかわからないけれど、自然にできてしまったのだった。その為に人との距離も一線を引くようになった。その封印が解かれてしまったのだろうか。だとしても幽体離脱までするとは思わなかった。自分自身がおそろしい...

「あなたは今すごく戸惑っているのね。大丈夫。怖がらないで。何も恐ろしいことなんか無いわ。」

「よして！私は私自身の力がわからない。確かに超常力があるという事は自覚しているわ。自覚せざるを得ないもの。でも幽体離脱までするなんて。私のその力はどこまでいってしまうの？まるで化け物じゃない。」

美麗の不安を感じたかのようにその空間が歪んで揺れた。

「ごめんなさい。私のせいなの。私があなただから封印が解けてしまったの。」

「私を呼んだ？それはどういう事？あなたは何者なの？」

「私はラミレ、そしてあなた自身。」

「何それ？わけがわからないわ。あなたが私自身？そんなバカな！」

「忘れたとしても仕方ないわ。その時から何万年も経っているから。それこそ、気が遠くなる位の長い年月が...。信じられないかもしれないけれどあなたは私の魂の半分なの。」

「魂の半分？」

美麗はますます頭が混乱してしまう。人間はもともと魂を半分だけ持って生まれてくる。だから片割れであるその半分の魂を求めて探し続ける、という話は聞いたことがある。しかしそれは自分の生涯のパートナーの事であって本人の事だなんて聞いたこともない。

「かつてこの世界は一つでした。神々と自然と人間が共存して幸せに暮らしていました。四神に守られ、それこそ争いなど何もない麗しき国、toujours 国。そこで私たちは大神官クレア様のもと、見習いの神官ラミレとして心安らかな日々を過ごしていました。あの大戦が始まるまでは...。」

美麗はふと前に見た夢を思い出した。大勢の人々の凄まじいほどの喚き声や泣き声、飢えている人に食物を与え、傷ついた人々をたった一人で手当てしている女性…。

「あなたは戦場で大勢の人々の手当てをしていた、あの女性なのね？」

宮殿のそこは、びっしりとした葉で覆われていた。その部屋の中で、セイは玉座に座ったまま目を閉じている。ぐったりとしているその姿はまるで死人のように見える。

私はこのまま死んでしまうのだろうか。何かを感じてふと顔を上げる。本来は青く澄んだ美しい輝きであるはずの額飾りのサファイアが、青黒く鈍い光を放っている。

「ラミレ...？気のせいかな。」

セイは過去を思い出すように視線を遠くに向けた。その脳裏には愛する女性の優しい微笑みと優しい声が浮かぶ。しかしそれも束の間、次に浮かんだのは鎖につながれた雅の姿。浮かんだというよりもパッと映像があらわれたのだ。セイはゆっくりと玉座から立ち上がると呪文を唱えた。

その人は黙って頷いた。だが彼女は納得できずにいる。大戦？そんなの経験したこともない。魂の半分？この女性と私が？それこそ余計に信じることは不可能だ。その人は悲しげな顔を向ける。

「お願い。信じて下さい。私を受け入れて。一刻の猶予もならないのです。あなたも見たでしょう？闇に囚われている彼女を...。彼女だけではありません。彼等は、続々と罪もない人達を捕らえてはその魂を抜き取り、強制的に自分たちの仲間にしていきます。それだけではありません。闇の呪いを受けて、この世界を守っている4つの尊い力の内の一つが消滅してしまいそうになっています。」

「4つの尊い力？」

美麗はその言葉で、ふと氷美城たちのことを思い出した。北山、東川、南池、西道...北の山、東の川、南の池、西の道。黒真珠、青いサファイア、赤いルビー、そして白のダイヤモンド。黒、青、赤、白、黄...

「四神...玄武、青龍、朱雀、白虎」

美麗の唇から思わず呟きが漏れた。ラミレは瞳を輝かす。

「そう。私たちが仕えていた尊い四神です。北の玄武、人類の王たるヒミキ様、東の青龍であり東の地を治めているセイ様、南の朱雀であり南の地を治めているコウ様、西の白虎であり西の地を治めているハクリ様。思い出して。」

時々見ていたあの悲しい悪夢は私の昔の記憶なのだろうか。それとも彼女の力？美麗は大きく1回だけ首を横にふるとラミレを見つめる。

「ごめんなさい。信じるといわれてもすぐには無理。だって私は桜木 美麗としての記憶しかないから。仮に今まで見ていた悪夢が失われた私の記憶だとしても、それを認めるには時間がかかるわ。」

「そう ですね。あなたと私の年月はあまりにも長い時を経ている。待つしかないのでしょうか。でも、一つだけお願いがあります。あなたの力を封印しないでください。さっき話した通り、四神の力の内のひとつが消滅しそうになっています。それを救えるのはあなただけです。」

そう言うと、ラミレは映像のように歪み始めた。

「待って。それはどういう意味？どの力が消滅してしまうというの？」

ラミレは何かを伝えようと口を開いたが、その姿は消えてしまい、またしても闇が広がった。

闇は動いていた。今度は私を何処に連れて行こうというのか。いいだろう。何処にでも連れていくがいい。何があるというのか。自分自身の目で見極めよう。

そこは神殿のような建物の中庭だった。一人の少女が見える。近づくとその少女は幼い頃のラミレだった。淡い金髪に薄紫色の瞳。

「ラミレ、薬草摘みは終わりにしましょう。天に祈りを捧げる時間になりました。神殿の中にお入りなさい。」

「はい。大神官クレア様。ただいま参ります。」

美麗は何気なく大神官と呼ばれた人を見ると、思わず手で口を押さえてしまった。

「お母様！」

白い衣を身に着け、髪には美しい黒真珠、ルビー、サファイア、ダイヤモンド、金でできている冠のような髪飾りをつけている。その容貌は愛する母親、クロードアとそっくりだった。おまけにラミレと一緒に歩いていくもう一人の少女を見ると、その少女もまた優香とそっくりである。ラミレがふと顔を上げたので美麗は彼女と目があってしまった。見えるわけがないとわかっていても思わず目をそらしてしまう。

“ミレイ、あなたはミレイでしょ？”

「誰？誰が私を呼んでいるの？」

“私はラミレ。あなたを待っていたの”

ぎょっとして下を見る。そこには確かにその少女、ラミレがいる。しかし彼女は美麗のことを見ていない。どうやら心で話しかけているらしい。

「私を待っていた？私は何もできないのよ？そんな私に何を期待しているの。私にはわからないわ...。」

“それは違う。あなたしかこの世界を救うことができない。四神とあなたの持つ銀水晶の力でしか救えない。”

「銀水晶の力？銀水晶の力って何？確かに私は超常力を持っている。でも銀水晶の力なんて知らないわ。」

“それはあなたが思い出していないだけ。その力を取り戻すために時空を超えてあなたはここ（過去）に来たのでしょうか？”

「私の意思じゃないわ。水晶に囲まれて眠っている、大人になったあなたに呼ばれたのよ。」

“それも私の意思ではないわ。おそらくは銀水晶の意思。銀水晶が 時の封印 を解いたから。あなたに本来の力を取り戻させるために、あなたを様々な次元に漂わせている...”

銀水晶の意思？銀水晶の力っていったい何なのだろう。そう思った先からまた周囲の様子が変わった。そこは時々見る悪夢と同じ戦場だった。大勢の人々の凄まじいほどの喚き声や泣き声、飢えている人に食物を与え、傷ついた人々をたった一人で手当てしている女性。今はその女性の顔がはっきりと見える。ラミレだ。いつもよりも、よりリアルにその場の悲惨な状況がわかる。老若男女問わずに虐殺された後...その中でひどい傷を負いつつも死にきれずにひたすら苦悶の様子を見せる者、その腹を裂かれ胎児とともに殺された妊婦、四肢をもがれて死んだ幼い子供、見るからに乱暴を受けた拳銃に殺されたとわかる年若い女性、まさにこの世の地獄である。ラミレの悲痛な祈りが心に響く。

「神よ、これはあなたが私たち人間に与えた試練なのですか...。人類の王、北の玄武にしてもっとも尊き神王ヒミキ様、お答え下さい...。」

涙？私は泣いているの...？そう。私たちは四神の下、誰もが皆幸せに暮らしていた。人々の顔には笑顔が絶えず、争いもない平和な国。花が咲き乱れ、暖かい日差しに包まれ、自然と会話をし、光の妖精と戯れ、静かな木陰のゆりかごに抱かれて眠っていた。それが何故こんな事になってしまったのか...。toujours 国。光満ち溢れていた私の故郷。そして、いつも私の傍にいてくれた尊い四人の王、ヒミキ、セイ、コウ、ハクリ...。彼等は何処に？

次の瞬間、美麗は赤黒い炎に囲まれていた。熱い？いいえ、熱くない。これは何だろう？私に纏わりつくこの 気 。吐き気がするほど不快だ。不愉快な嬌笑が響く。その方向を見ると、艶めかしい女が、目の前で重傷に苦しんでいる人間を楽しそうに見つめていた。やがて見飽きたとでもいうように、その者に槍を向け一気に心臓を突き刺す。それを傍にいた男が持ち上げ死体をつけたままの槍を地面につく。串刺しにしたその人間を残忍な笑みを浮かべて眺める女。その目には慈悲というものがまるっきりなかった。

「アミヤ...！」

美しく冷たい怒りが湧き上がる。思い出した...！闇の女神アミヤ、南の族長の娘。四神をないがしろにし、自分こそが神だと人々に触れ回っていた残虐な女。彼女もラミレと同じ神官だった。とても強力な力を持ち、次期の大神官ともいわれていた裏切り者。私たちは toujours 国の平和を取り戻すために彼女と戦っていた。また周りの 気 が変わった。

遠くに何かが見える。そこは水晶の洞窟、そして四神に囲まれているラミレだった。四人の目には涙が浮かんでいる。ヒミキがラミレを抱きしめていた。ラミレはその顔に悲しげな優しい微笑みを浮かべていた。

雅は朦朧とした意識の中、鋭い痛みを胸に感じ悲鳴を上げた。目を開けるとそこには、かつて父と呼んでいた若い男と赤い目をした美しく艶めかしい悪魔、アミヤがたっている。彼女はいつものように、苦しんでいる私の様子を見ては舌舐りをして歓喜の表情を浮かべている。隣にある命の光がまた少しその輝きをなくす。

「何とも強情な娘だ。いいかげん、わらわにお前の全てを明け渡せ。わらわはやがてこの世界の女王となる。下賤なその身が尊い女王の器となり、皆に崇められるのだ。ありがたいと思え。」

声も出せないくらい弱っている雅は、顔をそむけることで精一杯の抵抗を見せる。

「雅。いいかげんにしなさい。あまり聞き分けのない事を言うもんじゃない。お前は女王になれるのだぞ。素晴らしいじゃないか。」

「な に が...！」

絞り出すように声を出す。するとその男は一変して残虐な表情に変わる。そして手の中にある物をきつく握りしめる。再び雅の悲鳴が上がる。その様子を見つめる男。逆に恍惚とした表情を浮かべるアミヤ。そんなアミヤを鼻先で笑い一瞥する男。

「これが何かわかるか？お前の心臓だ。お前が強情を張るたびにこの心臓は小さくなっていくということを忘れるな。」

そういうと、剣で手の中の心臓の肉片の一部を1位の大きさに切り取る。雅は鋭い悲鳴と共に意識が遠のいて気を失う。隣にある命の光がまた一段と暗くなった。アミヤの恍惚とした表情に艶がまし、ますます美しく変貌する。雅が本当の 死 に近づく度にアミヤの美しさに輝きが増していくのである。

「何とお美しい。一段と艶が増し、その美しさに益々磨きがかかっている。」

「それを独り占めしたいか？黒の長老よ。ついて来るがよい。寝室に行く...。」

「御意のままに。」

黒の長老はアミヤの腰に手を這わせながらアミヤと共に去って行った。しかし、御意のままにといったその言葉の中に軽蔑の意が入っていることにアミヤは気が付いていなかった。

セイは一人で不気味なその場所に佇んでいた。サファイアが埋め込まれている美しい剣を杖代わりにして、その体を支えている。短く荒い呼吸をしながら何かを探している。

「雅は何処に囚われているのだろう？ここまで苦もなくたどりつけたが...やはりまだ光の力が残っている身には応えるな。しかし全てが光の身ではない今しか彼女を助けるチャンスがない。木の一つ、小枝の一本でもあれば雅の囚われている場所がすぐにわかるのに...。」

改めてその荒涼とした土地を見回す。その場所から十メートルほど離れたところに小さな雑草の花を見つけた。こんな荒涼とした土地にも花は咲く...セイは思わず笑みを浮かべた。重い足を引きずりながらその花に近づく。あたかも震えているように揺れているその花の上にそっと手をかざす。ここは敵の土地、私の力がわからないはずがない。私に気が付くまでにどの位の時間がかかるのか、それが問題だ。彼等が私の前に現れる前に雅を助け出さなくては。私は死ぬかもしれないな...ラミレ、私を見守ってくれ。セイは呪文を唱える。

「大地に生まれし命、その小さき者。母なる大地の下、大いなる眠りより目覚め、我が問いに答えよ。春を

支配し草木を司る青龍が命ずる。」

その花が光輝き、一本の道があらわれた。その先に見えたもの、それはまさしく哀れな雅の姿だった。青白い顔に真っ青な唇。女王然としていた面影など何処にもない。セイは迷わずにその道をまっすぐに進んでいった。

美麗は長い間夢を見ていたような気がした。自分の体に戻るとそこはよく見知っている寮の部屋だった。改めて周囲を見回す。すると見えていなかったものが見えてきた。そこは結界を張り巡らせてある、toujours 国のヒミキの宮殿だった。美麗は立ち上がり、その部屋の一ヶ所にまっすぐ腕を伸ばし呪文を唱える。アストラル・ロードが開き、一本の道が現れた。その先にはあの洞窟が見える。周りを氷に囲まれた荒涼とした土地。光を拒む薄暗い地底の国、闇の一族の土地である。そこには有園 雅が囚われている。

美麗は迷わずその道に出るとまっすぐに進んでいった。

「面白い。」

「アミヤ様？どうかしたのですか。」

「あの洞窟に大きなネズミが現れたぞ。半分闇に囚われている青いネズミが。」

「ほう。まだ生きていたのですか。さて、どう処分しましょうか。このまま一気に奴の命を奪ってしまいませんか。」

「それでは面白くない。」

「ではいかがいたしましょう？何か良いお考えがありますか。」

氷のごとく冷たい目をした美しい風貌を持つ男、黒の長老サイドは残虐な笑みを浮かべた。

「青龍の光の力を全て闇に変えて黒青龍としわらわの下僕にしてやろう。奴にとってはまたとない屈辱だろう。そしてヒミキをはじめ、コウとハクリをセイ自身に始末させる。その後にはゆっくりと奴を始末してやる。セイよ、苦しみぬいて死ぬがいい。四神がいなくなったその時こそ、この世界は我等のものとなる！サイド、洞窟に行くぞ。セイを歓迎してやらねばなるまい。」

セイはその場で声を失っていた。氷の壁の中には何人もの人間の魂が凍っていた。いつの間にかこんなに大勢の罪もない人達を捕らえていたのか。私一人の力では助けられない。

「許して下さい...私には何もできない。」

セイは絶望の言葉をつぶやくことしかできなかった。魂の光に導かれるように奥へと進む。やがてその場所が見えてきた。自然と足が速くなる。

「雅！」

セイの声に気が付いたのか、彼女の体が一瞬だけピクリと動いたが、その顔をセイに向けることはなかった。

「美麗？」

部屋に戻った氷美城は、雅に関する情報をもっと詳しく得ようと美麗をさがしたがどこにもいなかった。ベッドを触るとまだ少し暖かい。それは少し前までそこに美麗がいた証拠である。彼女はいったいどこへ行ったのか。やはり彼女には私の呪文も効かない。彼女はいったい...？彼女は果たして敵なのか、味方なのか。

「枯渴した大地を潤す水、新しき命を生む大気、心の闇をも温める炎、全てを見つめてきた天の大車輪よ、我が言葉を聞け。出でよ、偉大なる時の門。」

一陣の光が出現しその中に美麗の姿があらわれる。

「アストラル・ロード？ばかな！普通の人間がいける場所ではない。彼女の命が危ない！美麗！戻れ。」

再び呪文を唱えるがそれがはじき返されてしまった。美麗は苦しむ様子もなく、周りが見えていないかのようにひたすらまっすぐに進んでいく。その先には敵の土地が不気味な黒い影をみせていた。

「ヒミキ様！」

ヒミキの異変に気が付き、コウ、ハクリ、優香（ユア）がその部屋に飛び込んでくる。そして同じようにそれを見つめ絶句する。

「彼女は何者なのですか？」

冷静さを取り戻したハクリがヒミキに問いかける。ヒミキは黙って横に首を振る。

「とにかく彼女は敵の土地に向かったということは事実だ。我々も後を追わねばなるまい。そこで初めて彼女が何者であるかわかる気がする。」

水晶の洞窟では、銀水晶の姫 ラミレ が再び目を覚ましていた。そしてゆっくりと水晶のベッドより起

き上がりその場に立ち上がった。そして天に向かってその手を大きく伸ばした。彼女の周りで黒のオーラ、青のオーラ、白のオーラ、そして赤のオーラが次々と光となり、最後に黄のオーラがひときわ輝きをまして現れ、それら五色のオーラが一つの銀の光条となり彼女の周りを覆う。そして“美麗”ともう一人の自分に呼びかける。

美麗はひたすら歩みを進めていた。急がなくては！彼女に 真の死 が訪れてしまう前に、尊き力が闇に侵されてしまう前に！美麗は一時、立ち止まる。が、すぐにまた歩みを進める。侵入者を排除しようとする者達と戦いながらひたすらに突き進んでゆく。いつの間にかその手には銀水晶の剣を持っていた。ラミレと美麗は心で会話をしていた。

『ラミレ、この剣はあなたのものなのね。』

“そう、そしてあなたのものでもあるわ”

『いいわ。仮にそれが本当だとしましょう。そうだとしたら二人の形成された人格はどうになってしまうの？どちらかが消滅しなくてはならないのかしら？』

“それは違う。確かに長い年月がたちラミレと美麗という二つの人格が形成されたことは事実。でも魂の根底はひとつ。私は美麗という人間の中の一部にある人格であり、美麗はラミレという人間の中の一部にある人格”

『人間...私は確かに人間だけど、あなたは人間なの？あなたの持つ力はとても人間の超常力とは思えない』

“ただの人間だわ。この力はあの方から授かったもの...”

『あの方？』

「ついたわ...。有園さん、そして東川先輩。すぐに行くから...！」

美麗の手の中の銀水晶の剣はいつの間にか消えていた。そこは地獄への入り口のように、不気味な漆黒の闇が続いている。美麗は一瞬怯み、一步後退りをしてしまう。怖がらないでという声が聞こえ、決意をするように1回大きく深呼吸をして頷くとそこに一步足を踏み入れた。

「雅！」

セイの呼びかけでうっすらとその目を開ける雅。

「セイ、助けに来てくれたのね。ありがとう...早くこの鎖を外して。お願い！」

「待っていて。すぐにその鎖を外すから。」

セイが近づくとその顔にはにやりという不気味な笑みが浮かんだ。セイは鎖を外そうとその手を伸ばすが、次の瞬間、雅の頬にセイの剣がむけられていた。

「何をやるの？早く助けて。」

「それまでだ。アミヤ。」

「何を言っているの？私は雅よ。」

「いつまで芝居を続けるつもりだ。雅なら 東川 青 は知っているも、トウジュールの セイ は知らない。この姿を雅に見せたことはないからな。」

すると雅は一変して不愉快な嬌声をあげる。

「何と愛想のない奴だ。少しはわらわの芝居に付き合ったらどうだ。」

「あいにくだな。お前に愛想がいいとは言われたくないし、ばかげた芝居に付き合っても思わぬ。」

雅は何処だ？」

「ここにいるぞ。」

アミヤの後ろから声が響く。そちらを向くと雅が黒の長老サイドにその腕をつかまれて人形のようにだらしとしている。その顔に生气はなく唇は真っ青になっている。

「この女が欲しいのだろう？くれてやる。」

サイドは乱暴に雅を突き倒す。その場に人形のように転がる雅。セイが助け起こそうと雅を抱える。

「雅？ 苦しい...！」

雅はその腕をセイの首に伸ばすとその手で絞めつける。彼女の瞳の色は真っ赤になっていた。だが、急にその手を外す。その瞳は黒に戻っている。

「だめよ！ 人を殺すの？ 何を迷っている！ 殺せ！ 殺してしまえ！ だめ！」

雅は自分の中に作られた闇の人格と葛藤していた。

「何をしている！ 早くそいつを捕らえろ！」

サイドの怒声に逆らうかのようにその手で耳をふさぐ。サイドが手を握りつぶす。雅が鋭い悲鳴をあげる。サイドは何度も同じ動作を繰り返す。雅は白目をむきながら、口から泡を吹く。その目には涙が光る。

「きさま！ 雅に何をしている？」

サイドは不気味な薄気味悪い笑みを浮かべるとその手の中を開いて見せる。そこには、明らかに小さくなったとわかる心臓があった。そして腰につけている短剣を出すと、その心臓を切り取って見せる。雅に断末魔のような悲鳴があがる。

「天にありて、東を守護し木を司る青龍が命ず。遙かな時を隔てた太古の木よ！ 我に力を与え、目覚めよ！」
大木が出現しその枝が延びるがサイドとアミヤは平然としている。その顔には余裕の笑みさえ浮かんでいた。

「何！」

本来ならば、サイドとアミヤを攻撃するはずの枝がセイに向かって延びてきた。その枝はセイの体に巻きついてきた。そこには鋭い棘がありセイの体を突き刺す。

「くっ。忘れたか青龍よ。ここは闇の土地。いくらお前が光の呪文を唱えようと通じない。ましてお前の中には闇の気が入り込んでいる。お前が呼んだ木は天樹ではなく、闇に生息する闇の木だ。その鋭い棘が開ける穴からお前の持っている光の気は流れだし、逆に闇の気をお前の中に取り入れることだろう。天を翔る青龍は滅び、地の底に這う青龍の誕生は時間の問題だ。その地獄のような痛みに苦しみぬくがいい。さぁアミヤ様。宴会の準備を始めましょう。」

地底の国への入り口にはヒミキ、ハクリ、コウがたどり着いていた。光の力を感じ、闇の地はうめき声のような地響きをたてている。光を拒むように大気が揺れる。出ていけとでもいうように...。ヒミキが短い呪文を唱えると、大気の揺れがおさまり、風さえも吹くことをやめる。あとは気が遠くなるほどの静寂が広がる。そんな中、その入り口に水をまき呪文を唱えるヒミキ。一条の光の道が、地の底へまっすぐにのびていく。

「この一条の光の道のみが、我らの結界だ。ここから一步でもはみだすと、たちまちこの世界の崩壊が始まる。心して進め。行くぞ...。」

朦朧とした意識の中、セイは遥か昔の幸せだった時の事を思い出していた。愛しい柔らかな声が聞こえる。

“セイ様。見事な薔薇が咲きました。嬉しくて持って来たの。綺麗でしょう？”

「ラミレ...。」

その顔に笑みが浮かぶ。しかし次の瞬間、鋭い痛みになさなうめき声上がる。体を感じる痛みではない。その心に浮かぶ映像に苦悩しているのだ。それは闇に染まった自分。髪は真っ黒になり、その目と唇が異様に赤い。そして嬌声を上げる闇の自分をその剣で刺し殺す。自分で自分を殺す悪夢。メビウスの輪のように繰り返される映像は普通の人間であればとうに精神的に参っている状況だ。意識が遠のく中。自分を呼ぶ声が聞こえた。

「セイ！」

「サイド。祝杯を挙げている場合ではない！あの洞窟に、ヒミキ、ハクリ、コウがいる。」

「そのようだな。これこそ千載一遇のチャンスだ。皆、まとめて始末してやる。」

「待て。ただ始末するだけでは面白くない。またとない苦しみを味わわせてやろう。」

「お前は引っ込んでいろ！自分の恨みだけに凝り固まっている愚かな女め！」

「わらわに対して何という事を！気が狂ったか。黒の長老よ。」

フンと鼻先で笑うとサイドはアミヤを振り払い、その頭に手を伸ばし、呪文を唱えた。

アミヤは苦しみに悶え、地にころがり、のたうちまわる。そして人形のように壁によりかかると硬直する。

その瞳ばかりが動き、恨みの目をサイドに向ける。

「お前の恨みなど私の恨みの比ではない。お前は、単なる私の快樂と傀儡にしかすぎぬ！」

「ヒミキ様！ここに来てはいけません。あなたの命が危ない。」

「そなたを見捨てよというのか。そんな事はできない。今助けるから待っている。」

「いいえ、私の半分はすでに闇に取り込まれています。青龍としてあなたにお仕えすることはできません。」

「そんな事は承知している。何であろうとそなたは私の大切な右腕だ。」

遠くより不快な笑い声が聞こえる。そちらを見ると黒の長老が立っていた。

「何とも麗しき友情。その友情に敬意を示し、皆まとめて地獄へ落としてやろう！」

サイドの言葉と同時に、茨の木はヒミキたちにその刃を向ける。剣を向けたが、それが近づいたとたんにその剣を引くヒミキ達。よく見るとその枝は、人の姿をしている。それは、魂を抜き取られた罪もない人々の叫びだった。

「卑怯者！それでも長老といわれている者か！」

「何とでもわめくがいい。ここは闇の地、我が体内のようなもの。お前たちはここで命を落とすのだ。お前たちが助けようとした人間どもの餌食となつてな。」

「そんな事はさせない！」

闇の中に銀色の光が現れ、その暗い壁を引き裂いた。サイドがその顔を隠すように腕を上げた。

「この闇の壁を引き裂くとは！お前は何者だ！」

「わたくしを忘れたか。黒の長老よ。」

そこには銀の剣を持った美麗がたっていた。目を凝らして彼女を凝視するサイド。やがて思い出したかのようにつぶやく。

「ラミレか。何とお前も転生していたのか...！」

サイドは遠い古の記憶を蘇らせた。何としても手に入れようとした、美しい銀水晶の姫。かの大戦の終わりの時に、あともう少しで手に入るはずだった。ラミレが自らの命を絶つことさえしなければ...。そんな思いを振り払うようにして首を横に振ると、その剣を彼女に向ける。目の前にいる彼女は、その当時よりも、力強い美しさに光り輝いている。

「因果なことだ。所詮そなたと私は戦う事が宿命なのか。それならばいっそ我が手でその命を絶つ！」

一時的に治まっていたヒミキ達への攻撃が再び始まり、サイドと美麗の剣の火花が散る。

やがて美麗の剣が弾かれる。サイドは自分の剣を美麗に向けた。美麗は微動だにせず、美しい薄紫色の目でサイドを見つめる。その時、赤黒い光の矢が美麗に向かってきた。すばやくサイドが美麗をかばう。その場に倒れるサイド。それを抱き起こす美麗。

「何故？」

サイドは薄く目を開けるとそっと美麗の頬に手を当てて、幸せそうに微笑む。

「 やっと、サレイ様の下へ行けます。サレイ様とラミレ様に永遠の忠義を誓います。」

「サイド...。」美麗の目に涙が浮かぶ。

サイドは、かつてラミレの父親とラミレに仕えていた、若き近衛連帯長で第一の騎士とたたえられていた。そしてラミレの乳兄弟であり、彼女が兄のように慕っていた若者だった。サイドは、心ひそかにラミレを一人の女性として愛していながら、身分の違いからその心を隠して、妹のようにかわいがっていた。どんな手段を用いたのかは不明だが、闇の一族は彼に目をつけると彼を闇に取り込み、傀儡としていたのだ。しかし、彼の心は闇に染まりながらも、一人の人間としての人格を忘れず、闇の力を自分のものとして長老までに上り詰めた。ひそかに闇の一族に対する恨みを持ちながらもサイドという人間として生きてきたのである。彼もまた闇の犠牲者の1人であった。

サイドの体内より不気味な赤黒い煙があらわれた。それが美麗を襲おうとする。サイドの命を奪った赤黒い光の矢が飛んできた方を見ると、そこには血よりも赤い目と赤い唇を持った女がぎらぎらとした恨みの目で立っていた。

「サイドめ！よくもわらわを長いこと謀りあって。底のない闇で永遠にさまよい続けるがいい。」

サイドの体内にあった赤黒い煙が一本の太刀となり、その胸めがけて突進してくる。だが、それを銀色の光が弾き飛ばした。

「こざかしい！」

今度はその太刀が美麗を襲う。それは美麗の胸に突き刺さった。アミヤが狂喜の表情を見せる。だが美麗が倒れることはなかった。代わりに彼女の周りで黒のオーラ、青のオーラ、白のオーラ、そして赤のオーラが次々と光となり、最後に黄のオーラがひときわ輝きをまして現れ、それら五色のオーラが1つの銀の光条となり彼女の周りを覆った。流れるように長い淡い金髪、薄紫色の瞳、金色に輝く額飾り。ヒミキが持っている呪文書が、彼女の銀水晶の剣に吸い込まれていく。その姿はまさしくラミレに他ならない。

「おのれ。お前は銀水晶の！生きていたのか　！」

「銀水晶？何の事か私にはわからないわ。」

「黙れ！わらわが憎いお前のことを忘れるわけがない！今度こそ、けりをつける！」

アミヤが自ら剣を取り出す。美麗の光輝いている銀水晶の剣とは反対に、彼女の剣は黒い不気味な輝きを放っていた。再び、ヒミキ達への攻撃も開始された。美麗はわけもわからずにただアミヤの剣と火花を散らす。やがて美麗の剣がアミヤの剣を弾き飛ばすとその刃が折れた。アミヤにその切っ先を向けるがそれを青黒い光が弾き飛ばした。そちらを見ると、真っ黒な髪と、血よりも赤い目と唇に変貌したセイが立っていた。アミヤはそれを確認すると勝ったかのような笑い声をあげ、セイに命令を下す。

「いけ！その女の命を奪うのだ！」

再び青黒い光が美麗を襲う。美麗が素早くそれをかわす。ヒミキがそれをかばおうと動く。

「来ないで！ヒミキ！私は大丈夫だから。」

「ラミレ！」

ヒミキのその言葉にピクリと眉を動かす美麗。

「そう。確かにラミレかもしれない。かつての私はあなたに頼ってばかりいた。でも、今ここにいる　ラミレ　はあなたに頼ってばかりいたか弱い者にはならない！自分の身は自分で守る。ここにいる　美麗　はラミレ　であり『ミレイ』なのだから！」

すると彼女の周りに金色のオーラがあらわれ光の矢が現れる。それをまっすぐセイの胸に突き刺す。

「目覚めよ！本来のお前を取り戻せ！東の守護神にして春を支配し木を司る者『セイ』。聖なる青龍よ。」

その言葉に反応するようにセイのオーラがどす黒い青から本来セイが持っている銀青色のオーラに変化する。セイは気を失うとその場に倒れこんだ。

「おのれ！何が何でもその命を奪ってやる。我が力にしてわが友、恨みを消せぬままに地底の底に這いずり回る哀れな魂どもよ、我が声に応え、その姿を現すがいい、深淵に広がる闇よりもなお深い闇の者どもよ！」

地響きのようなゴォーという音が立ち、真っ黒な大きい穴が出現した。その中より、様々な魍魎魍魎が出現した。生き者の匂いがする！どこだ、どこにいる？その血をよこせ！その肉をよこせ！目玉をくりぬきその心臓を喰ってやる！手足をもぎとり、貪り喰ってやる！ぞっとするような声が鳴り響く。

自然とヒミキ、ハクリ、コウがミレイを囲む。前からはアミヤが率いる地獄の者どもが迫ってくる。しばらく対峙しあう時間が続いたが、ついに地獄の亡者どもがヒミキたちを襲う。

光の結界が張られ、亡者どもが悲鳴をあげる。

「光の結界を張ったが、いつまで持つかわからない。」

後方からは、人々の叫びで作られている魔界樹が襲ってくる。セイさえ目覚めてくれればこの危機を容易に脱出できる。結界の中でミレイがセイを介抱している。ヒミキ達を気遣いながら。

まさかこんな展開になるとは思いもしなかった。何故こんな事になってしまったのか。それは桜木　美麗としての不安だった。ラミレ　と　美麗　のふたつの魂を持つ『ミレイ』だが、強い不安に駆られてしまい、16歳の女子高生　美麗　が顔を出す。お父様、お母様。思わず心の中でつぶやいてしまう。その不安に共鳴するように光の結界が揺れる。

「すまない、美麗。恐ろしい思いをさせてしまって。」

美麗としての不安がヒミキに伝わってしまったのか、ヒミキがそうつぶやく。脳裏には悲しげなラミレの姿が現れた。ああ、そうだ。不安になっている暇はない。私は　ラミレ　であり、『ミレイ』なのだから。何とんでもこの危機を乗り越えなくてはならないのだ。いや、必ず乗り越えてみせる。ミレイは気丈にも真っ直ぐに顔を上げる。その顔は先程の不安の欠片など微塵もみせていなかった。

「大丈夫です。ヒミキ様。ご心配をかけてしまって申し訳ありません。」

「美麗...。」

「『ミレイ』です。」

そう言い切る彼女のオーラが再び、金色に輝きだした。それでも心配そうに見つめるヒミキに話しかける。

「確かに不安になった事は事実です。まだ戸惑っていることも事実。でも必ず克服して見せます。これが、ラミレ と 美麗 として生きることが私の宿命なのだと思いますので。」

その力強い言葉を証明するように、ミレイのオーラが一際大きく輝いた。

「あなたのその金色に輝いているオーラは何だろう。ラミレ のオーラでもなく、美麗 のオーラでもない。toujours の美しいオーラと人間の力強いオーラが調和しているのだろうか。」

「それは私にもわかりません。ただ ラミレ と 美麗 に共通していること、それはこの美しい世界を守りたい、人々を守りたいという気持ちのみです。」

その時しびれを切らしたのか、亡者どもが光の結界に体当たりをしてきた。例え燃え尽きて消滅してしまうとわかっていてもそれをやめない。いや、そもそもその事をわかっているのかさえも不明である。ただアミヤに操られ行動しているのみである。振動を感じて、ミレイがよろめく。それを支えるヒミキ。大丈夫というとき再び目を閉じて横たわっているセイの近くにいくと、癒しの呪文を唱える。それは結界の全てに広がり、ヒミキ達の心をも癒す。その柔らかい音楽のような声は、古の時と少しも変わっていなかった。しばしの間、その幸せだった時に思いを馳せる。

だが、不愉快な振動と声にそれを阻まれてしまう。とうとう結界の一部にひびが入ってしまったのだ。亡者どもは、そこから侵入しようと手を伸ばす。その手を剣で消滅させながら、修復の呪文を唱える。ミレイは怯えていないだろうか。心配になりミレイを見つめる。そこには呪文に集中している彼女の姿があった。背筋を伸ばし凜としているその姿は、神々しいまでに気高かった。ヒミキは再び修復の呪文に集中する。

業を煮やしたアミヤが最後の手段とでもいうように亡者の兵士の前に出てくる。

「これを見る！」

そこには雅の姿があった。一段とやつれて頬がこけている青白い顔の彼女はまるで死人のように見える。

「この女がどうなってもよいのだな。何が人類の王だ。人間の1人も助けられない者が片腹痛い。それともこの女が死んでいるとでも思っているのか？」

そういうと、手のひらを広げて見せる。その中には直径が3ほどしかない雅の心臓があった。残虐な笑いと共に、それを握りしめて見せるアミヤ。それに悲鳴を上げ、泡を吹く雅。あまりの非道さに思わず目をそむけるヒミキ。再びその心臓を何度も繰り返し握りしめるアミヤ。雅の悲鳴が響きわたる。

「やめろ！それ以上雅を傷つけるのは許さない！」

アミヤはケラケラと笑うと、ヒミキを挑発するような言葉をはく。

「やめろ？許さないだと？そんなところに閉じこもっているお前に何ができるというのだ！この心地よい悲鳴。何度聞いても飽きぬ...。」

そういうとうっとりとその手を握りしめる。とうとう雅が白目をむき地に倒れこむ。

「おや。少し強く握りしめすぎたか。とうとう気を失った。かすかに鼓動が聞こえているからまだ死んではいないな。全くこの女も強情な事だ。だいぶ楽しめた事だし、いっそのことこのまま消滅させてやろうか。」

そういうと黒い剣を雅の心臓に向ける。

「よせ！何が望みだ！」

思わずそう叫ぶヒミキ。残虐な笑みを浮かべ、舌なめずりをするとアミヤが口を開く。

「我が望みを聞くというのか。あいにくと何も思いつかない。」

そういうと再び雅の心臓に黒い剣に向ける。

「おおそうだ。まずはその中から出てくるがいい。その女も一緒に、だ。」

「それは...。」

「できないとでもいうのか？ではやはりこの女を...。」

「よしなさい！お前の望みをかなえてやる。」

「ミレイ！だめだ！」

「それ以外、彼女を助けることはできないわ。ヒミキ。」

死ぬかもしれないという時に人間はこんな目をするのだろうか。何もかも悟ったように落ち着いた美しく澄んだ瞳。守って見せる。例えこの身がどうなるうとも。ヒミキは思わずミレイを抱きしめる。そして顔を見合わすと顔きあい、光の結界から一歩足を踏み出す。亡者どもがその足に纏わりつき体を這い上がる。獲物だと嬉々としながら。しかし所詮は闇の者。ヒミキに触れた途端に悲鳴を上げて塵と化す。

だがミレイは違う。どんなに超常力を持っていようと人間だ。彼女の体には魔物どもが付けた傷跡が残る。その傷から血が流れている。ヒミキは彼女を守るように脇に抱えている。そんな様子を見たアミヤが離れろと怒鳴りつける。それでも離れようとしないうヒミキにミレイが、私から離れてというように小さく首を振る。不安に駆られたまま、ヒミキは彼女の側から離れる。彼女は再び銀水晶の剣をふるいながら、化け物と戦い傷つきながらも前をキッと見つめ、背筋を伸ばして歩みを進める。

「エモノダァ～」

その瞬間を待っていたように一匹の魔物がミレイの首筋に噛みついた。彼女はその場に崩れ落ち、美しい薄紫色の瞳は固く閉じられた。その瞬間、ヒミキはその場に凍りついた。そして、クレアとサレイの言葉が頭に渦巻く。この世のものではなく、深い闇よりもなお深い闇より出てくる魑魅魍魎どもと1人で戦っている夢です。その手には何故か銀水晶の剣をもっておりました。しかもあの娘は血にまみれておりました。それでもなお、その洞窟で戦っていました。そして最後にはとうとう力尽きてその場に倒れ、その命が尽きる夢です。

ヒミキの脳裏にかつての悪夢が走馬灯のように蘇る。誰よりも愛しいその人は、ヒミキの腕の中で死んでいったのだ。ほんの数秒前には暖かかった温もりが、徐々にその熱を失い、とうとう氷のように冷たくなった。どんなに抱きしめても、二度と愛しい人に暖かい温もりが戻ることはなかった。ヒミキの心には絶望という名の荒涼とした大地が広がるだけだった...。目を開けてくれ！二度も私をおいていかないでくれ。ヒミキがミレイを抱き起す。しかしその瞳は固く閉じられたままだった。

「ミレイ！」

アミヤの高い嬌声が響き渡る。

「ヒミキよ。その冷たい軀をいつまでも抱いているがいい！」

ヒミキが絶望で肩を落としたその時、闇に届くはずのない一条の光が出現した。初めは細い光であったが、やがてそれは光の雨のように降り注ぎ、最終的には目を覆うほどの眩い光の洪水となった。そして奇跡が起こった。

死んだはずのミレイの体が宙に浮き、その光の中でラミレの魂と美しい魂が現れ、ミレイの体の中に吸い込まれていく。二つの魂は一つに溶けあって完全にミレイと融合したのである。

力強い光は地底の闇を金色に覆いつくし、全ての闇の者が悲鳴を上げながら消滅した。

「そんなバカな！」

これがアミヤの最期の言葉となり、薄暗い地底の国に、太陽の柔らかな日差しが差し込み、枯れ木に新しい命が芽生えた。渇水していた川にはきらめく水が流れ、砂漠のような大地に潤いをもたらした。しおれていた花達は、再び蘇った春に歓喜して、その美しさを競うように次々と大輪の花を咲かせた。その光の中には花よりも美しい女神が微笑みながら佇んでいる。

そして闇は沈黙したのである。

そこには美しい女性が立っていた。見事に咲いたバラの花を愛する人たちのために摘んでいる。彼女の顔には、そこに咲き誇るバラの花に負けにくいくらい華やかな笑顔が浮かぶ。奥の宮殿から楽しげな声が聞こえてきた。彼女は両手いっぱい抱えきれないほどのバラの花を持ってその部屋に向かった。そこには4人の美しい王が優雅に腰を下ろして談笑していた。

「見て！こんなにも美しくバラの花が咲いたのよ。」

「とても見事なバラですね。さぞ香り高いコクのあるバラ茶が作れることでしょう。」

「それもいいけど、美味しいバラのケーキを作ったらどうだろう。」

「私は両方作ればベストではないかと思えます。バラ茶にバラのケーキ。最高でしょう。」

「みんな、何てことを言うの。飾って愛でようという意見が全くないじゃない。」

少し拗ねた彼女の顔がかわいくて思わず笑みを漏らす。

「まあまあ。一番いいのは、少しの間だけ宮殿に飾り付けてその美しさを愛でてから、お茶とケーキを作って美味しくいただければいいだろう。」

「何それ！結局はバラの花を食べてしまうという事じゃない。ひどいわ！」

「セイの作るバラ茶とコウが作るバラのケーキは絶品だと知っているだろう？」

「それはそうだけど…。いいわ。妥協してあげる。だけどすぐに作ったら許さないからね。必ず部屋に飾って、しばらくの間はその美しさを愛でてからだからね。」

「はいはい。」

「セイは紫色のバラ“エミネンス”を、コウには赤いバラ“ノアール”、ハクリには黄緑色のバラ“ジェイド”を、そしてヒミキには白銀色のバラ“メタリナ”を。」

4人に薔薇を渡した後、念を押すように言葉を付け足す。

「いいわね？絶対に宮殿に飾るのよ？」

「わかった、わかった。」

彼女は満足そうに微笑んでいる。

「ご機嫌様。」

あちらこちらで挨拶が交わされ、美しい荘厳な鐘の音が鳴り響き、今日一日の授業が終了したことを告げる。ある者は放課後のクラブ活動へ、またある者は寮に向かう。

毎日そんな穏やかな光景が展開されているここは、東京郊外に位置する全寮制の、とある女学院。幼稚舎から大学部までの一貫教育を行っている由緒正しいお嬢様学校である。

「美麗さん。ご機嫌様。今日はこれからどちらの部に行くの？」

「そうね。今日は乗馬部に行こうかしら。有園さんは？」

「私もそうするつもりだったの。ご一緒しましょう。」

「ええ。ご一緒しましょう。優香は？」

「私も今日は乗馬部よ。早くいきましょう。」

3人は仲良く乗馬部の部室へ向かった。馬場に着くと、氷美城が首を長くして待っていた。

「3人とも遅い！今日は西の自然の馬場に行く予定だったでしょう？日が暮れるまで待たされるかと思ったわ。」

「きゃー！氷美城様ぁ！素敵い！」

黄色い歓声にニッと愛想笑いを浮かべるとちょっと手を振り騎乗する。

「相変わらず、すごい人気ですわね。氷美城様？」

騎乗した隣で美麗がいたずらっぽく話しかける。

「何？その皮肉っぽい言葉は。こっちはえらい迷惑だというのに。」

「おや？鼻の下が延びていますよ。氷美城？」

後ろから走ってきた青が厭味ったらしい言葉を投げかける。

「青！いつの間に？何で乗馬部にいる！」

「あぁ。今日から乗馬部にも在籍することに決めたんですよ。よろしく。氷美城先輩 美麗、一緒に走りましょう。そうそう。美味しいお茶が手に入ったから、部活後に生徒会室でお茶を飲みましょう。」

「喜んで」

「こら！神聖な部活動で軟派な事をするんじゃない！」

「氷美城！青の美麗さんに対する行動ならいつもの事じゃない。何で気にするの！」

雅が少し焼きもち声で氷美城を呼ぶ。そんな会話を楽しそうに笑いながら聞いている優香。季節はさわやかな秋を迎えようとしていた。

美麗は寮の部屋で美しい月光をうっとり眺めていた。ここちよい風に吹かれながら、木々のささやきを聞く。そんな美麗に後ろからそっと上着を着せると氷美城がささやくような声をかける。

「風邪をひいてしまう。中に入った方がいい。」

「ありがとう。氷美城先輩？何？」

「少しの間だけでいいからこのままでいてほしい...。」

「ヒミキ。」

ヒミキは後ろからミレイをそっと抱きしめていた。かつての記憶が鮮やかに蘇ってくる。何よりも愛しい人。私のラミレ、我が永遠の恋人...。そんなヒミキの想いが伝わったのか、ミレイはそっとその腕を抱きしめ返した。

「ごめんなさい。ラミレではなくて...。あなたはどんなにかラミレを待っていたことでしょう...。」

ヒミキはミレイからふっと離れ、自分の方に向かせると優しい笑顔をむける。

「何故、あなたが謝る必要がある？謝るべきは私の方なのに...。今はただ、月光の光を浴びていたあなたがあまりにも美しくて 許しておくれ。さぁ、消灯時間になった。明日の授業に備えて睡眠をとらないと。お休みなさい。」

「お休みなさい。」

電気を消した後もしばらくの間、ヒミキは美麗の安らかな寝顔を見つめていた。そして自問自答を繰り返していた。私は彼女の中にラミレの面影を求めているのだろうか。それとも彼女自身を愛し始めているのだろうか？古の記憶を懐かしんでいるだけとも考えられる。いずれにしても彼女を傷つけない。彼女を大切だと思っているのも事実なのだから。北の玄武、人類の王ヒミキといわれている者が自分の想いすらもわからないとは情けない事だ。今はただ、彼女の幸せを願うのみ...。

「安らかにお休み...。」

美麗は穏やかな笑みを浮かべて小さな寝息を立てながら眠っている。

ミレイは安らかに眠っているのだろうか。

セイは自分のベッドに横たわりながらミレイを思い、なかなか寝付くことができなかった。あの戦いの中、闇に囚われた時のことを思い出していた。何度も何度も繰り返し自分自身を殺す悪夢...。深い闇に陥り身動きができなかったあの時、彼女が私を救ってくれた。美麗は恐ろしさに震えながらも私の精神に入って

きて、必死に私を呼び戻してくれていた。

かつて私は、人々に北の玄武・人類の王ヒミキ様の右腕、第一の騎士よといわれながらも、あの人を愛することを止められなかった。忠義を誓っている王の想い人である女性を愛しながら、その心を隠し王に仕える...とんだ忠義者だ。彼女を思う事は王に対する第一の裏切りだというのに。

因果は巡るとはよく聞くが、再び同じことを繰り返すのだろうか。彼女はラミレであってラミレではない。ラミレと美しい魂が融合した ミレイ という全く別の人格を持った1人の人間だ。だが、確かに彼女を愛し始めている。ヒミキ様はどうなのだろうか？今は何も考えたくない...。お休み、愛しい人。私はあなたの夢を見よう。

「何を思っているの？」

妻は愛する夫に声をかけながら、紅茶を入れる。

「あなたは私と結婚して本当に幸せなのだろうかと考えていたのだよ。かつてのあなたは大神官としての地位と名声があり、その身は人々の尊敬を一心に集めていた。そしてその事を誇りに思っていたらう？」

「わたくしにとって、地位や名声などはどうでもよかった。ただ、愛する人と一緒になりたいと思っていたわ。でも先の大神官様より後継者として指名をされて、その願いは叶えられない儚い夢となってしまった。だからこそ、その夢を自分の胸だけにおさめて、ひたすら大神官の修行に励み人々には『偉大なる大神官クレア』として知れ渡るようになった。でも、そういわれるほどわたくしの胸には虚しさが広がったのも事実。たまに顔をあわせてお茶を飲みながら話す、幼馴染との時間がどれほど待ち遠しかったかあなたにはわからなかったでしょう？わたくしの愛する方にはすでに奥様もいて子供もいたし、わたくしも大神官という立場だったから、そんな思いをひたすら隠し続けるしかなかったわ。とても苦しかった...。」

「それは...。私はどう応えたらいいのだろう。」

「でも今、その切ない想いをかなえることができたわ。あなたこそわたくしを愛してくれているのかしら？わたくしなんか妻でいいのかしら？」

不安げな顔を見せる妻をそっと抱きしめると力強く言葉を返す。

「愛しているよ。私と結婚してくれてありがとう。」

はるか古の頃、その国は確かにあったという。

神々がいて、自然と人間が調和し、光があふれ幸せな笑顔に満ち溢れている美しき国。

4人の美しい国王に守られ、貧富の差などなく、笑顔が絶えず、争いもない平和な国。

花が咲き乱れ、暖かい日差しに包まれ、人々は穏やかに暮らしているこの世の理想郷。

自然と会話をし、光の妖精と戯れ、静かな木陰のゆりかごに抱かれて眠る。

4人の国王の名は、ヒミキ、セイ、コウ、ハクリという名前だったそう。そして彼等の側にはいつも麗しい光の姫がいたという。彼女の微笑みは全ての国に幸せをもたらし、人々は心安らかな時を過ごしていた。逆に彼女が涙を浮かべるとき、この世は不幸に包まれて太陽さえも顔を隠してしまう。彼女は自然を愛し、人々を愛し、とても優しい瞳で世界を見つめていた。

神王に見初められた光の姫はその体内に神の子を宿し、大地の母、人類の女王となった。王と王妃とその御子は長い間、その国に愛と平和と富をもたらした。その国の名を toujours (永遠に光輝く) 国と名付けたという。その国が輝きを失わず、永遠に続くことを願いながら。

文明の発達とともに、その国の記憶は人々から薄れていってしまった。都会の喧騒に翻弄されコンクリートに囲まれた現代では、自然の緑さえも沈黙してしまい、その国の記憶さえも、時計では測れないほど遠い昔の伝説となってしまった。

人はただ自然を愛し、枯渴した土地に潤いをもたらす水、新しい命を生み育む大気、全ての者を温める炎に感謝をして祈りを奉げていた。人々は、空を優雅に舞うシルフィード、光の中で楽しそうに戯れる光の精、気難しいユニコーン、美しい声で歌う川の娘たち、これら全ての存在をその目で見つけ、会話することができた。鳥のさえずりで目覚め、月光の銀の糸で作ったシーツで眠る。

風の涼しいベッドで昼寝をし、太陽の柔らかい光の食物で空腹を満たした。誰もが素晴らしい力を持ち、神と人間の距離はとても近かった。今ではその力も一部の者に遠い記憶として残っているのみ...

お前はどこにあるのか

かつて神々が大地にたたずみ微笑んでいた美しき国

人間と自然が調和していた伝説の都

幸福の国

大いなる太陽に見守られ

優しい月の光に抱かれて眠る

人々は太陽とともに目覚め神々に祈りをささげる

暖かい昼の日差しを頬に感じ生命の輝きに感謝する

夜のやわらかな白い月光が人々に安息と優しいまどろみをもたらす

恋人達は花の中で愛を語り、優しいキスをそっと交わす

神々は願う

この時よ 永遠なれと...

追記。

この現代においてその国は人類に何を問うているのか。

「かの美しき国」は人に何を求めているのか...。その答えは誰にもわからない。

ただひとつ、人々は永遠の平和と愛を願っているだけである。冬の寒い日に、やわらかな木漏れ日を肌感じて、幸せを感じられる、そんな小さな幸福感。ただそれだけ...

その中で人々は、ちょっとしたことに喜びを感じ、理不尽なことに憤る。思いがけない出来事に哀しみを感じ、ひとかけらの楽しみを見つけ出す。

皆、一生懸命に生きて自分だけの 永遠に輝く国 を見つけるのだろう。

その後の toujours 国の行方？それは、全ての人々の心の中にあるだけである。

何よりも人々の幸せと平和を願った4人の美しい王と光の姫の物語は、永遠に続くのである。

(ル・フェロー家の古文書より)